「のうきん」の世界にやべー奴が現れたようです

Red October

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

周期的に滅亡の危機に晒されているこの世界。その原因はどうやら、本来この世界に存在しないはずの何かが異世界から召喚されていることにあるらしい。

その「何か」とは、果たして如何なる者であろうか。予想される１つの答えは、ここにある……

これは、大いなる戦と生き残りを賭けた物語。

（注意）

拙作の特徴を一言でまとめると、「しりあす＆ａｍｐ;シリアス　ａｎｄ　ｓｅｒｉｏｕｓ」です。つまり、原作や他製作者様の二次創作で見られるギャグ＆ａｍｐ;コメディ成分はかなり薄く、シリアス一直線の展開となる予定です。

また、原作では登場人物の死亡シーンは少ないですが、拙作ではモブだろうがネームドだろうが死ぬ時は死にます。それも、おそらくかなりあっさりと……。これを原作ブレイクだと非難される方もいらっしゃることを、私は覚悟しております。

以上の注意点をお読みいただいた上、それでも良いという方は……どうぞ、この先へお進みください。

目次

Ｃａｓｅ．１　燃ゆる溟海
第１話　災厄降臨 ―― 1
第２話　吹き荒れる災厄の火 ―― 17
第３話　突然の襲撃 ―― 31
第４話　深海からの挑戦 ―― 55
第５話　灼炎の帝王 ―― 70
第６話　獄炎に座す、覇たる者 ―― 94
第７話　黒（こく）焔（えん）盛んにして災異未だ止まず ―― 115
Ｃａｓｅ．ｉ　患（わずら）いの中央に在りし者
天を廻りて戻り来よ ―― 140

Ｃａｓｅ．１　燃ゆる溟海

第１話　災厄降臨

現在、「小説家になろう」のサイトに載せられた数ある作品の中でも、上位に位置する人気タイトル「私、能力は平均値でって言ったよね！（通称「のうきん」）」。同作品内では、交通事故で死んだ一人の日本人女子高生が、記憶や知識を持ったまま別の世界に転生していた。その世界は、過去に高度な文明があったにも関わらずその文明が滅び去り、そして今は世界中に危険な魔物が跳梁跋扈（ちょうりょうばっこ）し、文明レベルが明らかに後退している世界である。

具体的には、人類の武器は剣や槍。遠距離兵器は弓、城塞に備え付けるような大型兵器だと弩弓（バリスタ）が限界。火薬というものの存在は知られていない。そんなレベルである。地球で言うなら古代から中世にかけての時代くらいのレベルであり、かなり原始的と言わざるを得ない。

その一方で、異世界らしい要素もある。それは魔法。具体的には、かつてこの世界を管理していた神々が「大規模実験」として散布した「ナノマシン」が、人間を始め生物の脳内イメージや思考を読み取り、その内容を目に見える形で発現するものである。そして、この世界にはそうした魔法を人間よりも上手く扱える種族…はっきり言えばエルフ族、魔族、ワイバーン等の竜種、更にはこの世界で最強の生物と言われる古竜がいる。また、魔法は上手く使えないものの人間より強い膂力を持つ獣人族や、物作りを得意とするドワーフ族も存在している。

そして、この世界は度々滅亡の危機に晒されていた。その理由については、ナノマシンがマイルにほのめかしたところによれば「本来この世界に存在しない生物ないし存在が、この世界とは異なる別の世界から周期的に召喚されているため」であるようである。

これは、その「のうきん」の世界に文字通りの「やべー奴」が異世

界から召喚されたら……という物語である。

ここはオーブラム王国某所。このオーブラム王国という国は、東西に細長い形をした国であり、国土の北側は海に面しているものの、それ以外の方角ではどこかしらの国と国境を接している。そのため、自国を安定させるべく他国との関係強化に特に力を入れている。

そのオーブラム王国の中西部の一角、海岸線付近にある森の中。木々が切れて広場のようになったところに、夜更けであるにも関わらず怪しげな一団の姿があった。

服装はまちまちながら、唯一お揃いの黒いマントを着た男たちが30人、集まっていた。広場の中心部を囲むようにして二重の円陣を組んでいる。うち何人かの男たちは、円陣の中心部ではなく外側を向いて、魔術士がよく使うスタッフを構えていた。他にも剣や槍、弓を持った男もおり、それらの者は黒マントの下から甲冑を覗かせている。残りの者はスタッフを持ち、円陣の内側を向いて何やら怪しげな呪文らしきものを唱えている。

円陣の中心には、地面に敷かれた布の上に一人の男児が寝かされている。その頭部からは犬の耳が飛び出していた。おそらく犬獣人であろう。

この集団、いったい何をしているのかというと、犬獣人の男児を贄として、異界の神を召喚する儀式を行っていたのだ。

彼らは皆、とある宗教組織のメンバーである。組織に専門的に所属している者もいるし、本業は別にあって普通の信者として来ている者もいる。

その宗教の教えというのが、これまたロクデナシな代物であった。

まず彼らが信仰する神とは、『異界から現れる、強き力を持つ神々』なのである。

そして彼らの宗教教本（つまり経典）によれば、「大昔に何度か現れたその異界の神々は、この世界の神々と激しい戦いを繰り返し、ほぼ相打ちになった。そして異界の神々は元の世界へと戻り、それと同時にこの世界の神々も、人間をこの世界に残してどこかへ姿を消した」

とされる。そして、「その後人間達は、異国の神々の再度の侵攻に備えて、４つの種族をしもべとして生み出した。それが、エルフ、ドワーフ、獣人、そして魔族である」と捉えている。

そして、人間たちを置き去りにしてさっさと逃げ出したこの世界の神々にいつまでも義理立てするよりも、異界からの神々をお迎えし、その御加護を得た方が良いのではないか。逃げ出した神々は弱く、そして我々人間を見捨てたのだから、それらの神々はおらず、戻らず、そして我々に加護を与えてくれることもないのだ。ならば、新たな神を迎えるべきだろう。

そう考えるのが、この宗教の基本理念なのである。

その理念と経典の教えに基づき、彼らは異界の神にご降臨いただくべく、召喚の儀式を行っていたのだ。

以前、ここより遥か西のヴァノラーク王国とやらいう国で、かつての仲間たちの一部が同様の儀式をやっていて、敵の襲撃を受けて失敗した、という情報は彼らも掴んでいる。故に、今回は組織の主要メンバー全てと構成員の粗方を投入するという、かなり厳重な警戒態勢の下に儀式が行われていた。

この場にはいないが、儀式に従事している魔術士たち、それの防衛に当たる前衛職のメンバーの他に、森の中で警戒に当たっているメンバーもいる。それだけを見ても、厳重に警戒しているのが分かるだろう。

既に詠唱の第５段階までが完了している。あとは最終詠唱を行うだけだ。

「諸君、始めるぞ。詠唱準備。５、４、３、２、１、始め！」

リーダーである、教皇のような存在に当たる魔術士の号令の下、魔術士たちは詠唱を開始した。魔力が集約され、彼らの足元に描かれた魔法陣に注ぎ込まれていく。

彼らが行使しようとしている魔法は、「次元連結魔法」と呼ばれるものだ。要は、この世界と異世界を隔てるものを「次元の壁」と捉え、その次元の壁に意図的に穴を開ける魔法である。それによって、異世界

にいる存在をこの世界に招き入れようとしているのだ。

だが実は、彼らは知らない。その魔術が隣接する別の世界に上手く繋がったとして、そこからどんな存在が召喚されるのか、ということを。

というのも彼らの経典には、召喚される「異界の神」がどのような姿をしどのような性格なのか……といったことが書かれていないのだ。当たり前のことではあるが、経典は書物である。つまり、人がまとめたものである。ということは、この経典の編集にあたった者が「異界の神」に関する情報を持っていない限り、経典に「異界の神」の詳細な情報が記されることはないのである。

それ故に、彼らは知る由もなかった。彼らが発動させようとしていた「次元連結魔法」の術式が攻撃性を持ち、隣接する世界に干渉して……とんでもない結果を産み出そうとしていたことを。

呪文詠唱を続ける彼らの足元に描かれた円形の魔法陣、その輝きが少しずつ増していく。

と、不意に男児が寝かされている魔法陣の中心、その上空およそ30メートルほどの空間に、ビシリという鋭い音と共に白い亀裂が入った。それが次第に拡大していく。明らかに、何か巨大な存在が招かれようとしている兆候であった。

「「さあ出でよ、異界の神よ！　そして願わくば、我々に恩寵（おんちょう）を賜（たまわ）らんことを！」」

男たちが口を揃え、唱和する。その間にも亀裂はどんどん大きくなっていく。

次の瞬間、空にできたひび割れから不意に巨大な影が姿を現し、魔法陣の中心へと落下した。それが地面に落下した瞬間、

ドゴオオオオォォォォン！

轟音と共に大きな揺れが発生し、続いて魔術師たちの視界が大量の土煙によって覆われた。

茶色の煙幕がようやく収まった時には、空にできていた亀裂は閉じ

ている。そして魔法陣の中心には赤い光を放つ巨大な影が鎮座していた。その赤い光に照らされてよく見ると、地面の一部に赤い液体とボロボロの布切れらしきものが飛び散っている。そして、何やら焦げくさいような臭いが漂ってきた。

空にできたひび割れから現れた存在、それは非常に巨大であった。一目見た男たちは当初、現れたのは山か何かだと思ったほどだ。だが、召喚されたそれをよく見て、四肢と顔があることに気付き、そこでようやくそれが生物だと理解した。だが、そいつは少なくとも古竜クラスの大きさはある。自分たちが招いたとは信じがたいほどの存在である。

それは一見すると竜のようだが……この世界に生息する竜とはあまりに異なる形状と見た目である。全身を花のような真っ赤な鱗と岩石のようなゴツゴツした甲殻で覆っており、体表には火山から噴き出る溶岩のような赤く光るラインが走っている。そのラインを辿ると、最終的に心臓か両肩、あるいは尻尾の付け根にある、明るいオレンジ色の輝きを放つ部位にたどり着く。そこでは何かの赤い液体が循環しているような様子が見て取れた。太い2本の下肢に支えられた胴体の先には、長く扁平な首があり、その先端には天に向かって突き立った2本の角と紅蓮に輝く目、そして鋭い牙の生えそろった口を持つ顔がある。また、項(うなじ)にはオレンジ色に光る大穴が合計6つ、開いていた。よく見ると尻尾の付け根にも1つ、大穴が上向きに開いているようだ。

人間のように皮膚や体毛に覆われた場所はなく、竜種によく見られる特徴を持っていた。2本足で立ち、見上げるような巨体を支えたその姿は古竜に似ているが、古竜とは決定的に違う点があった。翼である。そいつには翼らしき機構はあるものの、翼膜が一切ない。まるで岩の塊を生やしたようである。

全体に見て神々しく、「これが神だ」と説明されても納得できそうなビジュアルである。しかし一方で、どこか禍々しさを否定しきれなかった。

「「……」」

黒マントの男たちは、突然現れたこの存在に圧倒され、声も出ない。それでも、彼らのトップに立つ教皇のような地位の……いわば最高指導者が最初に気を取り直し、口を開いた。

「す……素晴らしい！　よもや、このような存在を……」

だが、教皇に当たる男の感極まったような言葉は、出し抜けに遮られた。

グオオオオアアアアアアーッ!!

召喚された竜らしきそいつが、右足を一歩前に踏み出して踏ん張りながら咆哮を放ったのだ。

その咆哮は、声量の凄まじさもさることながら、禍々しい響きを含んでいた。聞いていると、不吉な予感を禁じ得ない声だったのだ。

そして実はこの時、召喚された竜らしきそいつは怒っていたのだ。無理もない、突然これまで感じたことのない浮遊感と共に連れ去られ、訳も分からぬまま見知らぬ地へ到着し、おまけに到着したと同時に重力に引っ張られ、そこそこの高みから地面に叩きつけられたのだ。これで怒らない方が不思議である。

竜の咆哮を間近で聞かされた魔術士たち、そして前衛職の面々は、堪ったものではなかった。全員が等しく下を向いてしゃがみ、あるいは大地に蹲(うずくま)り、両手で耳を塞いでいる。彼らは圧倒的な音の暴力によって打ち据えられていた。

しかも、これだけでは済まなかった。召喚されたドラゴンらしき存在は、天を仰いで咆哮しながら両の翼をもたげ、その先端から大量の赤い液体らしきものを空に向かって撃ち上げたのだ。大地は液体の照り返しを受けて赤く光り、地上にいる男たちを影絵のように映し出した。

震える膝を手で叩き、ようやく魔術士の1人が召喚された竜の顔を見上げた時、その視界に赤い点のようなものが映った。

「何だ？」

呟きながら空を見上げ、魔術士は息を呑む。

空のあちこちに二十数個の赤い点が現れ、それが少しずつ拡大し、燃えるようなオーラを放つ赤い塊となったのだ。同時に、地面のあち

こちも円形の赤い光に照らされ、それが急速に大きくなる。
「え？」
これ、もしかしてまずい事態では……魔術士たちがそう考えた時には、遅かった。
次の瞬間、赤い塊は次々と地面に落下。落下した塊は、激しい火柱を噴き上げて爆発し、落下地点周囲の地面を焼き焦がした。地表に生えていた草が焼け焦げ、爆風に乗って灰が舞い上がる。
赤い塊の直撃を受けた魔術士は、その場から一瞬で消失した。赤い塊を瞬間移動で回避した、とかではない。その証拠に、爆発が収まった地面にはボロ布の切れ端が落ちていた。
「「ぎゃあああーー！」」
直撃は躱せたものの、爆発までは回避しきれなかった魔術士たちにも、凄惨な運命が待ち構えていた。爆発によって発生した炎がマントや頭髪に移り、全身火だるまとなっている。彼らはこれまで感じたことのない苦痛に絶叫を上げながら、地面をのたうち回った。攻撃を免れた魔術士たちが慌てて駆け寄り、水魔法を行使して消火しようとしているが、炎はかなりの高温であるらしくなかなか消えない。そして火を消そうと躍起になっている間に、焼かれた魔術士はその生命を焼き尽くされていた。
赤い塊の落下した場所は、竜らしきものを中心としてかなり広範囲に及んでおり、遠方に落下した赤い塊の中には、森の中で炸裂したものもあった。そして森といえば、植物をはじめ燃えやすいものには事欠かない。たちまち倒木や枯れ枝、枯葉などに火が燃え移り、それは徐々に拡大しつつあった。
だが男たちには、そんなことに関わっている暇はない。何しろさっきの一撃で仲間が5人以上殺されたのだ。自分たちが召喚した存在が、死をもたらしているとなれば、平静ではいられなかった。
「まずい！　恩寵どころか死を与えにきたんじゃないのか!?」
「愚痴はどうでもいい！　何とかして止めろ！」
男たちが叫び交わす間にも、竜は動いている。
長い首を右下から上に振り上げながら、口内に赤い炎を迸らせる。

そして次の瞬間、口から火の球を1発発射した。
それは、魔術士が使う基本的な攻撃魔法「ファイアー・ボール」に似ていた。それも大きさが小さく、例えて言うならDランクハンターの「ファイアー・ボール」程度の大きさしかない。
だが、その弾速は圧倒的に速く、Aランクハンターの「ファイアー・ボール」すら凌駕していた。しかも竜は、発射寸前まで1人の魔術士を追尾していたのだ。そのため、圧倒的な高速で射出された火炎ブレスは、たった一撃でその魔術士を貫き、上半身と下半身を分断した上に爆発によって遺体を焼き払った。
火炎ブレスの直撃を受けた魔術士の男は、ほとんど骨の欠片くらいしか残っていない。
「く、食い止めろ！」
教皇にあたる男性が焦った声で叫ぶ。魔術士たちの防衛を担当していた男たちは剣や槍を持って竜に向けて駆け出し、弓を持っていた男はその場で弓弦を引き絞る。魔術士の男たちは慌てて、銘銘（めいめい）が得意とする攻撃魔法を唱えた。
「アース・ジャベリン！」
「アイス・スピアー！」
「ファイアー・ボール！」
「バカ、あいつ火を吐くんだぞ！『ファイアー・ボール』が効くか！」
一部野次も飛んでいる。それに混じり、ひゅうと風を切って矢が飛んでいく。
真っ先に竜を捉えたのは、弓士が放った矢だった。だが、その矢は見事に竜に当たったものの、カキン！　という金属質の音を残して弾かれた。矢が命中したのは竜の脚の付け根に近い部分であり、硬い甲殻に当たってしまったのである。
続いて魔術士たちの放った攻撃魔法が、竜に殺到した。炎、氷、土…さまざまの魔法が竜めがけて飛ぶ。が、
ちゅん！
バキッ！
しゅううう……

いずれもほぼ効果をなさなかった。「ファイアー・ボール」は竜の胸らしき部分の甲殻に当たって消滅し、土の細い槍こと「アース・ジャベリン」は竜の体幹右側面の甲殻に当たって粉々に砕け散った。竜の右腕を狙って飛んだ「アイス・スピアー」に至っては、竜に近付く前に溶けてしまい、竜に命中する頃には「ウォーター・ボール」にすら劣るただの水の塊となる始末だ。無論、そんなもので竜にダメージを与えられるはずもなく、逆に竜の身体に当たった瞬間、湯気を発して瞬く間に蒸発してしまった。

「嘘だろ！　あいつどれだけ体温高いんだ！」

「愚痴言う前に呪文唱えろ！」

愕然とする魔術士に、別の男性が怒鳴る。彼の手には剣が握られており、どうやら前衛職と見受けられた。

「突撃ー！」

「「おおおおおお!!!!」」

号令一下、槍や剣といった近接兵器を持った男たちが、竜に向けて突進する。が、

「「あっっっっっっい!!」」

「何だこりゃ！　あ、熱すぎる！」

竜まであと２０メートルと迫ったところで、悲鳴と共にその足が止まる。火を吐いてきたことなどから察する限り、竜は凄まじく高い体温であるらしい。実際、竜の周辺だけ大気が揺らいでいるような気がする。

男たちは知る由もなかったが、これは日本においては「陽炎（かげろう）」と呼ばれる現象に近いものであった。大気の温度の変化によって大気密度が不均一であるために、それを通過する光が不規則に屈折した結果、起こる現象である。

凄まじい高温によって突撃の足を止めてしまった男たち。そしてそれは致命的な隙となってしまった。

男たちが熱で怯んでいる間に、竜は独特の唸り声を発しながら上体をもたげた。そして次の瞬間、前方に向かって倒れ込んできたのである。

ただの倒れ込みだが、竜の巨体でそれをやられては、攻撃範囲がとんでもないことになるのは自明の理。竜の前方にいた2人の剣士と1人の槍士が巻き込まれた。竜の巨体が頭上に迫った、と思った時には、3人は悲鳴すら上げる暇もないまま竜の身体と大地でサンドされた。ぐちゃりという水気を含んだ音、バキバキと硬い物が折れるような音が一瞬だけ響き、ついですぐにジュウウウウ……という焼けるような音がする。が、それらの音はすぐに、竜が倒れ込んだ際の轟音にかき消された。そして焦げくさい臭いが生き残った男たちの鼻腔を突いた。

生き残った男たちだが、3人の仇を討とうとはしたものの、身体を動かすことはできなかった。竜が倒れ込んだのと同時に、地面が大揺れに揺れたのである。そのため男たちは足を掬われ、とてもではないが動けなかった。

倒れ込みだけで震動を発生させるとは、この竜はいったいどれほど重いのだろうか。

倒れ込んだ竜は、一声唸り声を発するや這いずるようにして前進。竜の前方にいた教皇を含む複数の男たちを、まとめて轢(ひ)き潰した。またこの時、項にあるオレンジ色の穴と翼の先端から真っ赤な塊が飛び出し、大地に向けて落下する。

落下した塊は地面に落ちると炸裂し、周囲に炎を燃え上がらせた。轢き潰され、骨肉ぐちゃぐちゃの塊になっていた男たちの死体が、火をかけられて燃え、灰や炭になっていく。

「くそっ、何とかして止めろ！」

「あんなでかいのどうやって止めるんだよ！」

「俺が知るか！　何でも良い、とにかく攻撃だ！」

言い合いながらも、男たちは剣や槍を振りかざして竜に向かおうとする。だが、竜はその全身から凄まじい熱気を放っており、近付くこともままならない。魔術士に水魔法をかけてもらって全身を濡らした状態で、竜に近付こうとした者もいたのだが、水があっという間に蒸発してしまい、ほぼ役に立たなかった。魔術士が放つ攻撃魔法……「アイシクル・スピアー」や「ソイル・スピアー」、「アース・ジャベリ

ン」といった魔法も、竜には命中するものの効果がほとんどない。
竜は身体各部に開いたオレンジ色の穴から真っ赤な塊を撒き散らしながら動き回り、口から火炎ブレスを発射する。その弾速は恐ろしく速い上に、発射寸前まで男たちのうち誰か1人を追尾してくるため、凶悪の一言に尽きる。直撃を受けた男たちは、剣士・魔術士問わず一撃で消し飛び、骨も残らないレベルで焼き尽くされる。
その火炎ブレスのうち1発は、魔術士を狙って発射された。魔術士は急いで防御魔法「マジック・シールド」を発動し、自身の前に不可視の壁を作り出す。だが、火炎ブレスはそのシールドを素通りし、魔術士を一撃で消し炭に変えた。
「な、なんで火炎ブレスなのに『マジック・シールド』で防げないんだ!?」
仲間の魔術士が戦死するのを見たある魔術士の男が叫ぶ。そこへ、別の魔術士が半ばためらいがちに言った。
「さっきから思ってたんだが……この竜からは、魔力が感じられない。もしや、あの火炎ブレスは魔法ではないのか？　それなら、『マジック・シールド』で防げないのも頷ける」
防御魔法の1つである「マジック・シールド」もしくは「魔力障壁」は、発動するとあらゆる魔法攻撃を弾く不可視の盾を自分の前方に展開させることができる魔法だ。だが、欠点も幾つかあり、特に魔法によらない攻撃に関しては素通ししてしまうのである。もしも、あの竜が火炎ブレスを魔法に頼らずに撃っているのならば……魔法ではないのだから、「マジック・シールド」で防げないのも道理である。
「魔法なしにどうやって火焔ブレスを撃つんだよ!?」
「知るわけねえだろ！　そうだ、『アース・シールド』なら防げるんじゃないか!?」
この「アース・シールド」もまた防御魔法の1つであり、自分の前に土でできた盾を地面から生やす魔法である。確かにこれなら、土を巻き込んでいるからブレスも防げるだろう。
「よし、ならそれで行こう！」
魔術士がそう言った時、竜は狙ったかのようにブレスの発射体勢に

入った。しかも都合よく、狙いはその魔術士であるようだ。
「アース・シールド！」
魔術士が魔法を唱え、大地から土の壁を自身の目の前に生やす。その直後、竜は球形の火炎ブレスを1発発射した。発射のノックバックで竜は身体を仰け反らせ、火炎ブレスは真っ直ぐに土の壁へと向かう。そして、土の壁に着弾した。
「ぎゃあああーーーー!!」
絹を割くような悲鳴……「アース・シールド」を行使した魔術士が上げたものだ。なんと火炎ブレスはたった一撃で土の壁を完全に破壊し、辺りに炎を撒き散らしていた。魔術士はそれに着火し、全身火だるまとなって転げ回っている。
「嘘だろ!?　あのブレスどんな威力してんだよ！」
まさかの結果に、弓を構えた男が叫ぶ。
「おーーーい！　大丈夫かー！」
そこへ、森の中から何人かの男たちが走り出てきた。彼らは侵入者があればそれを撃退すべく、森の中で警戒に当たっていた者たちである。魔術士たちにしてみれば援軍という訳であった。このタイミングでの援軍はありがたい。
「大丈夫じゃない、大問題だ！　手伝ってくれ！」
魔術士の1人が叫ぶ間に、竜は四足歩行の姿勢のまま海岸に向かって後退している。
すると、竜はその場で動きを止め、身体を丸めるようにした。
「お、お、どうした？　弱ったのか？」
「よし今だ！　畳みかけろ！
こいつめ、同志たちをよくも……！」
自分たちが招いた結果である、ということをすっかり忘却して、男たちが一斉に竜に走り寄る。誰もが、竜が動きを止めている間に、仲間の仇を討とうとしていた。
「な……なあ、なんかヤバくないか？」
そんな中、警戒班にいた剣士の1人がそんなことを言い出す。
「何がだよ？」

槍を持った男が走りながらそう尋ねると、剣士は竜を指さした。
「見ろ、弱ったにしては何かおかしい」
確かに妙な点があった。竜は全身を丸め、小刻みに震えているように見えるが……その割には身体各部の穴の輝きが強くなっているように思える。また、尻尾の付け根や両肩にあるオレンジ色の核のような部分は、太陽を思わせるほど明るく輝いていた。
「まるで……」
まるで、力を溜めているようだ。そう言おうとした剣士の言葉は、しかし口に出されることはなかった。
というのは、剣士が続けようとしたその時、竜が不意に首をもたげ、最大級の咆哮を放ったのだ。
グオオオオオオオオオオオアアアアアアッ!!!
大地そのものが雄叫びを上げたかと、男たちには思われた。そして、男たちが立ちすくみ耳を塞ぐ中で、竜の両翼の先端が一際強く発光し、真っ赤な液体を大量に空に向かって撃ち上げる。
男たちがようやく動けるようになった時には、竜も既に次の行動に移る体勢を整えていた。そして空からは、竜が撃ち上げた大量の液体が凝固し、１００個にも達する火炎弾の雨となって落下してきていた。
次の瞬間、男たちにとっては地獄、いや煉獄というべき時間が始まった。空からは大量の火炎弾が雨霰（あめあられ）と降り注ぎ、地面に着弾して爆発する。空き地の地面はみるみるうちに火に覆われ、男たちが安全に動ける場所は急激に削り取られていった。当然、直撃を受けてしまった男たちは骨すら残らぬレベルで消し飛ばされている。金属製の防具で頭部を守っていようと全く意味がなく、むしろ防具がなんと溶けてしまっていた。
そして火炎弾が落下するその隙間を縫うようにして、竜は火炎ブレスを撃って男たちを狙撃し、あるいは這いずるように前進して男たちを轢き潰す。男たちは剣士・槍士・弓士・魔術士の区別なく焼き尽くされるか、竜の巨体に轢かれて大地のシミになるかして、急速にその数を減らしていった。

また、空から落下した火炎弾の一部は周囲の森に落ちて炸裂し、黒く見える森のそこかしこを赤く染め上げる。炎は地面に倒れた枯れ木や枯れ葉を伝って急激にその規模を広げ、森全体に炎が回りつつあった。このままでは森林火災となり、森1つが丸ごと焼けてしまうだろう。だが、自身の命が危険に晒されている男たちには、そんなことは全く関係がなかった。

火炎弾の最後の1発が落下し、ようやく空からの攻撃が収まった時、50人近くいた男たちはたった5人しかいなくなっていた。竜はまだ碌(ろく)なダメージを受けておらず、ぴんぴんしている。この状況は、いささか……いや、かなり絶望的だった。

「くそ、こうなれば最終奥義だ！　合体技を撃つぞ！　合体技なら、あいつにも通るはずだ！

俺たち4人で『ソイル・ランス』を撃つ。お前は竜の攻撃を止められるよう防御魔法を！」

「分かった！」

その場の判断で男たちは連携し、4人が呪文を唱える。すると、大地から4本の土の槍が生み出された。それが合体し、1本の太い槍に変わる。

それを見た竜は四肢を大地に踏ん張った。そして口内に炎をたぎらせる。竜の口の中に、これまでの赤い炎とは異なる青白い炎が急速にチャージされていく。

「「「「ソイル・ランス・カルテット!!!!」」」」

そんな中、4人の男たちが生み出した巨大な土の槍が、竜に向けて飛び出した。それと同時に竜も、口から巨大な青白い炎の玉を発射する。

「アース・シールド！」

男たちのうち、攻撃魔法の詠唱に参加していなかった魔術士が急いでシールドを張った。土の壁が大地から盛り上がり、男たちの視界を塞ぐ。

そんな中、男たちが放った巨大な土の槍と、竜が発射した青白い巨大な火の玉が衝突した。

ばきぃ！
一面に炎が燃え広がり、焦げくさい臭いが鼻を衝き、パチパチと炎の音がする中で響いた、硬質な音。
「え？」
その異様な音に気付いた魔術士の1人が首を傾げた時、突如として彼の視界は一面真っ赤に染まった。次いで、何かに押されるような感覚が走った、と思った時には、彼の四肢が一瞬のうちに消し飛び、それを感じる前に彼の意識は闇の彼方に消え去っていた。
もしこの時、少し離れたところからこれらの光景を見ている者がいれば、その者の目にはこんな光景が見えていたことだろう。
まず、巨大な土の槍……魔術士たちが放った合体魔法「ソイル・ランス・カルテット」は、竜が発射した青白い火の玉とぶつかった瞬間、1秒と持ち堪えられずにバラバラに砕けた。さっき響いた硬質な音は、土の槍が砕ける音だったのだ。
そして、土の槍を打ち砕いた青白い火の玉は、土の壁に衝突して爆発。その瞬間、空き地一帯を吹き飛ばさんばかりの巨大な爆炎が広がった。炎は竜巻となり、周囲のあらゆる物を焼き尽くし、焼けた灰を天高く放り上げた。その爆発と竜巻に巻き込まれ、最後まで生き残っていた5人の魔術士たちは、その痕跡すらも残すことなく魂まで焼き払われてしまったのである……。

青白い球形のブレスの爆発が収まった時には、空き地に動く人間は誰もいなくなっていた。まさに「そして誰もいなくなった」である。ついでに、魔術士が張った「アース・シールド」も粉々に粉砕されており、土くれ1つとして地上に見出すこともできなかった。
現在、この森の空き地にいるもので生きているものはたった1つ、あの召喚された竜だけである。
四足歩行状態だった竜はいつの間にか、二足歩行に戻っていた。長い首を以て頭部を高くもたげ、周囲を見回している。どうやらまだ敵がいるかどうか探しているらしい。
グルルルル……

唸り声を上げながら竜は周囲を見回していたが、やがてもう敵はいないと判断したのか、天を見上げて咆哮した。
グオオオオオオオオァァァァァァァァァッ!!!
竜の咆哮は、声こそ比較的低いものの、威圧感と響きから漂う不吉な予感は、誰にも否定しようがないと思えるほど強かった。声自体が非常に禍々しい。それは、この先に待ち構える事態を先読みしているかのようにも思われた。
咆哮を上げた竜は、山脈を思わせるその巨体を揺するようにして向きを変えると、巨体に相応しい重々しい足取りで北へと歩いていく。その先には、海があった。
竜が歩く度に、尻尾の付け根と項、両翼の穴から真っ赤な塊がこぼれ落ちるようにして地面に落下し、空き地に生えていた草が燃え上がる。また、竜の足跡が焼き印のように大地につけられた。長大な尾も地面の上を引きずるようにしており、地面に削られたような痕跡を残す。
海岸に到達した竜は、何らためらうことなく海の中へ入っていく。竜が海に足をつけた瞬間、じゅうううう……という音と共に竜の足元から白い煙のようなものが立ち昇った。湯気である。竜の体温が高く、水の沸点である１００℃すら突破しているため、竜の足に触れた水が沸騰し、蒸発しているのだ。湯気の量は、竜がその身体を海に沈めると共にその量を増していく。
もやのような大量の湯気が上がる中で、竜は身体を沈めるようにして海の中へと潜っていき、やがて海に倒れ込むようにして全身を没した。竜の身体全てが海面下に沈んだ直後、一時的に大量の湯気が発生したが、それも次第に海渡る風に吹かれて散っていく。５分が経過した頃には、海は何事もなかったかのようにいつも通り、どこまでも青く広がっていた。
だが確かに、海には新たな混乱の種が撒かれ、そしてその芽が生えたのだ。この世界の住人たちはまだ、そのことには気付いていない……。

第2話　吹き荒れる災厄の火

オーブラム王国中西部にあるアルハリ村。

そこはある貴族の領内にある、何の変哲もない普通の村である。農民たちが木造建築の平家に住み、畑を開墾(かいこん)して農業を行う他林業や狩猟を行って生計を立てている、そんな村だ。

その村だが、今日に限っては珍しい客を迎えていた。修行の旅の途中だというハンターパーティ、それも女性ばかりのパーティである。

いや、「迎えている」という表現はある意味で語弊(ごへい)があるかもしれない。何故ならそのパーティは村の建物を借りて泊まっているのではなく、村の入り口のすぐそばにテントを張って夜営しているからだ。

もう夜もとっぷりと更け、日本では「草木も眠る丑三(うしみ)つ時」と呼ばれるこの時間帯、流石に村人にも（寝ずの番をしている者以外は）起きている者はいない。ハンターパーティの面々も、ぐっすり眠っている。

そのハンターパーティは、4人の少女から成っていた。その外見的特徴をざっと説明するなら、まず1人目は身長の高い金髪の少女。年齢は10代後半くらいと見られる。今は安眠を貪っているが、顔立ちは整っており、さぞや見栄えのカッコいい人であろうと推察される。ベッドのすぐ脇に金属製の防具と長い剣が一振り、それに短剣が1本置いてあるところから、どうやら剣士であるらしい。2人目は、背の低い赤髪の少女。何だか気の強そうな顔つきをしている。彼女のベッドの脇には防具は置かれておらず、剣や槍の代わりに木を削って作られたらしい茶色の杖(スタッフ)が立てかけられている。どうやら魔導士のようだ。3人目は、ショートの茶髪の少女。どことなくぽわぽわした顔つきであるが、これで腹の内は真っ黒なことがあるのだから、世の中分からないものである。彼女の得物は、金属製らしい杖(スタッフ)だ。彼女も魔導士なのだろう。そして最後、4人目はどこか愛嬌のある顔立ちの銀髪の少女。背は4人の中で最も低く、年齢もそれ相応のものである。彼女のベッドの横に置いてあるのは、ショートソードだ。どうやら剣士らしい。

カンカンカーン、カンカンカーン……
その時、深夜のしじまを切り裂くように鐘の音が鳴り響いた。それも1回ではなく、何度も何度も叩かれている。
「……何よ、こんな時間に……」
鐘の音に叩き起こされたか、赤髪の少女が目を擦りながら起き上がる。
「……この音は、村の方からみたいだね。確か物見櫓に鐘を置いていたはず」
己の最高の相棒たる剣に手を伸ばしながら、ベッドから起き上がった金髪の少女が何かを思い出したように呟く。
「何かあった、ということでしょうか」
「ちょっと見てきます！」
茶髪の少女がそう言うと、銀髪の少女がテントの外へ出ていった。
その銀髪の少女……マイルがテントを出て村に入った時には、村では既に人々が動き始めていた。相変わらず鳴り続ける鐘の下、起き出した男衆が何やら走り回っており、慌ただしい雰囲気が漂っている。
（緊急事態、ってことでしょうか。火事とか？）
未だ眠気覚めきらぬ頭で、そう考えるマイル。
なお、なぜいきなり「火事」という発想にマイルが至ったかというと、これは彼女の前世に原因がある。マイルは元々、現代日本に生きていた女子高生「栗原海里（くりはらみさと）」であり、高校の卒業式の日に交通事故に遭って死んでしまった。その後「創造主」を名乗る存在と出会い、現代日本の知識を持ったまま「この世界」に転生し、現在はCランクハンター「マイル」として生きているのである。その海里が持っていた知識の1つに、江戸時代日本の江戸の街における火事を知らせる方法があった。それは、ある一定のパターンで火の見櫓の鐘を鳴らす、というものであったが、その鳴らし方と今回の鐘の音のパターンが似ていたのである。そのため、マイルはすぐ「火事」という発想に至ったのだ。
ふと周囲を見渡すと、村の背後にある森の空が、深夜だというのに赤い光に照らされている。明らかに不自然な光であった。さらに、周

囲の空気がどことなく焦げくさい感じもする。
（火事ですね。でも……）
事態を把握したマイルは、そこで不審感を抱いた。
火事だということは分かった。だが、その規模があまりにも大きい気がする。まるで地平線いっぱいに広がっているかのようだ。
局所的な火事であれば、燃えている部分の周辺だけが赤く光るはずだ。
（火事の規模が、あまりにも大きい……？）
そのことに思い当たった時、
（!!）
マイルの探索魔法に、突如として反応が出現した。それも複数。かなりの速度で、まっすぐこちらへ向かってきている。そして、魔力反応の大きさから見ると……
（ゴブリン、オーク、コボルト……が、それぞれ４体以上……！）
明らかにまずい事態である。そしてその原因は、マイルには想像がついていた。
（多分、森林火災で焼け出され、こっちに逃げてきたんだ。それが、結果的に暴走（スタンピード）に繋がっている……！）
このままでは、村は魔物の暴走（スタンピード）によって壊滅的な被害を負い、その後火災によって焼かれてしまうであろう。ついでに言えば、村の近くで夜営している「赤き誓い」の面々にも相当の被害が出る。
マイルはすぐに、テントまで駆け戻った。
「どうやら、大きな森林火災が起きているみたいです。あと、火災によって焼け出された魔物が暴走し、こちらに向かってきています！戦闘準備をお願いします！」
ちょうどそのタイミングで、メーヴィスの戦闘準備が整った。メーヴィスは剣士であり、防具を着用しなければならないため、ポーリンやレーナに比べるとどうしても戦闘準備に時間がかかってしまうのだ。
「分かったわ、先に行ってるわね！」
レーナが応じ、３人はテントから出ていく。マイルも急いで防具を

着用し、腰にショートソードを佩(は)くと、宿泊していたテントを収納魔法(アイテムボックス)に放り込んで3人の後を追った。
森に住む魔物の暴走に対処する。こういった事態は、「赤き誓い」には一度経験がある。マーレイン王国東部の都市マファンで、トリスト王国から押し出されてきた魔物を押し返した時だ。あの時は昼だったが、今回は夜であるため視界が悪い、という違いはある。だが、やるべきことは似たようなものだ。
「2時方向、ゴブリン5体！　メーヴィスさん！」
「了解だ！　行ってくる！」
「正面より、オーガ2体！　レーナさん、ポーリンさん！」
「任せなさい！」
「やります！」
こんな感じで、「赤き誓い」はアルハリ村に近づく魔物たちを次々と討伐し、あるいは別方向へ走るよう誘導した。その結果、村自体は助かったのである。
日本時間にしておよそ1時間後、マイルの探知魔法には生物による反応は見られなくなった。だが今度は、火災の炎と煙が迫ってきている。これを放置すれば、森のすぐ近くにあるアルハリ村は、森と一緒に焼けてしまうだろう。それは防がねばならない。村自体は村人たちが守ろうとしているだろうが、森の方は「赤き誓い」がどうにかする方が早い。
（どうしよう……多分、水魔法だけじゃ足りないよね……）
そう考えたマイルは、ある方法を思いついた。それを実行すると、堂々と森林を伐採することになってしまうが……この際止むを得ないだろう。
「作戦を考えました。まずはこの辺一帯の木を切り倒し、地面に水や氷を撒いて防火帯を作ります。私とメーヴィスさんで、剣を使って木を切り倒します。ポーリンさんとレーナさんは、水魔法か氷魔法を地面に放ち、枯れ葉や朽ち木を濡らして燃えにくいようにしてください！」
マイルが選んだ作戦は、防火帯の形成であった。この場で火災に対

処できるのはたった４人……「赤き誓い」のメンバーだけであるため、積極的な火災鎮火はマンパワー不足により不可能と判断し、防火帯形成による村周囲の防火だけ行おうとしたのだ。

「えいっ！」

がつっ、がつっ……めりめりめり……ばたーん！

「それっ！」

がつっ、がつっ、がつっ……めりめりめり……ばたーん……

マイルとメーヴィスが己の剣を振るい、木を次々と切り倒し、茂みを切り払っていく。本当なら木を切るのに適した道具は斧であり、剣では刃毀（こぼ）れする可能性が高いのだが……そこはマイルとメーヴィス、２人の剣はナノマシンの加護を受けている。それも「絶対に折れず、欠けず、曲がらない」というチート性能の剣である。ならば、斧の代わりとして使うにも十分な性能があった。

切り倒された木は、直ちにマイルの収納魔法（アイテムボックス）にしまわれる。そしてその切り株も、移動の邪魔にならない程度の高さに調整された。もちろん、調整のために切られた部分はアイテムボックスの肥やしとなる。その上からポーリンの水魔法、そしてレーナの氷魔法が降り注ぎ、地面は凍ったり濡れたりしていく。

あまり時間は残されていない。それに対して、切らねばならない木の数は多く、可燃物を減らすべき面積も広い。そのため、４人は必死で己の仕事を果たし続けた。すると、村の女性や子供たちを避難させた男たちが道具を手にして駆けつけ、手伝ってくれる。村の命運がかかっていると言っても過言ではない状況だったため、男たちは「赤き誓い」に対しては仕事上必要な問答をするくらいで特に何も言わなかったが……村人たちの胸の中には共通して１つの思いがあった。

（（（（どうして剣で木を切り倒せるんだよぉぉっ！　それに、その馬鹿げた容量の収納魔法は何だぁぁぁぁぁ!!!!））））

村人たちの思いはともかくとして、皆必死になって仕事をこなした甲斐あって、火の手が迫ってきた時には、どうにか皆はかなりの広さの防火帯を確保できていた。立ち木が燃えながら倒れてきたとしても、延焼しない程度の広さはある。後は、防火帯の地面を濡らし続け

ること、そして風魔法などの利用による火の粉の阻止である。
だが、これはマイルの凄まじい魔力が役に立った。何せマイルは、転生時の創造主の処理ミス……というより手違い（？）により、「通常の人間の６，８００倍」という桁外れの魔力を有するのだから。
（ナノマシン！　アイ、コマンド、ユウゥ……）
戦闘時くらいにしか使用しない「本気モード」を発動するマイル。当然、ナノマシンたちにも気合が入る。
（防火帯上空に雨雲を形成……。危険だから雷は無しで。この辺一帯に雨を降らせて……）
《マイル様、森の方での気温の上昇により、雨雲が発生しやすくなっております》
（火災の放射熱か……都合が良いね。それも利用して雨雲を形成しちゃって！　空気中の水分は私が何とかしてみる！）
《御意》
「レイニー・ウェザー！」
マイルが呪文を唱えると、空から星々の光が失われていく。雲がかかったのだ。
少しして、マイルの頬を一滴の雫が叩いたかと思うと、雨が降り始めた。
「ちょうどいいタイミングね」
「これで、消火しやすくなります」
「後は、様子見かな」
レーナ、ポーリンとメーヴィスも喜んでいる。
そのまま１時間ばかりも雨を降らせ続けた結果、夜が明ける頃にはアルハリ村周辺では火災は観測されなくなっていた。
どうやら村の周囲での火災は収まった。だが、その被害は非常に大きく、相当な面積の森が焼けてしまったであろうことは、容易に想像がついた。
実際、夜が明けてから見渡してみると、村のすぐ近くまで広がっていたはずの森はほぼ完全に焼け落ちており、辺り一帯に焦げくさい臭いが充満している。まだ白煙を上げて燻（くすぶ）っているところも多く、鎮

火はしたものの油断できない状態であった。
「これだけ大きな火事になると、ちょっとただごとじゃないね。原因になりそうなものを調べておいた方が良いと思わないかい？」
村人たちと共に、休憩がてら「赤き誓い」が朝食を摂っていると、メーヴィスがそんなことを言い出した。これほどの火事を放置してはおけない、と思ったらしい。領地を支配する貴族家の令嬢らしいと言える。……貴族家当主である銀髪少女（マイル）がここにいる？　それは言っちゃいけないお約束。
まあそれはともかく、これほどの大惨事である、出くわした当事者として原因を調べるくらいは必要だろう。反対する意見もなく、４人は朝食後すぐに焼けた森へと出発した。道案内役として２人の村人を伴って。
道案内とは言うものの、その実案内も何もあったものではない。何せ森における視界悪化の原因となる茂みなんかは軒並み焼け落ち、視界はすっかり開けてしまっているのだから。道案内とは名ばかりの、言ってしまえば「村側から派遣された立会人」みたいなものである。
魔物や動物の気配が一切消失し、小鳥の囀（さえず）りすらもまともに聞こえない。そこかしこに炭化した木々の幹が倒れ、中には立ったまま焼け焦げている木もある。魔物や動物の形をした炭が転がっている光景を見るのも、一度や二度ではない。そして、あちこちからまだ白煙が燻っていた。そんな森であるが、マイルには火元のおおよその見当がついていた。当時の火の燃え広がり方と風向き、魔物たちが逃げてきた方向、そしてナノマシンによる探索レーダーの反応から考えるに……
「こっちです」
まるで道標（ハンミョウ）のように進行方向を指示するマイル。レーナたちはもう慣れたものであるが、村人たちには、なぜこんな少女がこれほど自信満々に指示を出せるのか分からなかった。２人は首を傾げつつも、道案内役を務めている。
森に入って１時間も歩いただろうか、一行は不意に、焼けた木々が全くない空間にたどり着いた。ここはどうやら元々広場のようなと

ころだったらしく、焼けた草はあるし大地も黒一色に染まっているが、炭化した木々はない。だが、あちこちに何かが盛り上がっていた。北を見ると焼けた木々の間から海が見え、潮の香りもする。
その盛り上がったものの1つに近づいたポーリンが突然、悲鳴を上げて仰け反る。そしてその勢いのまま尻餅をついた。
「どうしたのよ?」
言いながらレーナが近寄ってくるが、その彼女も盛り上がったものの正体を見出した途端に黙り込む。以下村人たちが、メーヴィスが、そしてマイルが、同じようにして驚愕した。
それは、人間の死体であった。よほどの高火力で焼かれたのか炭化してしまっているが、形状は間違いなく人間のそれである。そして、有機物が焼け焦げた時に発生する特有の悪臭が、ぷんぷん漂っていた。
「火事に巻き込まれたのかしら……」
悪臭に鼻をつまみながらレーナが呟いた時、
「いや、違うと思う」
メーヴィスがそう言って、側にあった別の死体を指さした。その死体のすぐ側には、折れた剣が転がっている。それも抜き身だ。
なお、彼女自身も顔をしかめている。いくら剣士とはいえ彼女も一人の少女だ、死体を見て当然起こすべき反応を起こしているだけである。
「火事に巻き込まれただけで剣を抜くような人はいないよ。それに……そっちには魔導士のスタッフも転がってる」
このメーヴィスの台詞を聞いて、マイルは日本神話に登場する三種の神器の1つ「草薙(くさなぎ)の剣」を思い出していた。
こうなると、昨夜の火事の規模と言い、どうも事情がきな臭(くさ)くなる。
6人は手分けして、周囲を調べ始めた。ポーリンとメーヴィスは村人たちと共に、広場に転がる死体を調べていた(と言えば聞こえは良いが、実のところ村人たちは惨殺死体の数に腰を抜かしていただけである)のだが、幾つか見て回るうちにあることに気付いた。
まず、広場にある死体は全て人間、それも純粋なヒト族の死体ばか

りである。次に、どうも魔導士のみならず槍士や弓士もいたらしい。これは、広場内には剣や杖（スタッフ）以外にも、柄が焼けて穂先だけが残った槍や鏃（やじり）らしい黒い小さな塊が見つかったことでそう判断したものだ。そして……

「これは……」

比較的損傷の少ない、弓士だったらしい男性の死体を調べていたメーヴィスが、何やら黒い布の切れ端のようなものを拾って観察している。

「多分、マントだね……。それも焼け焦げてるわけじゃなく、元から黒いマントだったみたいだ」

布を指先で撫で回しながら、メーヴィスが分析する。

「ポーリン、そっちはどうだい？」

尋ねられたポーリンは、（青い顔をしてはいたものの）ちゃんと調べていたらしく、応答してきた。

「こちらも、皆さん黒い布らしきものをまとっています……。魔導士のローブかとも思いましたが、剣士の方も同じような布を着用しています」

「ということは、ここにいた人々はみんな純粋なヒト族で、そして同じように黒いマントを着用していた、ってことだね」

そうコメントして、メーヴィスはふと気付いた。純粋なヒト族のみで構成され、かつ黒いマントを共通して着用する集団。そんな集団にはどこか覚えがあるが、さてどこの誰だったか……

「この人たち、アレじゃないですか？　ほら、ファリルちゃんの時の……」

「ああ……」

ポーリンに言われてメーヴィスも思い出した。そう、ヴァノラーク王国にて獣人族の娘ファリルが誘拐された事件の際、ファリルを拐った連中がそんな特徴を持っていたはずだ。ということは……。

「ここに倒れているのは、あの人たちの仲間でしょうか。そしてこれだけの数が死んでいる、ということは……」

「もしかすると、『強き力を持つ異界の神』を召喚する儀式でもやって、

本当に召喚してしまった、ということかもしれない……」
　不吉な予感に囚われるポーリンとメーヴィスであった。
　一方、広場の別の区画を調べていたレーナとマイルは、死体とはまた異なる物を発見していた。
「何これ……」
「すごく……大きいです……」
　２人が発見したのは、足跡である。それも、どうやら相当な巨体の持ち主によってつけられたものと見えて、非常に大きい。足跡の爪先(つまさき)から踵(かかと)までは、目測で1メートルはあるんじゃなかろうかという、とんでもないサイズだ。
　なに？　マイルは青いツナギを着ていないしそもそも男ではない？　何のことやらうｐ主にはさっぱり分かりかねます。
「この形……明らかにオーガとかのものじゃないわね」
　レーナが足跡の形状に目を付けている間に、マイルは周囲を見回して足跡を追った。足跡は、北の方角へ向かっている。マイルがそれを追ってみると、足跡は波打ち際で途切れていた。だが、海に向かってまっすぐ足跡が続いていること、波のせいで崩れかけていたが波打ち際にもしっかり足跡が残っていること、そして怪しいものは何も見えないところから考えると、どうやら足跡の主は海に潜ってしまったらしい。
「マイル！　これ、どう見ても普通の魔物の足跡じゃないわ。見た感じは竜種に近いわね」
　レーナの呼びかけで、マイルは我に返った。
「竜種、ですか？　しかも、レーナさんは見たことがない？」
「ハンターになる前もなった後も、こんな形でこんな大きさの足跡は見たことがないわ。現実でも書物でも」
　レーナはハンターになる前から、行商人だった父親と、あるいはハンターパーティ「赤き稲妻(いなづま)」の面々と各地を巡っていたため、この世界についての経験や知見はマイルよりも多いのだ。そのレーナが知らないということは、これはよほどのことである。
「すると……」

もし森林火災を起こしたのがこの足跡の持ち主だったとすると、幾つか浮かび上がることがある。まず、足跡の主はどうやら高火力の火魔法を得意とするらしい、ということ。ここにある死体が焼け焦げていたり、森林火災で森を焼き払うことまでやってのけたことからも、それが容易に窺える。次に、かなりの巨体を有するらしいこと。足跡の大きさから推測するしかないが、それでも見上げるような巨体だっただろうことは想像できる。そして何よりも重要なのが、足跡の主はとんでもない力を……それこそ古竜レベルの力を有しているらしい、ということである。

「よほどのことね、これは……」

「間違いないですね……」

レーナとマイル、2人の少女は足跡を目で追って海を見やった。海はどこまでも青く澄み渡っている。しかし、その青さが薄ら寒いように2人には思われた。そして、嫌な予感を拭いきれないマイルであった……。

広場を一通り調べた「赤き誓い」の面々は、再び集まって情報交換を行った。そして弾き出された推論が、これである。

・この広場で、あの邪教集団による「召喚の儀式」が行われた。その結果、実際に「強き力を持つ異界の神」が召喚されてしまった。

・「異界の神」はその力を振るって、この場にいた邪教集団の男たちを全滅させた。その際に発生した戦火により、今回の森林火災が起きたと思われる。

・その後、その「異界の神」は海へと潜り、その姿を消した。

・現場に残された足跡の大きさから、「異界の神」は竜種に近い姿であると思われ、また非常に大きな体躯を有することが予想される。

この推論に達した「赤き誓い」の思いは、一つに集約されていた。

(((とんでもないことにならなければ良いけどね……)))

◆◇◆◇◆◇◆◇

その数日後、道中特に何事もなくティルス王国王都へと帰還した「赤き誓い」は、王都にあるハンターギルド支部にて、報告を行っていた。ギルド支部の本館2階にある会議室には、『赤き誓い』の4人の

他、ギルドマスター、サブギルドマスター、ギルド上級幹部3人、そして依頼者側（身元が隠されているが、おそらく王宮関係者であると思われる）から3人の、合計12人が勢揃いしており、『赤き誓い』を代表してマイルが報告を行っている。
「……オーブラム王国がざわついている原因と思われるのは、ほとんどの魔物たちにおいて出現した新種、『特異種』によるものです」
そう前置きして、マイルは詳細説明を行った。オーブラム王国で不安が高まった理由は、『特異種』の魔物によって王国各地のハンターや農民の被害が漸増し、しかも様々な理由によってオーブラム王国上層部やハンターギルドも事態を把握できていなかったことによるものであること。そして……
「ここが、最初に新種が発見されたグレデマールです」
テーブルに地図を広げ、マーレイン王国の東南東端の方の一点を右手の人差し指で示すマイル。
「そして、ここと両国の王都の位置関係は……」
言いながら、マイルは今度は左右の手を同時に動かした。両手の親指でグレデマールの位置を押さえた後、右手の人差し指でオーブラム王国の王都を、左手の人差し指でティルス王国の王都の位置を押さえる。その両手の親指と人差し指の間隔は、左右ほぼ同じであった。
「「「「……」」」」
マイルが言いたいことを察し、完全に黙り込む列席者たち。
しばらくして、『依頼人たち』のうち1人が、呻くような声でぼそりと言った。
「我が国が、王都を含めて異変の発生圏内に……」
「入っている可能性は、かなり高いのではないかと……」
その『依頼人』に、マイルが非情な宣告を突き付ける。
事態の深刻さを理解し、焦った様子で言葉を交わし始める列席者たち。さらにそこへ、マイルが追撃を叩き込んだ。
「また、今回の異変に直接関係があるかは不明ですが、オーブラム王国内にて発生した大規模な事件がありますので、そちらも合わせて報告します。今から5日前の深夜、オーブラム王国中西部にて大規模な森

林火災が発生しました。発生した位置はここです」
　いったん地図から両手を離した後、マイルは右手の人差し指で楕円形を描くようにして、オーブラム王国中西部海岸沿いのある一帯を示した。
「火災発生当時、我々はこの付近にあるアルハリ村で夜営しており、火災発生時に村民と協力して村への火災延焼と、火災によって暴走（スタンピード）した森の生物や魔物の村への侵入を防ぎました」
　本当はマイルたち「赤き誓い」がスタンピードを防いだ上に火災の一部を鎮火してしまっているのだが、決して嘘は言っていない。
「しかし、火災そのものを食い止めるのは困難であり、結果、この辺り一帯の森林のほぼ全てが焼けてしまったと思われます」
　マイルが示した範囲は、火災による消失面積としてはかなり大きい。しかも、オーブラム王国の中でもティルス王国にほど近い領域で発生した事件である。ギルドマスターが不安そうな表情を浮かべているのも、無理はない。
「火災が収まった後、我々は焼けた森に立ち入り、火災の原因を特定しようとしました。その結果、火災の発生点と思われる場所で、炭化した人間の死体を複数発見、さらに同地には巨大な足跡も発見されました。足跡は非常に大きく、おそらく古竜クラスのものと推察されます。今回の森林火災は、その足跡の主によって起こされたのではないか……と思われます。
　ただ、足跡は現場を北上して海岸へと向かい、そこで途切れていました。波打ち際まで足跡が残っていたことから、足跡の主は海へ潜ったものと考えられます」
「「「「「……」」」」」
　その報告、そしてそれに関連すると思われる「ヴァノラーク王国における、邪教集団による獣人拉致事件」の黒幕についての報告に、列席者たち全員がその顔から血の気を失っていた。
　特異種の唐突な出現（ポップアップ）による混乱に加えて、大規模な森林火災、しかもその下手人は海の中へ姿を消したと思われ、行方不明。おまけに、その下手人は「世界最強の魔物」と言われる古竜に匹敵するレベルの

存在と見られる、というのだ。これは、異変としてはかなり大きい。
しかも、森林火災に関してはティルス王国に比較的近いところで発生した上に、下手人が姿をくらましてしまっており、さらには下手人が逃げたと思われるのは追跡のしようがない海の中。おまけにどうもその下手人は外部から召喚されたらしいと見える。
どうしようもない。
「やべぇ……。クソやべぇ……」
ギルドマスターが呟くように言う。おそらくは身分がある人たちを前にして言うには、あまりに下品な言葉なのだが……それだけ気が動転しているのだろう。無理からぬことである。
その後、ギルドマスターたちと依頼人側を交えて対応策が検討された後、「赤き誓い」の面々は解放された。ポーリンは多額のお金を稼げたことに喜んでいるが、マイルは何やら考え込んでいる様子である。
実際、今回の件は色々とありすぎた。そして考えられるのは、まず、これまでにあちこちで発生した特異種の出現が、古竜たちが調べている「先史文明の秘密」に関係するものなのか、古竜たちが何かに対しての準備が必要だと考えているその「何か」に関係するのか、ということ。そして、あの森林火災を引き起こした下手人は何者なのか、ということである。
特に森林火災の一件は、気になることが多い。足跡のサイズから考えれば、下手人は明らかに古竜クラスの体躯があると思われるが……古竜では断じてない。そもそも知能のある古竜なら、森林火災を発生させようとは思わないはずだし、もし森林火災が起きているのならそれを止めようとするはずだ。あんなに延焼するまで燃やそうと考えるとは、とても思えない。
ならば、いったい何者があの火災を起こしたのだろうか？　……謎は深まるばかりである。

第3話　突然の襲撃

オーブラム王国での調査から「赤き誓い」が帰還した翌日の早朝。処は、「赤き誓い」がいるティルス王国から見て南にある、アルバーン帝国東部沿岸部。

アルバーン帝国の東岸にある港街カザンは、帝国内では帝都に次ぐ規模を持つ大都市であり、天然の良港を有することから、交易の中継拠点、漁業の拠点としても栄えていた。その一方で、この街はアルバーン帝国海軍最大の拠点でもあり、大規模な海軍戦力が駐留している。

現代日本流の時間表現を使うなら午前5時頃のことである。

まだアルバーン帝国海軍の主力艦隊に「総員起こし」もかからない時間帯であるが、既に起きて活動し始めている者たちもいる。それは例えば、艦隊司令部の夜間当直兵や、港の出入港管理局の職員。そして漁師だ。

この時刻においては、漁師たちは既に木造の帆船を駆って沖へ出ており、めいめい好きなところで魚網を広げたり、釣り糸を垂らしたりする。仲間で連携して、大掛かりな網漁をする者もいる。

さて、沖合で帆を畳んだ後、いつものように網を広げ、あるいは釣り針を錘（おもり）と一緒に糸につけて海に投げ込んでいた漁師たちであるが……漁を開始して30分も経とうかという頃、彼らは揃って不審感を抱いていた。昨日までは比較的多く魚がかかっていたのに、今日はあまりにも不漁なのである。

魚だって生き物だ。その日の天候や海水の流れ、あるいは個体ごとの気紛れ等の理由から、不漁になることはよくある。だが、今回は出港する時点で良い風が吹き、空気の湿り気もちょうど良い具合であり、おまけに海面は凪いでいるという絶好の漁日和であったにも関わらず、どの船も一律に不漁なのだ。これはおかしい。

朝焼けで赤く染まった海の上で、どの漁師たちも「今日は、この季節の割に少々蒸し暑いな」などと言い合いながら漁をしていたのであったが、この奇妙な事態を前にして全員が首を傾げていた。いった

い何故、今日に限ってこんなに不漁なのか、と。
「……ん？」
　そんな中、ある船の上で手応えの感じられない魚網を引き上げていた漁師の１人が、あることに気付いたらしい。「おーい」と声を上げ、同じ船に乗っている仲間と船長を呼ぶ。呼びかけに応じて船長を含む３人の仲間が集まったところで、その漁師は魚網を手にしながら、訝りのある口調でこう尋ねた。
「なんか……いづもより海の水さ熱かねぇが？」
「なに？」
　言われた船長が、漁師から魚網を手渡される。そして魚網を見つめながら「ふむ……」と呟いて、仲間にそれを回した。手に持った漁師が、思わず叫ぶ。
「何だこりゃ⁉　この時期の海水はこんなに熱かねえはずだぞ！」
　そう、いつもなら冷たいはずの魚網は、熱を持っていたのである。魚網が自ら熱を発するなんてことはあり得ないから、可能性はただ１つ、海水温が高いということになる。
　不意に、どぼん、と水音が響いた。別の漁師が船の上から縄のついた桶を海に投げ込んだのだ。海水を汲んで船の上に桶を引き上げた漁師は、桶に手を突っ込むなり大声で叫ぶ。
「おい、こいつは明らかにおかしいぞ！　みんな、ちょっとこれに手を入れてみろ！　今汲んだばかりの海水だ！」
　漁師が手を突っ込んだ海水は、ぬるま湯のような温度になっていたのだ。
「何だこれは⁉　まるで風呂の湯じゃねえか！」
「これは変だ。道理で魚がかからないはずだぜ！」
　魚という生物は、基本的に海水温の変化には敏感なものだ。海水温は大気温に比べて変化しにくい、という性質もあるのだが、海水温が１℃上がっただけでも海中の生態系はがらりと変わってしまう。そして、ぬるま湯の中で生きていられる海洋生物は、そうそういない。
　あちこちに散っていた漁船は、やがて１箇所に集まり始め、最終的に３０隻程度の漁業船団となった。釣り糸を垂らしていた漁師も、魚

網による漁を行っていた者も、あちこちの船の上で不審な声を上げ、互いの船上から大声で情報交換をしている。それによると、どうもこの辺一帯の海が全体的に温かくなっているらしい。

「こりゃあ……異常事態だ。だが、ワシらの手ではどうすることもできん。

ここにいても埒は明かぬ。皆、今日は一旦港に戻ろうではないか」

漁師たちの中では最年長となる壮年の男性が臨時のリーダーとなり、船団は釣果ゼロで港へ引き上げることが決定された。まあ、こんな事態が発生すると予想しろ、という方が無茶な話なので、仕方ない。

港へ引き返そうとして、漁師たちは次々と別のことに気付く。

「風が……止んだ？」

1人の漁師の呟きは、この場にいる者たちが気付いた2つの事象の片方を物語っていた。

風が止んだのだ。周囲には何とも表現しがたい生暖かい空気が淀んでおり、どうにも嫌な予感がする。

そしてもう片方を、別の漁師が口にした。

「海鳥の声も……ない……」

声がしないどころか、海鳥の姿そのものが見当たらない。漁師たちの頭上には、黒から青へ姿を変えつつある空と雲があるばかりである。

「なーんか、嫌な感じだな……」

「ああ、こりゃロクなことが起きそうにない。野郎ども仕方ない、今日は諦めて帰るぞ！」

その声を合図に、漁業船団を構成する大小30隻ほどの漁船は、一斉に舳先を翻してカザンの港へと戻り始めた。

赤く染まる海を進む漁業船団。その海面に立つ波すらも物静かなものになっている。この季節なら、この辺りは比較的高い波が立つ日が多いというのに。ちなみに、この海は遠浅になっており、その水深はおよそ30メートル程度しかない。

何か魚影でも通りはすまいかと、船縁から赤い海を覗き込んでいたある漁師は、不意に何かを見たように思った。

（……？）

目を凝らし、赤い波の下をじっと見つめる漁師。よく見えないが、何かが確かに海中で動いたような気がする。それも、かなり大きなものが。

「どうした？」

声をかけながら近寄ってくる仲間に、「いや、今海中で何か動くのが見えたような……」と言いながらも、漁師は海面を覗き込み続ける。その彼の視界に、海中で動くものが確かに映った。何か、赤く輝く物が見える。しかも、それが次第に大きくなり、明るさを増してくる。明らかに、海面に浮上してきているのだ。

「何か、来る！」

「は？　何かって、何……」

漁師の叫びに反応して、もう1人の漁師が同じように覗き込もうとした、その瞬間。

突如として彼らの視界は、一面真っ白に染め上げられた。そして全身に凄まじい衝撃をほんの一瞬だけ感じた。

何が起こったのか……だが、その疑問を抱く前に、彼らの意識は闇の彼方に消え去っていた。

船団の外周部分にいる船に乗っていた漁師たちは、その光景をはっきりと目撃した。

突然、まったく突然に、船団のど真ん中で巨大な爆発が起こったのだ。それも2つ。今や異常なほど真っ赤に染まった海面が大きく弾けたかと思うと、強烈な衝撃波が全身を打ち据えた。大量の飛沫（しぶき）を伴って、太く真っ白な逆円錐形の水柱が2本そびえ立ち、それに混じって木屑も八方に飛び散る。爆発に巻き込まれた漁船が、一瞬で消し飛ばされたのだ。乗っていた船員や漁師たちは、おそらく何が起こったかも理解できぬまま死んでいっただろう。

水柱が収まった時、彼らは異様な光景を見た。船団のど真ん中に、突如として3本の塔が出現したのだ。

……否。塔ではない。それは……あろうことか、一個の生物だっ

た。
「何だアイツは!?」
「で、デケェ……!」
漁師たちや船員たちから、口々に驚きの声が漏れる。
この辺の海は、遠浅とはいえ水深は３０メートルはある。だというのに、件の生物のうち海面から突き出た部分の高さは、どう見ても１５～２０メートルはある。下半身が海面下に沈んだ状態でこの始末であるから、その巨体ぶりは容易に想像がつく。
当初３本の塔だと思われたものは、真ん中の１つは生物の顔と長い首、そして胴体の一部であった。残りの２本は、生物の身体の背中から突き出たらしい巨大な翼である……が、そもそもどう見ても飛べそうにない。岩の塊を生やしたようであり、赤く光るラインが根本から先端に向けて走っている。そして翼の先端には巨大な穴が開いており、真っ赤に光っている。その真っ赤な大穴から、炎を纏った赤い塊がこぼれ落ちるように海面に落下した。
落下した赤い塊は、海面に触れると同時に大きな音を発し、大量の飛沫を撒き散らして爆発する。しかし、赤い塊そのものは消失しておらず、なんと炎を纏ったまま海底へ沈んでいく。水中で火を燃やせる時点で、漁師たちにはもう驚きでしかない。この炎は、いったいどんな性質を持つというのか。
ちなみに漁師たちは知る由もなかったが、この巨大生物こそ、１週間前（この世界基準。この世界では、１週間は６日とされている）にオーブラム王国中西部にて異世界より召喚され、邪神教団をほぼ壊滅に追いやった序（つい）でに大規模な森林火災を発生させた竜らしき存在である。
「「うあああああああぁぁぁ!!!」」
不意に、絹を裂くような悲鳴が漁師たちの鼓膜を震わせた。何事かと声のする方を見た漁師たちや船員たちが、その場で固まる。
突如現れた巨大な生物、その項（うなじ）の部分に１隻の漁船が乗り上げてしまっていた。運悪く、浮上してきた生物の真上にいて、空中高く持ち上げられてしまったのだ。

いや、この時点で驚くより他にない。幾ら軍用帆船ではないし小さいとはいえ、そこそこの大きさの帆船1隻だ、その重さは尋常ではない。それを首1本で軽々と押し上げるとは、この生物の筋力は如何ばかりか。

巨大生物がその首を完全に起こすと同時に、押し上げられてしまった漁船は生物の首から滑り落ち、約２０メートルの高みから自由落下で海面へと叩きつけられた。当然、無事に済むはずもない。横転しながら落下してきた帆船は一撃でバラバラに壊れてしまった。そこへ、項に開いた真っ赤な大穴から噴き出た塊が、止めを刺すかのように船に落下する。塊は海面に落ちると同時に、爆発と見紛わんばかりの勢いで飛沫を噴き上げた。

海面に落下した船は、この爆発によって完全に吹っ飛び、見るも無惨な姿で沈んでいく。乗っていた2人の船員と3人の漁師は……見当たらない。いや、1名海面に浮かんでいる姿が見えたが、よく見ると下半身がちぎれかけている。あれではもはや命はあるまい。

「に、逃げろーっ！」

あまりに酷い仲間の死を前にして、固まってしまっていた漁師たちと船員たちだったが、しかし一部の者は何とか正気を取り戻した。そして必死で声を上げ、何とか帆に風を受けようとし、あるいは櫂を手にして死に物狂いで漕ぎ始める。

そんな中、船団のど真ん中に突如として現れた巨大生物は、その長大な首をもたげるなり凄まじい咆哮を放った。

グオオオオアアアアアアーッ!!

この世界における生物で咆哮を上げるのは、古竜を筆頭とする竜種であるが、その咆哮は通常の竜種（ドラゴン）のそれとは全く異なる。声量の大きさもさることながら、恐ろしく禍々しい響きが混じっているのだ。

その声量は、人間に備えられた本能の1つ「恐怖」を否が応にも引き起こす。実際、咆哮を耳にした漁師たちや船員たちは、皆一様に同じ行動を取った。たとえ嵐の海だろうとどこだろうと船を出すほど豪胆なはずの海の男たちが、まるで怯える赤子のように目を固く閉じ、耳を塞いで蹲っている。そして男たちが咆哮に動けなくなってい

る間に、突然現れた巨大生物は両翼に走る赤いラインを眩く輝かせ、翼の先端から赤い液体を空に向けて噴火のように放ったのだ。
空中に向かって放たれた赤い液体は、飛翔するうちに冷えていき、周囲の液体と結びついて赤い塊となる。そして打ち出された時の勢いを失うや、重力に引っ張られて自由落下していった。放たれた大量の液体は、空の高みで５０個もの火炎弾とかし、天空から勢いよく落下してくる。そう、何とか咆哮の影響から立ち直った男たちが慌ただしく動き回っている、ほぼ無防備なままの漁業船団へと。
次の瞬間、赤い地獄が海上に出現した。
どすっ！
どがぁーん！
ずどおぉぉぉん!!
「「「「ぎゃあああああーー!!!!」」」」
容赦無く空から降ってきた火炎弾は、かなりの高速で漁船へと突き刺さり、あるいは海面に落下する。海面に落下した火炎弾は、小型爆弾の炸裂にも匹敵する凄まじい爆発を起こし、衝撃波と飛沫を八方に撒き散らす。漁船に命中した火炎弾は、その威力を存分に解放した。マストが一撃で倒され、帆は瞬く間に炎の幕と化して甲板に落下し、甲板はあっという間に一面の火の海となる。身体に火が回った漁師や船員が、その火の海の中を転げ回り、息絶えていく。
漁師や船員の中には、火から逃れようと海に飛び込む者もいた。が、これも悪手だった。
「「あ、あづいいいィィ!!!!」」
そう、海の水はぬるま湯どころか熱湯と化していたのである。海が赤くなっていたのは朝焼けの光を反射してのものではなく、熱せられたことによる赤熱だったのだ。
海を煮立たせ、海面が真っ赤になるまで加熱する。口で言えば簡単なことのように思えるが、実際は桁外れにも程がある天変地異だ。
例えば、地球の地上において熱い物質といえば、その代表例は火山から噴き出る溶岩だろう。今現在地球上に見られる溶岩、ひいてはその元となるマグマの温度は、およそ数百～１，２００℃。それが海に

入るとどうなるかというと、溶岩は冷えて黒く固まってしまう。そして海底に堆積し、最終的には陸地になるのだ。

しかし、この巨大生物は「海を真っ赤に染めて煮立たせる」という、溶岩にすらできないことを平然とやってのけているのだ。そこにシビれる……かは人次第だが、うp主はシビれないし、憧(あこが)れ以前に恐怖を感じる。

そんな熱湯状態の海に、身一つで飛び込んでしまったのだ、どうなるかは想像がつくというもの。飛び込んだ漁師たちや船員たちは、熱湯で全身に大火傷を負い、もがき苦しみながら海水を掻いて岸まで泳ごうとした。しかしその甲斐もなく茹ってしまい、水中で熱中症まで起こして、1人また1人と動かなくなっていく。

この瞬間、船員たちと漁師たちは理解した。この海で生き延びる方法はただ1つ、巨大生物の攻撃を船に乗ったまま避け続けることだ。船に直撃を受けてしまえば、その時点で死は確定となる。そうならないよう、死ぬ気で攻撃を避けなければならない。

漁師たちも帆の操作や舵操作を手伝い、生き残った漁船は火炎弾の直撃により燃え上がる仲間の船を完全に見捨て、一心不乱に港へと船を走らせる。

そんな人間たちの努力を嘲笑うかのように、巨大生物は徐に首をもたげた。その口内にはオレンジ色に輝く炎が満ちており、牙の間から炎が漏れている。

次の瞬間、巨大生物の口から火球ブレスが1発発射された。ブレスの大きさはそれほどでもない、せいぜいDランクのハンターが使う「ファイアー・ボール」程度だ。だが、その弾速はAランクハンターの「ファイアー・ボール」すら凌ぐ超高速。おまけに、発射寸前まで1隻の漁船を追尾しているため、機動力が低く速度も遅い帆船にこのブレスを避けることはできなかった。

着弾した火球ブレスは大きく爆発し、漁船は一瞬で火に包まれる。マストも帆も一撃で吹き飛び、火だるまとなって赤い海を漂流し始めた。火の回りも早く、船員たちや漁師たちが必死で桶に海水を汲んで消火に努めているが、焼け石に水でしかない。

巨大生物はなおも、周囲にいる漁船めがけて火球ブレスを次々と発射する。威力が非常に高く、発射寸前まで獲物を追尾してくるという特性上、漁船には火球ブレスを避けることは到底できなかった。漁船は片っ端から直撃弾を受け、あるいは直撃をぎりぎりで回避したものの船縁の喫水線付近に被弾し、大穴を開けられてしまう。大穴を開けられた漁船はそこから浸水し、灼熱の海水を船内に飲み込んで被弾した側に傾き始めた。やがて、バリバリと木が裂ける音を発し、燃えながら横転して沈んでいく。

船員たちの決死の回避行動も虚しく、漁業船団は急速にその数を減らしていき、巨大生物が出現して３０分後には全滅していた。１隻残らず撃沈、あるいは航行不能にされていたのである。漁船の乗員たちおよそ１２０人は、その全員が未帰還となったのだった。

だが、アルバーン帝国にとって、漁業船団の犠牲は決して無駄にはならなかった。

この巨大生物は、その巨体ゆえにカザンの港からもよく見えていた。そのため、アルバーン帝国海軍・カザン軍港司令部は巨大生物の出現を目視で確認すると同時に、現在カザンに集結している海軍の全艦艇に対して緊急出撃を命令した。そして、漁業船団が蹂躙されている間に、艦隊は準備を完了し、出撃してきたというわけだ。つまり、漁業船団は巨大生物に蹂躙され全滅してしまったが、結果としてアルバーン帝国艦隊が出撃準備を整える時間を稼いだ、というわけだ。

アルバーン帝国海軍の主力艦隊……弩弓（バリスタ）を装備したガレオン船１５０隻、ガレー船２００隻、切り込み用の快速小型船２００隻、総勢５５０隻という数は、周辺国の海軍力と比較しても頭一つ以上抜きん出た規模である。その艦隊が一斉に白い帆を広げ、全力出撃していく様は、世界制覇を果たしたアルバーン帝国の栄光を先取りしているかのようであった。

「全船戦闘配備！　あの巨大生物をカザンに近づけるな！　ここで倒し、海に沈めてやれ！

我々アルバーン帝国に楯突いたことを、海の底で後悔させてやるのだ！」

一際大きなガレオン船の上で、司令官オッズが声を張り上げる。ガレオン船では完全武装の兵士たちが握り拳を突き上げて雄叫びを上げ、ガレー船は一斉に太鼓を打ち鳴らして士気の旺盛なることを示す。

「総勢５５０隻の一斉出撃……これは、アルバーン帝国海軍始まって以来初めてのことだ。これだけの数、強力なバリスタ、そして練度の高い兵士たち。如何に巨大生物といえど、我が海軍に敵うものではない！」

敵意も露に、オッズは巨大生物を睨みつける。

巨大生物も、艦隊の接近に気付いたらしい。徐に頭部をもたげると、海上に巨大な咆哮を轟かせた。

グオオオオオアアアアアアーッ!!

遠距離からでも、その声ははっきりと聞こえた。

（くそっ！　これだけ離れていても、これほどはっきり聞こえるとは……！）

オッズは以前、古竜の咆哮を聞いたことがある。

そもそもアルバーン帝国という国にとって、古竜とは結構身近な存在だ。何しろ帝国の南東部、海岸近くの森の中に、「古竜の里」と呼ばれる古竜たちの住まうエリアがあるのだから。このため、帝国の住民の多くは古竜の咆哮には馴染みがある。それも軍人となれば、古竜の咆哮を聞く機会はなおさら多いのだ。

そのオッズの経験に照らしても、今回の巨大生物の咆哮の声量は凄まじい。明らかに、古竜たちの咆哮を超える声量だ。だがそれだけではなく、禍々しい響きを多分に含んでいる。そしてその咆哮に接した瞬間、オッズの軍人としての勘が激しい警鐘を鳴らす。

（何だ、この不吉な感じは……!?）

オッズがそう思った時。

軍船が、爆ぜた。

巨大生物が放った火球ブレスが、ガレー船の１隻を直撃したのだ。たった１発の火球ブレスではあったが、それは信じられないような大爆発を起こし、ガレー船の船首どころか船体前部を瞬時に粉々に粉砕

した。
　爆発の余波でマストも帆も失い、ガレー船は見る間に速度を落とす。一瞬で1隻分の戦力が失われたのは大きい。
　ガレー船という船の戦闘方法は、接舷しての乗組員による白兵戦以外では、基本的に船首水線下に設けられた衝角（ラム）だ。それを船首ごと叩き潰されたのだから、ブレスの直撃を受けたガレー船の戦闘力は大きく損なわれたことになる。
　船首を失ったガレー船は、船内に大量の海水を飲み込み始め、大きく傾きながらよろめいて戦列を離れた。あれではもう、戦闘どころか港へ戻るのが精一杯だろう。そしてそのガレー船に、生物が放った2発目の火球ブレスが着弾した。
　目を焼き焦がすような爆発が収まった時には、ガレー船は燃え盛る残骸と化して赤い海面にその身を横たえている。既に船体の大半は海面下に没しており、どう考えても沈没を免れることはできない。
　そして空からは、焼けた木屑と人体の一部だったものがバラバラと降ってくる。
「う……うぇっ！」
　あまりに酷く、そして生々しい戦友の死を目撃し、兵士の中には吐き気を催す者も出る。
「怯むな！　1隻やられたとて、どうしたというのだ！
　ガレー船と小型船はオールを構えて突撃！　奴の土手っ腹に風穴開けてやれ！　ガレオン船はバリスタで援護しろ！」
　士気が下がりつつある部下たちを、オッズは大声で励ます。
　太鼓の音が鳴り渡り、ガレー船は舷側から突き出したオールをムカデの脚のように動かして、巨大生物へと突撃していく。帆を持たない小型船がそれに続く。ガレオン船も帆をいっぱいに張り、巨大生物へと迫っていく。
　と、巨大生物は再び咆哮を放った。
グオオオオオアアアアアアーッ!!
　今度はただ吼えるだけではなく、両翼の先端から赤い液体を大量に打ち上げる。

「漁船を全滅させた、あの火炎弾の雨か！　全艦、空に注意しろ！　火が降ってくるぞ！」
　オッズは指示を飛ばす。数十秒後、上空から５０個にも達する火炎弾が落下してきた。
　空から降ってくる、大量の火炎弾。アルバーン帝国艦隊の帆船は、何とかそれらを避けようとするが、機動力の低さ故に回避しきれず、次々と被弾していく。あるガレオン船は２発もの火炎弾を喰らい、マストを全て失って燃えながら漂流するばかりとなった。あるガレー船は、上空から落下した火炎弾が最上甲板を突き破って船内で炸裂し、一瞬にしてオールの漕ぎ手の大半を焼き殺されたばかりか、マストも同時に失った。またあるガレー船は、火炎弾を避けようとして周囲への注意が疎かになり、別のガレー船に船首をぶつけて喫水線下に大穴を開けてしまった。ある小型船は直撃こそ免れたものの、至近弾となった火炎弾が海面に落ちた時に発生した爆発により、木っ端微塵に吹き飛んだ。
「「ぎゃあああーーー!!!!」」
「助け……グシャッ」
「「あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟あ〟!!!」
　全身火だるまにされた兵が、絶鳴を放って倒れ伏す。燃えながら倒れてきたマストに潰される兵もいる。炎の塊と化した船から逃れるべく、海に飛び込む兵もいたが……海は既に灼熱の熱湯地獄となっており、飛び込んだ直後に断末魔の声が響き渡る。うっかり飛び込んだ兵士たちは、地獄の亡者のような凄絶な悲鳴を上げながら、茹だって死んでいった。重い金属製の武具を身に纏ったまま海に飛び込んだばっかりに、武具を脱ぐこともできず溺れ死んでいく者もいる。
「くそっ、なんて奴だ！」
　殺されていく部下たちを見ての悲しみ、そして何もできない無力感に、オッズは忌々しさをこめて吐き捨てた。そしてきっと巨大生物を睨む。
　火炎弾が海面にぶつかった際に大量の水蒸気が発生し、それが海から立ち上る湯気と混じり合って、視界は霧がかかったようになってい

る。その中に、例の巨大生物がぼんやりした影絵のように見えていた。その大きさは見上げんばかりになっている。
と、その時。
「……え？」
オッズは呟いた。というのも、巨大生物の影が突如として消えてしまったのである。
ざっばぁぁぁぁぁぁぁん!!!
だが、直後に響いてきた滝のような水音により、オッズは事態を理解した。例の生物は海面に倒れ込んだらしい。
と、いうことは。
「まずい！」
オッズが叫んだ時には、遅すぎた。
艦隊の前方に、背の低い赤い壁のようなものが迫ってきた、と思う間もなく、艦体が上下に激しく揺れる。巨大生物の倒れ込みによって大波が発生し、艦はそれに乗せられたのだ。
艦体が比較的大きいガレー船は、上手く乗り越えているようだ。ガレオン船も大半は乗り越えているものの、一部が横合いから煽られて横転したようだ。激しい水音が聞こえる。そして小型船は片っ端から転覆し、海面に投げ出された兵士たちの絶叫が轟音に混じって聞こえる。
大波による動揺が収まった時には、小型船の８割方が転覆し、役に立たなくなっていた。艦隊総数は約４００隻にまで討ち減らされている。ほんのわずかな時間の間に、約４割の戦力が失われたのだ。
（我が艦隊が……世界最強を誇る我がアルバーン帝国海軍の主力艦隊が、これほどまでにあっさりやられるとは……！）
歯軋りするオッズ。しかも、敵は今海中にその姿を消しており、手出しができない。艦隊の先頭にいるガレー船などは、敵の近くまで進出しているはずであるが。
その瞬間、海上に鈍い爆発音と共に巨木のような太い水柱がそびえ立ち、１隻のガレー船が巻き込まれた。水柱が消えた時には、ガレー船は神隠しにでもあったように消え失せてしまっている。

船がどうなったのかは、もはや考えるまでもない。おそらく、水中からの敵の攻撃を受け、粉微塵に粉砕されてしまったのだ。
それを皮切りに、ガレー船やガレオン船が次々と水柱を突き立てられ、バラバラになって沈んでいく。敵の攻撃はどうやらブレスであるらしい。しかも、水中でも火を纏っているという訳の分からない代物だ。
火は水をかけられると消えるのが普通だ。なのに何故、水中で火を燃やしたままにできる!?
常識を超えた現象を見せつけられ、オッズの脳における情報処理は、既に限界に達しつつあった。
嵐のように思われた巨大生物の攻撃は、しばらくの後に止んだ。だが、そのしばらくの間に、オッズの艦隊からは新たに１０隻ほどの大型船が失われてしまった。一方的な攻撃を受け続け、損害を出し続けているため、兵たちの士気も低下している。
しかも、障害となっているのはそれだけではない。海上からは尋常ならざる熱気が立ち込めており、そのため白兵戦に備えて重い金属製の防具を身につけていた兵士たちは、重装備で身を固めたのが仇となって熱中症に苦しめられる者が続出していた。
「敵はどこだ！」
「敵影、どこにも見当たりません！」
額の汗を拭いながら叫ぶオッズに、マストによじ登っていた見張りが報告する。
ただでさえ敵は海中に潜ってしまった上に、海上は湯気が立ち込めるわ陽炎が発生するわで視界が絶望的に悪い。さらに、血のように赤い海の色は、全体に黒っぽい敵の影をほぼ完全に押し隠してしまう。周囲の空気がひりついているから、敵が近くにいることは間違いないのだが……どこにいるのか皆目分からない。
「よく探せ！　あんなデカブツだ、探せば見つけられる！」
兵士たちに怒鳴りながら、自ら周囲を見回すオッズの耳に、ゴウゴウという不吉な音が響く。それは次第に大きくなり、下から聞こえてくるようにも感じられた。

「どこにいる……？　まさか、艦隊の真下か!?」
考えを口に出してオッズが叫んだ時。
前方の海面が、大きく弾けた。
現代の地球人がその光景を見たならば、核兵器の水中爆発の実験を連想するだろう。ビキニ環礁で行われたものなどを。
鼓膜を突き破りそうな、もはや暴力とすら言える爆音が大気を震わせ、これまでに観測されたどんな水柱よりも太く高い水柱が、天を衝かんばかりに立ち上った。水柱に巻き込まれた軍船は、大小の別なく木っ端微塵に吹き飛び、乗っていた兵士たちはその場で戦死した。爆発の威力は凄まじく、爆発が起きた地点のすぐ近くにいた軍船は、強烈な衝撃波によってマストを薙ぎ倒され、直後に爆風と大波を受けて転覆する船が続出した。オッズの乗る船は大波を乗り切れたものの、甲板上に固定されていなかった木箱と樽（たる）が幾つか、海へと吹っ飛んだ。
爆発の余韻が収まりきらないうちに、海上に白い水の壁が突き上がり、それを破るようにして巨大生物が姿を現す。それは、オッズがこれまでに見たどんな生物とも似ていなかった。
水深が浅くなってきているせいだろう、巨大生物は肩の高さまでを海面上に露出させている。周囲では大量の白い水蒸気が発生していたが、折からの風がそれらを吹き飛ばし、生物の姿を見せていた。
見上げるような巨体の上に細長い首を据え、全身を灼熱の花弁のような鱗と岩石のような甲殻で覆ったその姿は、竜種を彷彿とさせるものがあるが、しかし竜種とは異なる点がある。最も目立つ相違点はその翼だ。胴体から岩の塊を生やしたような形をしており、翼膜が見当たらないことから考えても、どう見ても飛行しそうにはない。また、翼の先端には赤赤と輝く大穴が開いており、胴体から先端に向かって赤いラインが走っている。そのラインは最終的に肩、もしくは海面のすぐ下にある胸と思しき部分にある赤い部分へと繋がっている。
細長く扁平に伸びた首にも、同じような赤いラインが無数に走っており、項には横向きにぽっかりと開いた大穴が合計６つ、赤い光を放っている。そしてその先には、巨体には見合わぬ小さな頭があり、

天に向かって生えた2本の角と目、そして多数の牙が生え揃った口がある。紅蓮に輝く双眼は、その燃えるような色とは裏腹に、絶対零度の眼光を以て周囲を睥睨(へいげい)している。

その凶眼に真っ向から睨み据えられ、オッズの背中に鳥肌が立った。本能が「この生物と敵対してはならない」と恐怖を訴える。圧倒的に巨大な生命が放つプレッシャーと恐るべき力の前に、心が萎縮し、今にも背を向けて逃げ出したくなる。

だが、ここで自分が真っ先に逃げ出してしまえば、残される部下たちを見殺しにすることになる。そんなことをすれば、軍法会議どころかその場で極刑となりかねない。それに、自分たちは精強なるアルバーン帝国海軍の主力艦隊だ。いわばこの世界のどこにも比肩し得る者のない、最強の海軍だ。その誇りに賭けて、負けるわけには行かない。

幸いにして、生物はその図体の大きさ故に素早い行動は取れないようだ。熱ささえ我慢すれば、攻撃を当てることはできる。それならば、まだ勝機はある。

本能を理性で打ち消し、オッズは命令を飛ばす。

「敵が姿を現したぞ、今がチャンスだ！　全艦攻撃、攻撃せよ！　あいつを海の底に叩き沈めてやれ！」

熱く熱された空気を震わせ、太鼓の音が鳴り渡る。それと同時に、旗艦のマストに「総攻撃」を意味する旗が掲げられた。いつの間にか海の色を反映したかのような赤銅色(しゃくどういろ)の雲が現れ、空を覆っていく中で、合図の旗がはためく。

海上に太鼓を連打する音が何重にも重なって響き、ガレー船が機敏に動き出す。船首水線下に装備された衝角(ラム)をぶつけて、生物を攻撃するつもりなのだ。固い木を槍のような形状に削り、表面に鉄板を貼り付けて補強した衝角は、ぶつければ絶大な威力を発揮する。あの巨大生物にも、大ダメージを与えられるはずだ。バリスタも良い援護射撃になるだろう。

また、船に乗り込んでいる兵士たちはその全員が優れた戦士でもある。剣や槍の扱いに長けているのだ。

つまり、まだこれからだ。戦いはまだ、終わっていない。奴を倒し、帝国の歴史に新たな栄光を刻み込むのだ！

オッズが決意を新たにした瞬間、

グオオオオオアアアアアアーッ!!

巨大生物が凄まじい咆哮を放った。その禍々しい響きを聞いた途端、オッズを含めてその場にいた全ての人間が一斉に同じ反応を示す。両手で耳を塞ぎ、身体を丸めて蹲ったのだ。中にはガタガタと震えている兵もいる。勇敢さでは誰にも引けを取らないはずの軍人が、まるで赤子のような反応を示しているのだ。

アルバーン帝国軍人たちの視界を、真っ赤な光が照らし出す。巨大生物が、咆哮と同時に両翼をもたげ、その先端から赤い液体を空に向かって打ち上げたのだ。

「またあの攻撃だ！　炎の雨が降ってくるぞ！　何とかして躱せ！」

オッズが命令を出した直後、燃え盛る赤い塊が次々と天空から降り注ぐ。広範囲に落下する数十個もの火炎弾の前に、アルバーン帝国の軍船は次々と破壊され、燃やされて行動不能、あるいは沈没した。

しかも、空から降り注ぐ火炎弾とは別に、巨大生物自身も攻撃を仕掛けてくる。長い首をもたげ、口内に赤い炎を溜め込んだ後、赤い火球ブレスとして発射してくる。しかも、発射寸前まで目標を追尾してくるため、機動力の低い軍船がこれを避けるのは至難の技……というか、不可能であった。

あるガレー船は真正面から巨大生物のブレスを受け、一撃で最上甲板の大半を引き剥がされた上、マストをへし折られてしまった。船上には激しい火災が発生しており、もはや攻撃どころではない。また、あるガレオン船は空から降ってきた火炎弾を避けようとして、巨大生物に狙われていることに気付けず、火炎弾は回避できたもののブレスで撃ち抜かれてしまった。マストが倒れ、船上を炎が席巻し、炎を背負った兵が甲板を転げ回る。今回の火炎弾落下と生物の攻撃だけで、新たに３０隻もの船が戦列から失われた。

だが、味方が犠牲になっている間に一部の軍船がどうにか射程内に巨大生物を捕捉し、反撃を開始した。巨大生物との距離を３００メー

トルまで詰めたところで、ガレオン船が巨大生物に横腹を向け、バリスタから一斉に矢を放つ。発射された矢は、その大半が海面に落下したが、一部は見事に生物に命中した。翼や首元に矢が命中し、ぱっと火花が散る。その援護の下、ガレー船が真一文字に生物めがけて突進していった。

巨大生物のブレスに撃ち抜かれ、炎上して動かなくなるガレー船もあったが、それでも何隻かは生物に肉薄していく。そしてついに、1隻のガレー船が生物に突っ込んだ。

ばきぃ！

瞬間、くぐもった鈍い音が響く。そしてガレー船は船首を炎上させ、慌てたような動きで巨大生物から離れ始めた。いったい何があったのか……その答えは、航行不能となり燃え盛るガレー船からボートで脱出してきた兵士によって、明らかとなった。

「あの生物、クソ熱い上にどれだけ硬いんだ！　ぶつかったこっちのラムが、バッキリへし折れちまったよ！」

まさかの事態に、この話を聞いた全員が目が点になった。

そう、なんとラムの方が壊れてしまったのである。ということは、あの巨大生物の全身を覆う甲殻は、鉄板を貼り付けて補強した木材よりも遥かに硬いということになる。これで、ラムアタックという方法は使えなくなった。

しかも、巨大生物の周辺は尋常ならざる高温のようで、ゆらゆらと陽炎がゆらめいている。兵士たちの中には、この熱気によってまともに動けない者が続出し、接近戦闘も困難な者であることが判明した。また、船体を構成する木材も、その恐るべき熱のせいで自然発火しかねないらしい。これでは近接白兵戦という手段も使えない。

そうなると、残った攻撃手段としてはただ1つ、遠距離攻撃しかない。つまり、船の上からバリスタや弓を使って矢を放ち、あるいは魔法で攻撃するのだ。

大きな被害を出しながらも、事態の報告は伝令を乗せたボートによってどうにかオッズの元まで上げられた。それを聞いて、オッズは指示を飛ばす。

「かくなる上は、遠距離からちまちまやるしかないな。全船へ通達しろ、『バリスタや弓、魔法で遠距離から攻撃せよ』と！」
旗と狼煙を使った信号によって命令が伝達され、艦隊は行動に移る。巨大生物の行手を遮るような形で半包囲の陣を敷いた後、一斉にバリスタと弓矢を射掛け、魔導士が攻撃魔法を放つ。
現在の敵との距離はおよそ２５０メートル。本来、弓矢は届かない距離であるはずだが、魔導士が起こした風魔法によって弓矢の射程が延伸されている。そのため、強力な弦を張った弓ならば、巨大生物に何とか矢が届くようになっていた。
熱風が吹く中、ガレー船やガレオン船から次々と雨のように放たれる大小の矢。それらは大半を外しつつも次々と巨大生物に命中している……が、硬質な音と火花を残して弾かれるものが多い。
逆に、生物が放つ火球ブレスは一発ずつしか撃てないものの、その一発はほぼ必中であり、しかも狙った軍船を一撃で大破、もしくは轟沈に追い込んでしまう。地球においては旧日本軍の軍人が「百発百中の砲一門は、百発一中の砲百門に勝る」という言葉を残しているが、まさにその言葉が体現されていた。巨大生物が火球ブレスを一発発射する度に、軍船が破壊され、兵士たちの命が消し飛ばされるのである。
「くそ、当たることは当たるがダメージが入っているようには見えない……！　何か、突破口はないか……っ？」
炎上し、沈み行く味方のガレオン船を見て歯軋りしながら、オッズは呟く。このままでは損害を重ねるだけになりかねない。
そこで、首尾よく矢が刺さった位置を観察したのだが……彼は気付いた。矢が刺さった位置は、体表に走る赤いラインの近辺に集中しているのだ。なるほど、あの生物の体温は尋常ならざる高いものである。そしておそらく、あの赤いラインこそが高い体温の原因となっているのだろう。そのラインの周辺だけ甲殻が柔らかくなっている、と見るべきか。
矢が刺さった位置からは、細い煙がしゅうしゅうと噴き出ている。目を凝らすと、微かにだが赤い液体が流れ落ちているのも見えた。血液が流出しているのだと判断し、オッズは新たに命令を出した。

「全船に通達、『体表の赤いラインを狙え』と！」
「承知しました！」
これで事態の突破口が見えた……オッズはそう思っていた。
その瞬間、巨大生物が新たな動きを見せる。上体を軽くのけ反らせたのだ。
攻撃によるダメージで怯んだと判断し、1隻のガレー船が正面から体当たりを仕掛けようとする。だが、生物は腕を軽く振り上げると、上体を海面に倒すようにして、突っ込んできたガレー船にパンチを浴びせた。
瞬間、
どがぁーん!!
どういうメカニズムなのか、振り下ろされた生物の腕から爆炎が迸る。たった1回のパンチでガレー船は文字通り木っ端微塵となり、あっという間に海上から消え去った。
「くそっ！　あんな技まで持ってんのか……！」
思わずオッズは叫んだ。そして同時に、改めて自分たちが何を相手にしているのか理解した。
この巨大生物は、その巨体故に動きこそ鈍重であるが、それを補って余りあるとんでもない力を持っている。それも攻撃と防御の両面においてだ。
攻撃力は言わずもがな、これまで嫌になるほど見せつけられている。あの巨体自体が武器となり、一度倒れ込めば船を容易に転覆させる大波を易々と引き起こす。腕をよく観察すると、そこには炎をそのまま凝固させたかのような鋭い爪があり、その威力は計り知れない。また、その口と両翼からは凄まじい量の炎を打ち出すことができ、その威力は大型の軍船であろうと一撃で屠るほどのものがある。
防御面でも鉄壁と言っても良いものがあり、全身を覆う甲殻は岩のように頑丈で、スピードの乗ったガレー船の突撃すら通用しない。また、体温は異常と言い切れるほど高く、その身体から放つ熱気によってこちらの動きを制限してくる。
そして最悪なことに、この巨大生物が持つ力はこれで全てではない

可能性がある。何しろ海を真っ赤に染めて煮立たせているのだ。そんなことは、この世界の如何なる魔物の力を……例え古竜の力を借りようとも、できる訳がない。だというのに、この生物はたった一体でそれだけのことをやってのけた。いったいどれほどの力があるのか、想像もつかない。

（そんな相手と戦っているのか、我々は……）

オッズは心が折れそうになるのを感じた。だが、ギリギリのところで踏み止まる。

戦っている間にいつの間にか陸地との距離が詰まっており、巨大生物はカザンの目と鼻の先まで迫っている。それはつまり、自分たちが逃げ出せばカザンが蹂躙されてしまうことはまず間違いない、ということを意味する。

アルバーン帝国軍人の名誉に賭けて、そんなことを許すわけにはいかない。そもそも自国最大の港街の前で、海軍主力が逃げ出すことなど許されるはずがない。選択肢など、最初（ハナ）から存在しないのだ。

「こうなった以上、数の力で押し潰すしかない！

全船、巨大生物に向けて突撃せよ！　アルバーン帝国の意地を見せてやれ！」

オッズは命じた。

信号旗が掲げられ、太鼓が打ち鳴らされる。現在まで生き残っている艦はガレー船・ガレオン船合わせて２００隻程度、それらの艦が一斉に動き出し、生物に向けてバリスタを撃ちかける。ガレー船の中には、肉薄して魔法と弓による一斉砲火を浴びせようとする艦もある。それに対して、巨大生物は巨体を大きくのけ反らせたかと思うと、前方に倒れ込んだ。

倒れてきた巨体を避けることができず、前方に突出していたガレー船が２隻巻き込まれる。巨体に覆い被さられた２隻の船がどうなったかは、考えるまでもない。

さらに、生物の巨体が倒れ込んだことで大波が発生する。もう水深も浅くなっていたため、船が転覆するほどの波が立たなかったのが幸いだ。が、これでホッとしていた兵士たちは、手痛い反撃を受けるこ

とになった。
　巨大生物は、水中にいるとは信じがたいほどの機動性を発揮し、這いずり移動だけで次々と軍船を轢き潰していく。バリスタや弓矢、攻撃魔法がほぼゼロ距離で飛んでくるが、それには委細構わず、船が密集しているところに突入して片っ端から破壊する。さらに、巨大生物が一歩踏み出す度に両翼や項の大穴から真っ赤な火炎弾が噴出し、ギリギリで巨大生物の突進を回避した軍船に命中、大火災を引き起こす。その突撃を回避して生き残っていた軍船には、超高速の火球ブレスが叩き込まれ、軍船は一撃で大破、航行不能となって燃えながら沈んでいく。
　アルバーン帝国艦隊は、その数を急速に減らしていった。しかも、巨大生物は歩幅が非常に大きく、ただの這いずりで数百メートルも移動してしまう。このため、機動力の低い帆船では追いかけることすら一苦労だ。
　艦隊を突破した巨大生物は、陸の方へ向かいかけて急に停止した。そこは陸上からの距離がまだ４００メートルほどもあり、陸からのバリスタの迎撃が届くか届かないか、という地点だ。そこで巨大生物は急に身体を丸める。
　動きすぎて疲れたのか、と考えたオッズは、その考えが間違いであることを直後に悟った。生物の両翼に走る赤いラインは爛々と光り輝き、生物の身体は小刻みに震えている。それはまるで……
（まずい！　奴は大技を放とうとしている！
　何としても、阻止しなければ……！）
　だが、軍船に素早い機動は不可能だ。帆船は、オッズにとってもどかしいほどノロノロとしか動かない。
　そうこうするうちに、生物は丸めていた身体を伸ばしはじめ……
　世界が、震えた。
　大気を大きく震わせ、抵抗しようとする心を粉々に打ち砕くような凄まじい咆哮を放つ巨大生物。その両翼は眩いばかりに輝き、これまでとは比較にならないほど大量の赤い液体を天空に向けて噴き上げる。１０秒ほどの後、打ち上げられた液体は１００個以上もあるので

はないかと思うほどの、大量の火炎弾となって空から降ってきた。
百雷のごとき轟音が周囲にこだまし、世界の全てが赤く燃え上がった。海上に生き残っていた艦隊は、炎の雨に打たれて凄まじい被害を出し、片端から轟沈していく。海面に投げ出された兵を待つ運命は、熱中症を原因とする溺死か焼死かの二択だ。
また、火炎弾の一部は陸上にも落下し、カザン市街地や港湾施設を焼く。今頃市街地では、恐怖と混乱が渦を巻いているだろう。
その光景を見せつけられながらも、しかしオッズには何もできない。ひたすらに、上空から降り注ぐ火炎弾を回避し続けるだけだ。一瞬でも油断すれば、そこには戦死しかない。
火炎弾の落下がやっと収まった時、オッズには時間にして３０分は経過したように感じられた。実際は５分も経っていなかったに違いない。そしてその刹那の間に、艦隊は文字通りに全滅し、オッズの旗艦しか残っていなかった。
そのオッズの視界に、新たな物が映り込む。それは……

こちらを睨み据える、巨大生物の絶対零度の眼差し。そしてその口に迸る、大量の青白い炎だった。

その炎が巨大な球体状のブレスとして放たれる。それは、オッズの乗る旗艦をぴたりと照準していた。絶対に、外すことはない。
目の前の光景が見えなくなり、その代わりにこれまでオッズが目にしてきた光景が次々と目に浮かぶ。小さい頃に見た光景も混じっていた。なるほど、これが「走馬灯」というものか。
その光景を見たオッズの思いは、ただ１つだった。
（ああ……これは詰んだな）
次の瞬間、彼の視界は一面の白光に包まれた。

アルバーン帝国海軍主力艦隊５５０隻、たった一体の生物の前に全

滅。船1隻、兵士1人たりとも帰還すること能わず、文字通りの全滅を遂げた。

カザンの海の護りは、消滅したのである。

第４話　深海からの挑戦

アルバーン帝国東部にある港街カザン。ここには、アルバーン帝国海軍最大の拠点として、艦隊司令部が置かれている。そしてこの街には、アルバーン帝国海軍の主力艦隊５５０隻が集結し、他国との戦争のような有事に備えて待機していた。

艦隊の数は多く、船に装備された弩弓（バリスタ）も新型のものばかりであり、そして兵の練度も高い。文字通り、この世界では最強クラスの力を誇る海軍戦力である……そのはずだった。

「我が、『無敵艦隊』……全滅……！」

「「……」」

カザン艦隊司令部に、血相を変えて飛び込んできた伝令兵の報告が、悲痛な響きを伴って響いた。

いや、報告など聞かずとも、艦隊司令部から直接見えていたのだ。突如現れた巨大生物が、艦隊を蹂躙し全滅させていく様子が。

その光景をまざまざと見せつけられた艦隊司令部要員全員が、言葉を失っていた。精強を誇るアルバーン帝国海軍主力艦隊５５０隻、それがたった一体の生物に全滅させられた。それは、現実の光景とはとても思えなかった。

「何が……起きた……？」

「艦隊が……！」

司令部の幕僚たちが絶句する中、艦隊司令部の長官ファッジは呟いた。

「私は……悪い夢でも見ているのだろうか……？」

夢なら覚めてくれ、と願った。だが残念ながら、これは事実である。

そうこうしている間に、艦隊を殲滅した巨大生物は進行を再開し、カザンに向けて接近しつつある。２本の足で歩いているらしく、だんだんとここに迫ってきていた。どおん、という足音らしい轟音が周期的に響いてくる。

「司令、敵生物はなおもこちらに接近中です！　このままでは、カザンに上陸してくるのも確実かと！」

部下からの報告で、ファッジは我に返った。
「い、いかん！　カザン艦隊司令部に非常呼集をかけろ、非番の者も全て総動員してあの生物を迎え撃つのだ！
カザンの方には、全域に非常事態を宣言しろ！」
「はっ！」
アルバーン帝国海軍・カザン司令部には、艦隊の他に司令部そのものを守る陸上戦力も配備されている。カザン軍港自体の大きさもあり、結構な数の陸上兵力があるのだ。それに、帝国陸軍のカザン駐屯隊にも応援を要請できる。
加えて、海上であれば人間は船に乗っているしかないため、どうしても機動力が落ちるし、弓矢も船が揺れるせいで照準が安定しない。だが地上ならば、人間は照準を安定させて弓矢を放つことができるし、徒歩もしくは馬によって機動力を引き上げることもできる。司令部そのものに敵を引きつけて叩けば良いのだ。ファッジはそう判断していた。
「カザン司令部の兵力は、歩兵１，５００、騎兵２００、魔導士３００。当面の時間稼ぎとしては十分だ。
巨大生物よ、貴様はアルバーン帝国の栄光を踏み躙ってくれた。その報いを、存分に受けさせてやる！」
ファッジが怒りと共に決意を新たにした時、カザンの市街地の方から連続した鐘の音が聞こえてきた。それは、アルバーン帝国開闢（かいびゃく）以来初めて鳴らされる、避難を指示する帝国式の警報であった。
一定の周期で打ち鳴らされる鐘の音により、いつも通り平和に始まるはずだったカザンの朝は、瞬く間に騒々しいものとなった。
一般市民たちは、聞き慣れない鐘の音に首を傾げる者、急いで逃げ出そうとする者、様々な反応を示している。一部の一般市民は、先に巨大生物が放っていた火炎弾の落下を見て逃げ始めており、市街地道路は混乱しつつある。
カザン艦隊司令部付きの兵士たちは急ぎ武具を装備し、隊列を組んで迎撃の準備を始める。陸軍の駐屯地でも、兵士たちが大急ぎで緊急出撃の準備をしていた。

カザンの今日の空の色は、赤。一面に血を流したような、真っ赤な色である。それは朝焼けや夕焼けとは本質的に異なる異様な色であり、しかもインクが紙に滲むようにじわじわと青空を侵食していた。また、海も血液のような真っ赤な色に変貌しており、赤く染まった海面が沖合まで延々と広がっている。そして海の上には、赤銅色の不気味な雲が分厚く垂れ込めていた。異様な光景、という他はない。

そんな中、どおん、という鈍い足音を響かせながら、巨大生物はカザンへと確実に近付いている。

「くそ、でかいな……」

自らも金属製の鎧と剣を装備して出てきたファッジは、陸まで大分近付いてきた巨大生物を見て呟いた。

沖合にいた時点でも大きいと思ったが、間近で見ればその大きさは別格だ。まるで古竜でも相手にしているかのように思えてくる。

艦隊司令部付きの兵士たちが全員配置についた、と報告が上がった。

「バリスタ、弓、魔法、一斉攻撃用意！　奴が上陸した直後に集中攻撃だ！」

水際攻撃ではなく、相手が上陸して体勢を整えている間に攻撃するよう指示するファッジ。これは戦術的には正しい指示だ。史実でも旧日本軍は、サイパン島などでアメリカ軍の水際迎撃に失敗し、以降水際迎撃を廃して上陸直後の迎撃に方針を切り替えた。その結果、ペリリュー島、硫黄島などでは上陸してきたアメリカ軍に大打撃を与えている。

そしてついに、巨大生物はカザン軍港の岸壁に到達すると、両方の前脚を岸壁にかけ、よじ登るようにして上陸してきた。瞬間、弓弦（ゆづる）の鳴る音が一斉に響き、１００本以上の矢が生物に殺到する。そして、生物の身体に次々と命中した。火花と硬質な音が散り、放たれた弓矢の一部は弾かれ、一部は見事に生物に突き刺さっている。

それと同時に、次々と呪文詠唱の声が響いた。

「ウォーター・ランス！」

「ソイル・スピアー！」

「アイシクル・ジャベリン！」
水魔法や土魔法、氷魔法を中心に、幾つもの攻撃魔法が殺到する。魔導士の一部は支援用の風魔法を唱えたらしく、放たれた攻撃魔法は追い風に乗って飛翔速度を上げる。そして巨大生物に殺到したのだが……
じゅっ！
ばきっ！
しゅううう……
どれもほぼ全くと言って良いほど通用しなかった。
水の槍は、どういう訳か巨大生物との距離に反比例するように小さくなっていき、巨大生物に命中した時にはただの「ウォーター・ボール」になり果てていた。そしてすぐに蒸発してしまった。土の剣は、巨大生物に見事命中したものの砕け散ってしまう。氷の剣に至っては空中を飛翔している間に溶けてしまい、もはや氷魔法にすらなっていない。どうやら巨大生物は、洒落にならないような高い体温を持っているらしかった。そしてよく見ると、弓矢による攻撃も大したダメージになったようには見えなかった。
身体に無数の矢が突き刺さったまま、全身を露わにした巨大生物はゆっくりと上体を起こす。身体の大きさは圧倒的であり、古竜ですら上回る巨体なのではないかと思わされるほどだった。全身を赤い花のような鱗と岩盤のような黒い甲殻で包み、身体各部には赤いラインが走っている。胴体のほぼ中央、胸と思しき部分及び両前脚の付け根と尾の付け根には明るいオレンジ色に光り輝く部分があり、どうやら赤いラインはそこから走っているらしい。尾は非常に長く、荒れ地の岩肌を思わせるごつごつした甲殻に覆われた刺々しい見た目をしており、長大な戦鎚（メイス）を思わせた。背中に生えた両翼には翼膜が見当たらず、飛ぶためにあるものとは思えない。代わりに、翼の先端には赤く輝く巨大な穴がその口を開き、空を睨み据えている。そして胴体の上方に伸びた、細長く扁平な首の先には胴体に比して小さな頭部があり、天に向かって生えた2本の角と深紅の双眸、唇がなく無数の牙が剥き出しになった口がある。また項には、赤赤と光を放つ大穴が合計

６つ開いていた。その穴から炎の弾が噴き出し、地面に落下して炸裂する。
前方の視界一面が赤く染まり、岸壁は炎で覆われた。ファッジや兵士たちの顔を熱風が撫でる。
巨大生物は、自らが作り出した業火の中で悠然と佇み、こちらを睨み付けた。高所から投げられる、鋭く、そして灼熱とは裏腹に冷え切った視線に、ファッジの心臓が早鐘のように鼓動する。巨大生物が全身から放つ凄まじいプレッシャーは、彼らの上から重くのしかかり、まだ矛を交えてもいないというのに彼らは既に心が折れかけていた。
この世界においては、体躯の大きさはその生物の強さに直結することが多い。その法則に照らせば、この生物は人間種が矮小な存在にしか見えなくなるほどの、圧倒的な力を持つに相違ない。巨体だけでも脅威だというのに、この上全身から炎を噴き出す力まで持ち合わせるとなれば、その脅威は破格のものだ。巨大生物と真っ向から対峙する彼らは、それをまざまざと感じていた。
だが、自分たちはいずれ世界を統一し真の覇者となるべきアルバーン帝国、その精鋭の一角だ。逃げることは許されない。
勇気を奮い起こし、ファッジは命令を下した。
「怯むなぁ！　我らは誇り高きアルバーン帝国軍！　巨大だとはいえたった一体の生物に、何を恐れることがあろうか！
ここを耐えれば、陸軍の連中が駆けつけてくれる！　我々はそれまで、この戦線を支えれば良いのだ！　者ども、行くぞーっ！」
これには若干の脚色が混じっている。戦線を支えた後は、陸軍部隊と連携してこの巨大生物を討伐しなければならないからだ。だがまずは、当面の士気と統制を保つことが必要である。ならば、嘘も方便であった。
「「「「おおおおお!!」」」」
兵士たちは、ある者は盾に剣を打ちつけ、ある者は槍の石突で石畳を叩きながら、自らを、仲間を鼓舞するべく大声を上げる。何人もの人間、それも軍人が上げる叫び声は、大気を震わせ、味方の士気を上

げるには十分であった。
ところが、その瞬間。
グオオオオオアアアアアアアーッ!!
人間たちに威嚇されたと受け取ったのか、巨大生物も右脚を一歩前に踏み出しながら凄まじい咆哮を上げた。その声量は大気どころか地軸すら震わせるかと錯覚するほどのものであり、その響きには禍々しさが感じられる。兵士たちの雄叫びなど、到底及ばない。
(ぐぅっ…!　何と凄まじい…!)
もはや音の暴力と言っても良い咆哮を聞いて、ファッジ以下の兵士たちは全員が耳を塞ぐ。いや、それだけではなかった。
一部の兵士は身体を丸めて蹲り、ガタガタと震えている。勇敢さでは誰にも引けを取らないはずの軍人が、怯えているのだ。あの巨大生物の咆哮だけで。
しかも、巨大生物は首をぶん回して咆哮しているため、咆哮の影響範囲はかなり広い。一般市民の中にも、この咆哮を聞くか、あるいは巨大生物を直接見てしまい、腰を抜かして立てなくなる者が出ていた。
咆哮する巨大生物、その両翼に走る赤いラインが眩く輝き、オレンジを通り越して黄金色にも似た煌めきを放つ。次の瞬間、金色に輝く両翼の大穴から大量の液体が空に向けて撃ち出された。それと同時に大地は激しく震え、周辺の家では窓ガラスが割れる、屋根板が外れて落下する等の被害が出る。まるで火山の噴火そのものである。
空中高く打ち上げられた液体は、上空の大気によって冷やされて凝集し、火山弾を思わせる真っ赤な塊になった。それが3、40個もあるだろうか、次々と落下してくる。
次の瞬間、カザン市街地と艦隊司令部は瞬く間に修羅場となった。十分な速度をつけて空から降ってきた火炎弾の威力は凄まじく、家屋の屋根を一撃で破壊し、屋内に燃える木の板の雨を降らせる。それだけではなく、落下の衝撃で破裂した火炎弾は、内包されていた赤い液体を撒き散らす。溶岩のような見た目の液体は火を纏っており、屋内の床や壁、家具などを瞬く間に燃え上がらせた。また、火炎弾が直撃

した木造家屋は、屋根と大黒柱をまとめて破壊され、炎の塊となって崩れ落ちる。道に落下した火炎弾はものすごい勢いで爆発し、周辺にいた人々を一瞬で蒸発させた上に炎を撒き散らして道を封鎖する。一般市民にも水魔法を使える者はいるものの、そのほとんどはコップ1杯くらいの量の水を出すのが限界であり、火炎弾による火が相手では文字通りの「焼け石に水」でしかなかった。また、隊列を組んで応戦しようとしていた兵士たちにも容赦無く火炎弾が降り注ぐ。重い武具を装備してきっちりと並んでいた兵士たちには、落下してくる火炎弾を咄嗟に避ける、という行動は容易には取れなかった。そのため、火炎弾1発の爆発で十人単位の兵士が吹き飛ばされ、戦死していく。

カザン市街地は、赤と黒に染められ始めた。赤は炎の色、黒は煙である。しかも巨大生物が撃ち出したこれは射程距離も広く、カザンのほぼ東端から撃たれた火炎弾の中には市街地西側まで到達したものもあった。

一般市民たちは完全にパニックを起こし、とにかく安全を求めてめくらめっぽう逃げ惑う。軍の兵士や魔導士たちも、空から降ってくる災厄に注意を取られ……それが、ある1人の女性魔導士の運命を決してしまった。火炎弾に気を取られてしまい、巨大生物本体が口内に炎を漲らせているのを見逃してしまったのだ。

何者にも邪魔されぬまま、巨大生物は口から火球ブレスを1発発射する。気付くのが遅れた女性魔導士が、慌てて「マジック・シールド」を唱えたものの時既に遅く、火球ブレスは魔導士に着弾して爆発した。爆発が収まった時には、女性魔導士の姿は消えている。最初から存在などしなかったかのように、痕跡1つ残さず消し飛ばされたのだ。

魔導士を一撃で屠った巨大生物は、立て続けにもう1発火球ブレスを放つ。発射されたブレスは照準過たず、鎧と大盾を装備した重装歩兵隊の隊列の真ん中に着弾した。大きな爆発が起こり、重い武具を装備しているはずの重装歩兵がゴミのように吹き飛んでいく。その武具が溶けているところから、巨大生物のブレスの威力が窺える。

巨大生物の攻撃により、歩兵隊の戦意は低下してきていた。何せ片っ端から仲間があっさり死んでいくのである。彼らも軍に所属している以上、死の覚悟はできていたが、敵国の兵と戦って魔法や矢や剣で刺されるならともかく、一瞬で蒸発するなんて死に方は想定していない。そのため心が挫けつつあったのだ。

その時、馬蹄の響きが石畳の道に響く。艦隊司令部付きの騎兵２００騎が、一斉突撃を開始したのだ。騎士たちが槍を突き上げ、雄叫びを上げながら巨大生物に向かって突っ込んでいく。

対する巨大生物はといえば、特に気負う様子もなく右の前脚を振り上げただけ。そして上体を倒し、騎馬隊の先頭集団にパンチを浴びせた。

次の瞬間、前脚が叩きつけられた地面が爆発した。それをまともに受けた騎馬隊の先頭集団は、避ける暇もなく爆発に巻き込まれ、骨肉ぐちゃぐちゃ（それも人肉と馬肉の混成ミンチ）のバラバラ死体となってその場に散らばった。また、パンチと爆発そのものは避けられたものの爆風の効果範囲内にいた兵と馬は、強烈な爆風によって吹っ飛ばされ、周囲の建物や立木に叩きつけられる。大きな音を立てて立木が折れ、建物に叩きつけられた人馬が壁に血の帯を引きずって地面に落ちる。当然、吹き飛ばされた者はいずれも即死である。

また、パンチの威力はどれだけあるのか、前脚が叩きつけられた地面からは放射状のひびが、かなりの距離に渡って石畳を走っている。げに恐ろしきは、そんなパンチを平然と繰り出す巨大生物である。

その巨大生物はというと、数こそ減ったものの未だに多数残っている騎兵や歩兵、魔導士や弓箭隊（きゅうせん）を見て、ちまちまやるのも面倒だと判断したのか、上体をのけ反らせてその場に倒れ込んだ。ただの倒れ込みと侮るなかれ、これほどの巨体が倒れ込んだのでは、相当な脅威になる。実際、回避の遅れた騎兵のほとんどがこの倒れ込みで押し潰され、大地のシミと変わった。生き残れた騎兵も、生物の倒れ込みによって発生した地震のような大揺れに足を取られ、突撃どころではない。歩兵なども同じであった。そこへ、生物の両翼と項からこぼれ落ちた火炎弾が降り注ぎ、軍の被害をさらに拡大する。

また、この地震めいた揺れによって市街地と艦隊司令部の被害はさらに拡大した。地震に遭ったように家々が倒壊し、その瓦礫に火が回って燃え始める。木造の漁師小屋などは一瞬でバラバラになり、石造の建物も壁が崩壊するなどの被害が出る。それに委細頓着せず、巨大生物は前方に見える歩兵と魔導士の集団に向けて這いずりで突っ込んだ。

彼らはまだ地揺れに足を取られて翻弄されており、まともに動くこともできていない。そのため、迫り来る生物の巨体を目にしてもできることはなかった。なす術もないまま、歩兵隊と魔導士たちは巨大生物に踏み潰され、一瞬でその数を減らしていく。巨大生物が一歩踏み込むごとに、バキバキ、ぐちゃぐちゃと嫌な音が響き、有機物が焼け焦げる不快極まりない臭いが鼻を衝く。巨体による歩幅の大きさもあり、巨大生物はたった10歩程度の這いずりで歩兵隊の防衛線を突破し、艦隊司令部の近くで立ち止まった。

その時、立ち止まった生物の左の翼に、太い矢が命中し突き刺さる。見ると、艦隊司令部の屋上にバリスタが2基設置されており、兵がそれに取り付いていた。どうやらバリスタで歩兵隊を援護しようとしているらしい。練度の高さが窺える一面である。

だが、巨大生物は艦隊司令部の建物に向き直ると、兵士たちの抵抗を嘲笑うかのように火球ブレスを発射。放たれたブレスは正確に着弾し、バリスタのうち1つは第2の矢を放つ前に破壊されてしまった。そしてもう1つのバリスタも、第2の矢を放ったところで兵士ごと焼かれた。

破壊されたバリスタに代わり、今度は艦隊司令部の建物の陰などに潜んでいた歩兵が、弓や魔法といった遠距離攻撃を加える。ここに至り、巨大生物は艦隊司令部を先に潰すと決定したようだ。一声吼えるや、這いずり突進で建物に急接近する。

「止めろ！　止まれー……」

まだ生き残っていたファッジが叫んだが、生物に聞く耳があるはずもない。巨大生物はそのまま艦隊司令部の建物に突撃し、体当たりを喰らわせた。

石で作られていた頑丈な艦隊司令部の建物も、巨大生物の突撃には歯が立たなかった。子供が作った積み木の城のように一瞬で崩れ、煙のような石の粉をもうもうと巻き上げながら、瓦礫の山と成り果てていく。そこへ駄目押しとばかりに、巨大生物の項から落下した火炎弾が炸裂し、燃え盛る赤い液体をぶちまけた。司令部に詰めていた兵士たちは、その大半が今の這いずりだけで死んだだろう。ほんの一瞬の出来事である。

司令部を突き崩した巨大生物は、その場で反転する。その時、生物の尻尾が勢いよく振り抜かれ、カザン海軍基地敷地内に残されていた建物にぶつかった。

生物にしてみれば、ただ単に身体の向きを変えただけの、特に意識することもない普通の動作だっただろう。だが、尻尾が激突した建物は一瞬で1階を丸ごと破壊され、自重によって大地に崩れ落ちる。巨大生物の一挙手一投足だけでも、天災レベルの被害をカザンにもたらしていた。

反転した巨大生物は再び這いずって前進し、カザン海軍基地の全ての建物を踏み潰し、基地を更地に変えた。さらに通りを渡った先の住宅街に突入し、近くの一軒家や宿屋などを軒並み踏み潰す。

と、巨大生物はその場で身体を丸めた。尻尾の付け根や前脚の付け根にある赤い発光体が強く輝き、オレンジ色どころか金色の光を発する。そして両翼と尻尾の付け根上部から、火山の噴火を思わせるような煙が噴き上がる。

ファッジ以下、まだ生存していた歩兵や魔導士は、必死に生物に向けて走り出した。あれはヤバい、と彼らの本能が訴える。何とかして止めなければ、と思う。しかし、巨大生物はさっきの這いずりだけで歩兵隊との距離を大きく引き離しており、歩兵隊と巨大生物の間には、重い武具を付けた歩兵隊には厳しすぎる距離があった。故に、彼らは警戒すること以外、ほぼ何もできなかった。

やがて、巨大生物は丸めていた身体を伸ばし、咆哮と共に溜め込んだ力を全て解放した。

グオオオオオアアアアアアアーッ!!!

これまでに聞いたどんな咆哮よりも凄まじい咆哮が轟く。両翼と尻尾の付け根からは、これまでに見たことがないほど大量の赤い液体が空に向かって撃ち出される。まるで生きた火山というべき所業であった。ファッジたちが何もできずに見守る前で、発射された液体は、上空で不気味に渦を巻く赤銅色の分厚い雲に吸い込まれていった。

やがて、雲の中から赤く輝く塊が多数……それこそ１００個以上も落下してきた。そして、煉獄のような時間が始まった。

パニックを起こして逃げ惑う一般市民と、それに巻き込まれて未だに戦場への合流を果たせずにいる帝国陸軍カザン守備隊の兵士たち。そして、カザンを守るべくギルドマスターの命令を受け、陸軍に同行して巨大生物の討伐に参加しようとしていた地元のハンターたち。そういった人々の頭上に、火炎弾は平等に降り注ぎ死をもたらす。道路は火炎弾の炸裂によって広がった炎や崩れた住宅によって次々と封鎖され、炎と黒煙が市街地を覆っていく。市街地中央部にあるハンターギルド・カザン支部も火炎弾が1発直撃し、落下してきた屋根に押し潰されてギルドマスターが戦死した。ギルド支部の建物で発生した火災は、ハンターたちの水魔法によってどうにか消し止めたものの、マスターが戦死したせいで混乱が起きており、容易には回復しそうになかった。

その時、街の人々は市街地東部の方で大きな爆発音が響くのを聞いた。これは、巨大生物が口内に大量の青白い炎をチャージし、艦隊司令部周辺に残っていた歩兵隊をチャージブレスでまとめて吹き飛ばした音であった。ファッジ以下残存していた面々は、この一撃で大半が即死。僅かな生存者たちは戦意を完全に喪失し、バラバラになって退却した。カザン艦隊司令部付きの兵士たちの損耗率は、８割を軽く超えており、完全に組織的戦闘能力を失っていた。

一面の火炎に覆われた市街地東部、その炎と異様な赤に染まった空をバックに、巨大生物のシルエットが影絵のように浮かび上がる。そして生物は、勝ち鬨を上げるかのように大きく咆哮しながら、両翼から液体を打ち上げ、炎の雨を降らせるのだった。

その後、火炎弾による無差別攻撃で1割強の損害を出しながらも、帝国陸軍カザン守備隊の将兵4，500名とハンターパーティ8個合わせて38名のハンターたち、そして市民の有志を中心とする自警団約150名が戦場に到着し、巨大生物と交戦した。が、

グオオオオオアアアアアアーッ!!!

ずどどどどど……どがぁーん!!!

「「「ぎゃあああああーーー!!!」」」

咆哮に心胆を縮められ、それを立て直す暇もなく、巨大生物が降らせる火炎弾の雨に打たれ、

「火炎ブレスだ！」

『マジック・シールド』！　……どしゅっ」

「馬鹿な！　なんでブレスが『マジック・シールド』を貫通し……ぎゃあああ！」

口から放たれる高温の火球ブレスで狙撃され、

「くそアイツめ、ブレスが正確すぎだ！」

「なら懐に飛び込んで接近戦……って、あっっっっっっう!!!」

「駄目だ熱すぎる！　近寄れん!!」

接近戦を挑もうにも、巨大生物の体温の高さで追い返され、

「やばい！　アイツ倒れてくるぞ！」

「回避！　回避いいいグジャッ」

どごおおおおおおん!!

巨大生物の倒れ込みによって圧死し、

「突っ込んでくる！　避けろ！」

「あんなのどうやって避けるんだ！」

「知らん！　とにかく走れえええええ（ぷちっ、という音と共に台詞が途切れる）」

高速かつ大股で這いずってくる巨大生物に踏み潰され、

「自警団は全滅だ！　ハンターたちも壊滅してる、もう戦えん！」

「第6歩兵中隊全滅！　第8歩兵中隊壊滅！」

「我が方の兵は、既に半数が戦死又は戦闘不能！」

「そんな、そんな馬鹿な！　たった一体の生物に、ここまでやられると

は！」
　瞬く間に兵力をすり減らされ、
「っ！　敵生物、身体を丸めています！」
「何か、力を溜め込んでるように見える？」
「まずい！　あれは大技だ、食い止めろ！」
「食い止めろって、どうやって食い止め…」
グオオオオアアアアアアーッ!!!!
　ひゅうううう……ずどどどどどどがぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!
「「ぎゃあああー!!」」
「あ〝っ、あ〝っ、あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝あ〝!!!」
「熱いよぉぉぉ助けてぇぇぇぇ……」
　巨大生物が打ち上げた１００個以上の火炎弾の猛威に晒され、
「味方残存兵力、残り８００人を切りました！」
「総員突撃用意！　これが……これが、我がアルバーン帝国陸軍の意地だ！」
「敵生物、こっちを向いて……!!!何か、口から青白い炎を…！」
どがあああああぁぁぁぁぁぁん!!!!
　巨大生物のチャージブレスで木っ端微塵に消し飛ばされ……そして誰もいなくなった。

　アルバーン帝国陸軍カザン守備隊５，０００名、地元ハンターパーティ８個、カザン自警団総員２００名、巨大生物と交戦し総員戦死。これだけの犠牲を払ってなお、巨大生物を仕留めるどころか、まともな手傷を負わせることすらできなかった。
　そして、カザンにあって巨大生物と戦える即応兵力は、もうほとんど残っていなかった……。
　守備兵力を壊滅させた巨大生物は、何ら邪魔されることもないままカザン市街地中央部へ、そして西部へと進行。その過程で何度も噴火を繰り返し、戦略爆撃のごとく火炎弾を市街地一帯に降らせ、逃げ遅れた人々も空になった家々も、全てを炎に沈めていった。炎は風を呼び、竜巻となって飲み込んだ物全てを焼きながら舞い上げ、空から灰

を雨と降らせた。何もかもが炎に飲み込まれ、焼け落ちていった……。

そして、日本時間でいうなら午前7時半頃。

交易商人なら知らぬ者はいない地であったアルバーン帝国東部の港街カザンは、たった2時間半ほどで焦土と化した。港、市街地の家並み、防衛用の砦、全てが等しく炎の海に崩れ落ち、鳥の囀(さえず)り1つ聞こえぬ黒焦げの土地となった。この街には、軍民合わせて5万人が住んでいたのだが、そのうち少なくとも40%近くの人々が戦禍の中で息絶えた。それはまさに……

「劫火(ごうか)だ……」

命からがらカザンを脱出できた市民の1人が、さっきまで街があったところに広がる炎の海を振り返って呟いた。そう、それはまさに地獄の劫火。建造物だろうが生命体だろうが、形ある物全てを無に帰す火炎地獄である。

「私たちの街が……消える……」

「終わりだ……何もかも……」

そんなことを譫言(うわごと)のように呟きながら、焼け出された人々は帝都をはじめとする帝国各地へと散っていった。とにかく炎と咆哮のないところを求めて。

陸上の全てが炎に包まれ、海までもが真っ赤に染まって一面赤の世界となったカザンにおいて、生命の息吹はたった1つしか感じられなくなっていた。それはたった1つでありながら、しかし並び立つ者のない圧倒的に巨大な一個の生命。そう、あの巨大生物である。この煉獄を作り出した張本人である。

自らが作り出した一面の劫火の中に、悠然と佇む巨大生物。炎によって真っ赤に染まった大地を見下ろす黒いその姿は、まるで地上に降臨した悪魔であった。

と、どこからかゴゴゴゴゴゴ……という轟音が聞こえ、地面が震え始める。そして、

ドドオオオーン!!

カザンの付近にある山の1つが、頂上から大量の黒煙を噴き上げ

た。爆発によって吹っ飛んだ岩石が散弾銃の弾のように四方八方に飛び散り、噴煙は火災煙と混じり合って視界をさらに悪化させる。
なお、一応断っておくが、今噴火した山は元々普通の山だったものだ。活火山などでは決してなく、アルバーン帝国の歴史を紐解いても、この山が噴火したなどという記録は1つもない。そんな「普通の山」であった山が、急に噴火したのだ。
さらに、炎に覆われたカザン市街地に異変が生じる。地面があちこちひび割れ、そこから炎にも見える赤い液体が噴き出たのだ。ひび割れは市街地外周から中心方向に向かって生じていく。その先にいるのは、あの巨大生物だ。
グオオオオアアアアアーッ!!!
自ら作り出した破壊と煉獄の中で、巨大生物の咆哮が響き渡る。己の所業を勝ち誇るかのように。
……そして、アルバーン帝国の、さらにはこの世界の終わりを象徴するかのように。

第5話　灼炎の帝王

カザンを壊滅させた巨大生物は、1時間ほどの間カザン跡地に留まった後、燃え落ちた港街を放置してゆっくりと移動を開始した。少しだけ西へ進み、それから向きを変えて南西の方向へ。大雑把に言えば、巨大生物はほとんど海岸線に沿ってアルバーン帝国南部へと進攻を開始したのだ。

ちなみに、巨大生物が去った後の港街カザンは、もはや都市とは言えない状態になっていた。地面は広範囲に渡って黒ずみ、ところどころまだ赤熱している箇所がある。建物の土台も石畳の道路もほとんど目立たない。家も立ち木も全て焼け落ちたため、もはや何がどこにあったのか分からないほどの状態になっている。アルバーン帝国が建国され、第2代皇帝の治世に開闢（かいびゃく）されて以来、120年あまりに渡って繁栄を謳歌し続けてきた港湾都市の面影は、どこにもなかった。

その巨大生物は、人間が普通に歩くよりも少し速い程度の速度で海岸線沿いに進攻を続けている。進攻に伴って、アルバーン帝国南部の空は鮮血を思わせる不吉な赤色に染められた。陸上では空気が急速に乾燥し、巨大生物が身体から発する高熱も相まって、自然発火による森林火災が同時多発的に発生し、山々は次々と火を噴いた。それも、これまで何の変哲もない普通の山だった山が、突如として噴火したのだ。また、巨大生物は時々海に飛び込んだため、海洋も煮立って真っ赤に赤熱し、海域に生息していた生命は次々と死滅した。

巨大生物の接近と、それに伴う自然災害の連続発生に伴い、本能的に危険を察知した生物や魔物は、大いなる災厄の接近を恐れて逃げ出した。それにより、帝国東部から南部では各地で動物の暴走状態（スタンピード）が発生し、畑が踏み荒らされる、移動中の隊商（キャラバン）やハンターパーティが巻き込まれて積み荷や人員に被害が出る、村が襲われて死傷者が多数発生するなどの二次被害が出た。また、それに起因する三次被害として、帝国東部から南部の各都市に設置されたハンターギルド支部には、魔物や動物の暴走を止めて欲しいという緊急依頼が大量に舞い込み、事

態に対応できる人手が足りなくなってきていた。
唐突だが、ここで問題である。
巨大生物は海岸線に沿って、アルバーン帝国東部から南東部、さらに南部へと進行しつつある。では、その巨大生物の進行ルート上には……具体的には帝国南東部には、何があるか？

答えは、そう、「古竜の里」である。

「いったいどうしたというのだ、これは!?」
空を飛んでいた複数の古竜のうち1頭が叫んだ。この古竜たちは、「赤き誓い」に会いにティルス王国まで出かけ、古竜一族内に裏口伝で伝わる話を聞かせるのと引き換えに、爪や角に飾り彫りをしてもらって、今帰ってきたのである。「赤き誓い」の…正確にはマイルの…仕事に満足して帰ってきてみたら、なんと里の方がとんでもないことになっていたのだ。
里自体には特に変事は起きていなかったのだが、その周囲は阿鼻叫喚そのものだった。山々は突然に爆発して頂上から黒煙を噴き上げ、森林は炎に包まれて燃え、時折地面が揺れる現象すら発生していた。そして、森に住んでいたとみられる獣人や動物、魔物が、山の爆発や森林火災から逃れるべく、ひた走っていた。その動物たちがあちこちでぶつかり合い、体格の小さいものや弱いものが踏み潰されて死んでいく。
何が起きているのか、里の上層部でも把握できておらず、現在の指導者たるヴァルティンも混乱していた。もちろんケラゴンやベレデテスたちも、現状を理解しきれていない。何せ突然に、この異変は始まったのだから。
ティルス王国から戻ってきた長老クラスの古竜も交え、古竜たちは

口伝で伝わる事象を片っ端から探ってみた。その結果、山々の爆発や森林火災といった事象そのものに関しては、記録が見つかった。だが、それらはあくまで「事象そのものが単発で発生した場合」に限られており、こんなに同時多発的に発生する事象は見つからない。

それに加えて、「大気の温度が異常に上がってくる」「空が血を流したような異様な赤に染まる」といった、口伝にもない異常現象までが同時に発生していた。

長老や指導者を含む「古竜の里」上層部は混乱し、雌たちやまだ幼い幼竜は怯え、里全体が混乱状態となった。

そんなある日、里周辺で動物や魔物の暴走を食い止めながら監視を行っていた古竜戦士隊から緊急報告が上げられた。非常に巨大な生物が、ゆっくりとこちらへ接近しつつある、と。また、観察した限りでは、巨大な生物は全身が黒と赤のツートンカラーで、身体のあちこちから火を噴きながら歩いている、とも報告された。

おそらくこの生物こそが、動物の暴走を引き起こした張本人であろう……「古竜の里」では直ちにそのような結論が出され、古竜戦士隊の全力を挙げてこの生物を倒すことが決定された。

「古竜の里」側では、雌たちと幼竜を里に立てこもらせ、里のすぐ外縁部にはベレデテスやケラゴンといった戦士隊には属していない雄の竜を配置。そして里の手前２００メートルの位置にある平原に、古竜戦士隊の雄竜全てを配置し、ヴァルティン自らが指揮を執った。

アルバーン帝国南東部に位置する「古竜の里」に住まう古竜は、成竜・幼竜合わせて１００頭。うち幼竜は全部で２１頭おり、これは戦力として数えることはできない。また、残り７９頭のうち４２頭は雌竜であり、これも戦力として数えることはできなかった。そして残りの３７頭のうち、現在古竜戦士隊に配属されているのは２４頭。残り１３頭は、里の上層部に当たる長老やケラゴンのような元戦士隊メンバー、あるいはウェンスやベレデテスのような「成竜だがまだ若い竜」のような面々である。

古竜戦士隊が「打倒すべき相手」と定めた巨大生物も、古竜たちの姿を認めたのだろう、まっすぐ里へと向かってきた。そして里の手前

で、古竜戦士隊と相対することになったのである。カザン滅亡から2日後の、太陽が最も高く登る頃のことだった。

燃え盛る森林をバックに、向かい合う２６頭の竜。正確には１頭対　２５頭に分かれて向かい合っている。

数だけの比較で言えば、どう考えても１頭しかいない側は数の暴力に抗いきれず、２５頭もいる側……ヴァルティン率いる古竜戦士隊に叩き潰されそうに思える。ところが、個々の体格で比較してみると、１頭しかいない側……巨大生物の方が体格に恵まれていた。古竜たちは、この世界の陸上で生きる生物としては最も巨大な体躯を持つため、常に相手を見下ろす立場になる。ところが、この生物に限っては例外で、何と古竜たちが生物の顔を見上げる側になってしまった。それだけでも、この生物がどれだけ大きいかがよく分かる。

巨大生物は、四肢とは分離した翼、それに長大な尾を持ち、全身を赤い鱗と黒っぽい甲殻で覆っている。外見的特徴は竜種のそれに酷似する。だが、その胸、両肩、尻尾の付け根には赤い核のようなものがあり、何らかの液体が渦を巻いているように見受けられた。そこから伸びた真っ赤なラインが、尻尾以外の全身をくまなく走っている。また、身体各部には赤く光る大穴が開いており、時折そこから火炎弾を落としている。そして最大の相違点として、飛竜（ワイバーン）や古竜のように翼を持つものの、翼膜が存在しておらず、飛行するためにあるようにはとても見えない。

隊列を組んだ古竜たちの前方４０メートルほどのところまで接近してきた巨大生物は、そこでぴたりと歩みを止め、古竜たちを睨みつけたまま動こうとしない。それに対して古竜たちも、メンチを切るかのように真っ向から巨大生物を睨み返す。

まさに一触即発、という雰囲気があった。そんな中、ヴァルティンが口を開く。

『そこなる生物よ、これより先は我々の住まう「古竜の里」である。この先への立ち入りは許さん、これ以上進むつもりなら、我々は貴様を倒す！』

竜の言葉で、巨大生物に命令を出したのだ。しかし話が通じないと

見えて、巨大生物が反転する様子はない。それどころか、小刻みに歩行して「古竜の里」へと近付こうとしている。
交渉決裂……というより、相手にはこちらの命令に応じる気はないと判断した古竜たちは、最後の警告の意味を込めて一斉に咆哮した。
グオオオオオオオオオッ!!
古竜の咆哮。それは、この世界においてほとんどの場合「破滅フラグ」を意味する。
古竜は、この世界においては「最強の魔物」と称される。生物の中でも圧倒的に恵まれた巨大な体躯、エルフ族でも及ばないほどの膨大な魔力、そして長い寿命に裏打ちされた、人間にも勝るとされる知性。どれをとっても他の生物に劣るところはなく、それはまさに「無敵」という言葉がぴったりであった。古竜とは、それほどの存在なのである。
そんな古竜が咆哮する、という状況には、幾つか種類がある。例えば、自らの縄張りを主張する場合。近距離にいる仲間に何かを知らせる場合。……そして、外敵と認定した者を叩き潰す時のような、怒りの咆哮。
今回の場合は明らかに、森を荒らされたことに対する怒りを背景としたものである。また、里にいる雌たちや幼竜を守らなければならない、という事情もある。そんな訳で、今回の咆哮を聞いた者は、これより死ぬことを運命付けられる。
こうなると、この咆哮を聞かされた相手には、必死になって命乞いをするくらいしか手は残されていない。
…ところが。
グオオオオオアアアアアアアーッ!!!
何と巨大生物は、その咆哮を真っ向から受け止めたのみならず、お返しの咆哮を放ってきた。それも、古竜たち全部の声を合わせたよりも声量が大きい。まるで、彼我の力の差をそのまま反映したかのようだった。
ここまで挑戦的な態度を取られては、どうしようもない。これより先にあるのは対話ではない。力の行使あるのみである。

ヴァルティンと巨大生物が、ほぼ同時に動いた。巨大生物は長い首を振り回し、口内に真っ赤な炎を滾らせる。それに対し、ヴァルティンが叫んだ。

『古竜の指導者である我、ヴァルティンが命ず！　魔法の精霊よ、我が眼前の巨大生物から魔法の力を取り上げよ！』

ヴァルティンのみが使用できる技、「魔法の行使権の取り上げ」である。

これはどんな技か、ということを解説するために、少々メタい話になってしまうことをお許し願いたい。

この世界においては、魔法というものが存在する……と、一般的には認識されている。が、実際は認識とはやや異なっており、創造主（神のような存在）が散布したナノマシンが、人間や魔物の脳内イメージに応じた現象を発現させる、というものである。そのナノマシンが発現させる現象が、何もない空気中から水を出現させたりするものであるため、「理解しにくい何らかの力」という形で「魔法」と認識されているのである。

その魔法めいた現象を発現してくれるナノマシンであるが、だいたいどんな生物でも個体ごとに「利用権限レベル」というものが設定されている。そのレベルに応じて、ナノマシンに対してできることが増える、というシステムになっているのだ。

例えば、ナノマシンそのものに話しかけたりできるのは、権限レベル３以上（ただし、この世界では「ナノマシン」とは認識されず、「魔法の精霊」とかいう形で誤解されることが多い）。細菌兵器の製造には、権限レベル７以上が求められる。こういった形で、権限レベルに応じて様々なことができるようになる。

ちなみにヴァルティンは権限レベル４であり、「魔法の精霊」もといナノマシンに命令することで、「自分より権限レベルの低い者が、魔法を利用することを（一時的に）不可能にする」ということができる。これは、魔法とか魔力が重視されるこの世界においては、凄まじい威力を発揮する。

ヴァルティンの詠唱が完了し、その効果が発現するのと、巨大生物

がブレスの発射態勢を整えるのとがほぼ同時だった。
そして、
ゴッ！
ずどん！
『がああああああぁぁっ!!!』
凄絶な悲鳴が、ヴァルティンの喉から迸った。いったい何があったのか。
ほとんど根元から粉砕され、焼け焦げたヴァルティンの右の前脚が、全てを物語っていた。
自らにとって必殺技とも言える「魔法の行使権の取り上げ」を命じたヴァルティン。彼は、この技に全幅の信頼を置いていた。
かつて「赤き誓い」と戦った時、ヴァルティンはこの技を仕掛けたものの、己より上位の権限レベルに達した者がいたために不発に終わった。そのことを忘れていたわけではないが、彼は、同じ竜種相手なら通用すると睨んだのだった。
確かにヴァルティンの読み通りに事が進んだかもしれない……この巨大生物が、この世界の理から外れていなければ。
「魔法の行使権の取り上げ」という技は強力だが、それが通じない場合もあるのだ。例えば、より上位の権限レベルを認められている者に対してこの技を使った場合。あるいは、より上位の権限レベルを認められている者が、「行使権の取り上げは無効とせよ」とナノマシンに命じた場合。あるいは……
相手の使うブレスのような技が、ナノマシンに一切頼らずに発射されている場合。
巨大生物は、ヴァルティンの呪文詠唱が完了し、その効果が発現されると同時に火球ブレスを発射したのだ。それは消えることなく、真っ直ぐにヴァルティンめがけて高速で飛翔した。
「赤き誓い」との戦いにおける苦い経験を覚えていた彼は、火球ブレスに対して咄嗟に回避行動を取った。が、火球ブレスの速度は彼の目測を遥かに超えており、心臓や魔石への直撃こそ避けられたものの、右の前脚が引っかかってしまったのだ。

火球ブレスが炸裂した瞬間、激痛にも似た高熱と衝撃が襲ってきた。その高熱のためにヴァルティンは悲鳴を上げ、その後体勢を立て直そうとして……見てしまった。自分の右の前脚が、バッサリ消えてなくなっているのを。

『ゑ？』

自分の身体に何が起こったのか理解できず、根元からほぼ完全に失われた右の前脚と、黒く焼き固められた断面を見て一瞬固まるヴァルティン。その瞬間、これまで感じたことのない激痛が、彼の神経回路を駆け抜け、知覚野に押し寄せてきた。

『ぐあああああっ！　腕が！　腕がぁぁ!!』

ある種のアニメが好きな日本人が聞いたら、サングラスをかけたどこぞの軍人を彷彿とさせるような絶叫が上がる。

古竜という生物は、その身体の表面を覆う鱗や甲殻には常に微弱な防御魔法がかけられている。また、その巨大かつ強靭な肉体は、それだけで他の生物に対する圧倒的な防御となる。そのため、古竜には「身体を切られること」の痛みを知らない者が非常に多いのだ。古竜を傷つけ得る存在そのものがいないに等しい以上、仕方のないことではあるが。

粉砕された右前脚の断面は、巨大生物が放った火球ブレスの余波によって既に焼き固められており、それによって止血された状態となっている。だが皮肉にも、そのせいで彼の苦痛は倍加されることになったのだ。

右前脚に感じる喪失感と、そこから押し寄せる激烈な痛みに転げ回るヴァルティン。こうなれば、もはや戦力としては脱落である。そんな彼に向け、巨大生物は2発目のブレスの発射体勢に入っていた。

『させん！』

古竜戦士隊の中でも、比較的ベテランの地位にある古竜が咄嗟に、ヴァルティンを庇って前へ飛び出す。その直後、大気を切り裂いて真っ赤な火球ブレスが飛んできた。

ずどん！

その火球ブレスはヴァルティンではなく、割り込んできた古竜に命

中。炸裂した瞬間、一瞬時が止まったように感じられた。ヴァルティンを庇って胴体中央部にブレスの直撃を受けた古竜は、ぴくりとも動かない。

『な、何故だ！　何故「魔法障壁」を素通りするのだ！』

その後ろでは、別の古竜が混乱している。彼はヴァルティンと割り込んだ古竜を庇うように「魔法障壁」を張ったのだが、生物のブレスはそれを素通りしていったのだ。

と、ヴァルティンの代わりにブレスを受けた古竜の身体が、急にぐらりと傾いた。そして、

ずしーん……

重々しい地響きと共に、大地に倒れる。その胴体中央部を見てしまった戦士隊の面々は、息を呑んだ。

胴体中央部は広範囲に渡って身体表面の鱗が破壊されており、それどころかむき出しになった筋肉までもが粉砕され、あるいは真っ黒焦げになっている。そして。

心臓と、その真上にある魔石が、どちらも粉々にされていた。

それが意味するところはたった1つ、その古竜が死んだということ。つまり、生物の火球ブレス1発で殺された、ということである。

古竜は不死の存在ではない。だが、その死因というのはほとんどの場合「病気」とか「寿命」である。殺される、ということは非常に少ないのだ。

古竜が殺される、というのは、例えばまだ幼い子どもの竜に対して大型バリスタを多数装備する連隊や軍団規模の人間が攻撃した、というような場合だけだ。古竜の成竜が殺される、などというようなこと自体、想像だにされていなかった。

だというのに、この巨大生物はたった1発の火球ブレスで、成竜、それも古竜戦士隊の中でも比較的ベテランの位置にいる竜を殺害したのだ。古竜の成竜に傷を付けるだけでも類稀な存在だというのに、この上たった一撃で成竜を殺してしまったのだ。この巨大生物は、いったいどれほどの力を持つというのか。

全く予想していなかった事態を前に、戦士隊の面々（ただしヴァル

ティンを除く。彼は自分自身の身体に走る激痛と喪失感に完全に注意を取られているため）が固まる。

『『……』』

目の前で起こった、あまりにも現実離れした事象に、理解が追いつかない古竜たち。突然の仲間の死に衝撃を受けていた彼らは、１つ重大なものを見落とした。

巨大生物の胸と両肩、それに尻尾の付け根にある赤い核のようなものが、オレンジを通り越して黄金色の輝きを放っており、生物の全身に走る真っ赤なラインも金色に光り輝いていたのである。そして、生物の両翼の先端からは、噴火寸前の火山のように大量の煙が噴き上がっていた。

グオオオオオアアアアアアーッ!!!

大気をつんざき、古竜たちの鼓膜を突き破らんばかりの大音量で咆哮が轟く。圧倒的な音の暴力に耐えられず、古竜たちが慌てて耳を塞ぐ。それに委細構わず、巨大生物は大地を震わせ、その両翼の先端から大量の赤い液体を空に向かって撃ち上げた。

撃ち上げられた赤い液体は、「古竜の里」の上空まで広がりつつあった赤い雲の中で冷え固まり、火炎弾となる。そして重力に引っ張られ、雲から落下する雨粒のように降ってきた。

次の瞬間、辺り一帯は一瞬で火炎地獄と化した。

どどどどどがあぁぁぁん!!!

『『『ぎゃあああああ!!』』』

火炎弾の雨は広範囲に渡って降り注ぎ、辺りの森林は瞬時に炎に覆われた。あっという間に緑が赤に置換され、平原も一面の火の海となった。

火炎弾は、綺麗な隊列を作って並んでいた古竜戦士隊の頭上にも、容赦無く降り注いだ。２頭の古竜が火炎弾を躱し損ね、脳天に直撃を受ける。その途端、命中した火炎弾は炸裂し、中から大量の真っ赤な液体を噴き出させた。

赤い液体はどうやら凄まじい高熱を持っているらしく、全身に赤い液体を浴びせられた古竜は、言葉にならない絶叫をあげて周囲を転げ

回っている。赤い液体の持つ高熱の前に、鱗は一瞬で溶かされ、筋肉は焼け落ち、内臓は致命的なダメージを受けた。無機物である骨すらも、無理矢理焼かれてなくなっていく。

他の古竜が慌てて水魔法を行使し、焼かれる古竜に水を浴びせたが、大量の湯気が噴き上がるだけで火は消えない。さらに水の量を増やし、どうにか消し止めた時には、既に焼かれた古竜は動かなくなり、心臓も鼓動を止めていた。

それだけではなく、火炎弾は脅威的な射程を持っており、１０発以上が「古竜の里」に落下、次々と炸裂した。古竜の住処に次々と火が回り、火炎弾の直撃を受けた雌の古竜が短い絶鳴を放って倒れ伏す。直撃こそ免れたものの、火炎弾が至近距離で炸裂し赤い液体を被った幼竜が、身体を焼かれて大泣きしている。

『ハルルが！　ハルルがやられた！』

『シェララさん！　シェララさん、大丈夫ですか！』

不意に絶叫が上がり、里のすぐ外側で配置に就いていたベレデテスははっとした。持ち場をケラゴンに頼み、自身は炎の上がる里へと飛び込む。

黒煙に咳き込みながらも現場へと駆けつけ、そこで彼が見たものは、全身の鱗を焼かれ、重い火傷を負ったシェララの姿だった。

『シェララーっ!!!』

火傷に喘ぐ思い人（いや思い竜か）の姿に、ベレデテスは絶叫をあげた。

里が修羅場になっている時、巨大生物と対峙している最前線は、古竜たちの悲鳴と燃え盛る炎によって地獄のごとき惨状を呈している。

ヴァルティンが使い物にならなくなったため、古竜戦士隊の隊長が迎撃の指揮を引き継いだ。だが、古竜戦士隊は苦戦している。

まずそもそも、「古竜戦士隊」といえば戦闘慣れしたエリート集団のように思えるが、その認識自体が間違っている。ここでいう戦士隊は、確かに戦闘慣れしてはいるものの、その「戦闘」というのが古竜同士の、礼儀作法に乗っ取った戦いなのだ。「戦闘」というより「決闘」

という方が近いか。
しかし、今古竜戦士隊と戦っている巨大生物は、（当たり前のことだが）古竜たちの礼儀作法を全て無視して次々と攻撃を放ってくる。しかも「魔法障壁」が素通りされ、ヴァルティンの「魔法の行使権の取り上げ」も通用しなかったことから、巨大生物のブレスは全て魔法によるものではないようだ。そこからして異質な存在であった。
水をかければ火が消える、という知識は古竜たちにもある。そこで古竜たちは、火を使う巨大生物には水が有効ではないかと見て、巨大生物と３０メートル程度の距離を隔てて水ブレスを撃ちまくる遠距離戦を行っていたのだが、攻撃の効果は芳しくない。どうやら巨大生物は尋常ならざる高い体温であるようで、水ブレスは撃ったそばから湯気をあげて蒸発し始め、巨大生物に到達する頃には威力を大幅に減らしてしまっている。そのため生物に命中しても、大きなダメージになったようには見えない。中には水ではなく、氷の槍を魔法で生み出して発射する古竜もいたが、こちらも生物に近付く前に溶けてしまい、攻撃用水魔法にすら劣る水球となった状態で巨大生物に命中し、たちまち蒸発してしまう始末である。
その巨大生物はというと、口から吐き出す火球ブレスと両翼の噴火によって応戦している。火球ブレスは、古竜や人間たちもよく使う攻撃魔法「ファイアー・ボール」に似ているが、その弾速が段違いに高い。しかも巨大生物は、発射寸前まで目標を追尾して撃ってくる。そのため古竜たちの巨体と身体能力では、「見てから回避不可能でした」という状態が多発していた。おまけにこの火球ブレス、どうやら生物の細長い首を通す際に圧縮されているのか、着弾時の爆風の大きさも尋常ではなく、直撃しなくてもひどい火傷を負う古竜が後を絶たなかった。
噴火は、まずそもそも生物との距離が離れているために妨害することが難しく、その上一度噴火を許せば、生物本体からの攻撃に加えて上空から落下する多数の火炎弾、そしてそれによって発生する火災にも注意を払わなければならなくなる。そのせいで古竜たちは、かつてない大苦戦を強いられていた。

既に古竜戦士隊２４頭のうち、５頭が巨大生物のブレスと火炎弾によって殺害され、３頭は重度の火傷を負って戦闘続行が困難になっている。

この状況を見て、古竜戦士隊の面々の胸には焦慮が芽生えつつあった。巨大生物が放つブレスは、過去に見たことがないほど高威力かつ高精度である。それに対して、こちらのブレス攻撃はあまり有効打になっていないようだ。

ならば、思い切って奴の懐に飛び込む勢いで接近し、近接戦闘を挑むべきではないか。彼らはそう考え始めていた。

これまでの巨大生物の動きを見るに、奴は素早くは動けない。何せ自分たちより図体がでかい上に、全身を甲殻で覆っているのだ。あれではとっさの対応は難しかろう。

『全員、突撃用意！』

戦士隊の隊長が命令を下し、古竜たちは突撃の構えを取る。それに対し、巨大生物は通算１１発目に及ぶ火球ブレスを撃ってきた。

するとここで、戦士隊の隊長を務める古竜の周辺にいた古竜たちが、一斉に水球や「ウォーター・ランス」などの水系攻撃魔法を放つ。火球ブレスはそれらの水魔法に当たり、ものすごい量の湯気を放って消滅した。

『今だ！　突撃！』

それを合図に、２頭の古竜をヴァルティンの周囲に残し、１３頭の古竜たちが一斉に生物に向けて突撃する。湯気を煙幕代わりにして、一気に相手との距離を詰めるつもりであった。

が、どうやら巨大生物はそれを見計らっていたらしい。煙幕代わりの湯気を突破した古竜たちが見たものは、上体を後方にのけ反らせる巨大生物の姿だった。それはまるで、前方、つまり自分たちの方へ倒れこもうとしているかのようであった。

果たして古竜たちの見込み通り、巨大生物は前方へと倒れ込み、古竜たちを潰しにかかってきた。予想できていた古竜たちは、とっさに急ブレーキをかけたり横っ飛びに飛んだりして回避した。

ドゴオオオオオン!!

空振りに終わった巨大生物の倒れ込みが炸裂した。轟音と共に、地面が地震のように大きく揺れ、周囲の焼け残っていた木々が、人が小枝でも折るかのようにバキバキとへし折られていく。

古竜たちは、生物が上体を接地させた瞬間を見計らって反撃しようとしたが、地震のような揺れに脚を取られ、動くのは難しい。だがそれでも、1頭の古竜が巨大生物へと突貫した。

勇敢なるその古竜は、走り寄った勢いのまま巨大生物に組み付き、そのまま地面へ押し倒そうとした。が、巨大生物まであと5メートルと迫った時、

『あ、熱いいいいい！』

突然足を止めた。それどころか、悲鳴を上げながら後退りしようとする。

その瞬間を見逃さず、倒れ込みの反動から回復した巨大生物は、一声唸り声を上げるや這いずって前進し、肉薄しかけた古竜へと突っ込んだ。

巨大生物にとっては数歩程度の前進であるが、その巨体故に1歩だけでも数十メートル程度も進んでしまう。瞬く間に距離を詰めた巨大生物は、古竜に乗り上げるようにしてこれを押し倒した。

『い、痛い痛い痛い！　熱い!!』

絶叫を上げ、身体をよじって何とか脱出しようとする古竜。しかしそれを許さず、巨大生物は大口を開けて炎をチャージしたかと思うと、火球ブレスを古竜の頭部に叩き込んだ。

至近距離から放たれたブレスの爆発により、古竜の頭部はザクロのようにあっさり弾け飛んだ。また1頭、まるで人間がアリでも潰すかのように、巨大生物は無造作に古竜を殺したのだ。

『『お、おのれぇぇぇ!!』』

怒りに駆られた2頭の古竜が、後ろから巨大生物に組みつこうとする。しかし2頭とも、巨大生物の身体から発せられる高熱に抗えず、退却を余儀なくされた。

すると生物は、その場で身体を丸める。動き回ったためにエネルギーが切れたのか、と古竜たちは思ったが、直後にそれは違うと思い

知らされた。巨大生物が放つ熱の量はさらに跳ね上がり、まるで太陽が地上に降りたかのような高温を放っている。胸や両肩、そして尾の付け根にある核らしき部位は、赤どころかオレンジすら通り越して黄金色にも似た眩い輝きを放ち、それに伴って全身を走る赤いラインも金色に光り輝いている。そして、両翼や項、尻尾の付け根上部にある穴も強い光を放ち、大量の煙を噴出させている。

『まずい！　あれは奴の大技だ！』

戦士隊の隊長が焦った声で叫ぶ。生き残っていた古竜たちは、巨大生物に向けて水系の攻撃魔法を次々と放つが、まるで効いているように見えない。中には土魔法「ソイル・ランス」を唱えて巨大な土の槍を作り出し、それを生物にぶつける古竜もいるが、巨大生物の甲殻はかなり頑丈らしい。なかなかの高速で射出されたにも関わらず、巨大生物に命中した「ソイル・ランス」は、乾いた音と共に砕け散ってしまう。

ほとんど何ら有効な手も打てない古竜たちに対し、全身を丸めて力を溜め切った生物は、首をぶん回して咆哮しながら溜め込んだ力を存分に解放した。

グオオオオオアアアアアアアーッ!!!

天地を揺るがす大咆哮。それと同時に、金色の光を放っていた両翼の先端から、これまでに類を見ないほど大量の赤い液体が撃ち出され、空へと昇っていく。

この頃には、「古竜の里」周辺の空気は洒落にならないレベルの高温と化しており、空は不気味な赤い雲に一面覆われ、太陽が全く見えなくなっている。そのため昼間であるにも関わらず、日食でも起きたかのように薄暗くなっていた。

その薄暗い大地に、赤い円状の光が次々と現れる。先ほど生物が撃ち上げた赤い液体、それが１００発を超える大量の火炎弾となって降ってきたのだ。

ずどどどどどどがぁぁぁぁぁん!!!!

同時多発的に着弾した火炎弾により、「古竜の里」は一瞬で炎に包まれた。巨大生物は最初から、「古竜の里」を標的にして火炎弾を撃ち上

げ、里の周辺に大量の火炎弾を落下させたのだ。先の火炎弾攻撃を生き延びていた雌や子供の古竜も、絶え間なく降り注ぐ火炎弾を回避しきれず、直撃弾を受けて即死する竜や至近弾炸裂で重傷を負う竜が続出する。

古竜たちが築いていた住居は、天空から降り注ぐ火炎弾で打ち砕かれ、火をかけられて燃え落ちる。

1分近くにもわたって降り注いだ火炎弾の雨が、ようやく収まった時には、雌竜42頭、幼竜21頭の中で生き残っていたのは、雌竜22頭、幼竜9頭だけである。他は死んだか、死を避けられないレベルの重傷……トリアージで言うなら黒い札を付けられた状態であった。また、里外縁で守りについていた雄竜にも、2頭戦死、1頭重傷の被害が出ている。

ついさっきまで生きていた同胞（はらから）が次々と殺されていく、という「古竜の里」始まって以来の非常事態に、雌竜や幼竜たちはパニックを起こす者、友の死を嘆き悲しむ者、様々な反応を示していた。

古竜戦士隊の防衛線はというと、また1頭、古竜が火球ブレスを避け切れずに上手に焼かれたところだった。これで、戦士隊の生存竜は15頭に減少し、そのうち4頭（ヴァルティン含む）は重傷を負って戦闘不能になっている。古竜たちにこれほどの被害が出たことは、古竜たちの間で伝えられる歴史の中でも一度もない。つまり、空前絶後の大被害である。

『くそ、どうやって食い止めれば良いんだ……』

苦り切った声で、古竜戦士隊の隊長が呟く。

古竜たちに有効な攻撃の手段があれば、彼らも十分戦えるのだが……まずそもそもの問題として、古竜たちの攻撃があの巨大生物に効いているように見えないのだ。

相手は強力な火球ブレスを放ってくる以上、火炎系魔法は間違いなく通用しない。火を消すには水だと思って水や氷の魔法を放つと、それらは生物に到達する以前に生物の高い体温によって蒸発する、もしくは溶けてしまい、威力が大幅に減衰してしまって有効打にならない。土属性系の魔法はというと、溶けたり蒸発することはないもの

の、生物の全身を覆う岩盤のような甲殻で防御されてしまい、これまた有効打になっているように見えない。
ならば接近戦はどうか、というと、これも相手の高すぎる体温のために近付くことができないため、接近戦に持ち込めない。古竜たちは魔法による火炎ブレスを扱い慣れているため、ある程度の高温には耐えられるはずなのだが、その古竜たちの耐熱性を以てしても耐えられないのだ。
そのため、古竜たちは完全に攻めあぐねていた。現在は土魔法を中心にした攻撃魔法を使っているものの、戦果は芳(かんば)しくない。
一方の巨大生物はというと、二足歩行時は火球ブレスによる遠距離攻撃を主体として戦っていたのだが、四足歩行に移行してからは、その巨体に見合わぬ高い機動力を発揮してブレスを織り交ぜた中～近距離戦を挑んできていた。どうやら、ブレスでちまちまやるのも面倒だとでも思ったらしい。
その巨体のため、巨大生物は一歩だけで数十メートルを進んでしまえる。それを生かし、巨大生物はかなりの機動力を以て古竜戦士隊を翻弄していた。また、巨大生物が方向転換した際に振られるその尻尾ですら、とんでもない脅威と化している。というのも、巨大生物の尻尾は非常に長い上に、そのゴツゴツした見た目通り硬いのだ。そのため、ただの振り返りで振られた尻尾であっても、日本で例えるなら鬼が金棒を振るったようなものなのである。尻尾の一撃だけで木々は容易にへし折られていく。また、巨大生物を包囲しようとした2頭の古竜が、この尻尾で叩かれた。ただの尾の一振りだというのに、古竜のうち1頭は胸部の魔石を砕かれて重傷を負っており、もう1頭も両足の複雑骨折で戦闘能力を喪失してしまっている。
とその時、これまで古竜戦士隊を狙って動いていた巨大生物が、不意にあらぬ方向を向いた。
『何をする気だ？』
戦士隊の面々が訝しむ中、戦士隊の隊長はあることに気付いた。最初はあらぬ方向を向いた、と思っていたのだが、よく見ると巨大生物は「古竜の里」の方を向いているのだ。

と、巨大生物の胸部と両肩にあるオレンジ色の核らしきものが、急に強い輝きを放った。同時に巨大生物は四肢を踏ん張る。まるで、何かの大技を行使した際の反動に耐えようとするかのように。そして、生物の胸部から両肩を経て両翼に至る赤いラインが、金色に近い色の光を発し、今や前方に向けられている生物の両翼の先端から煙が噴き出す。

『まさか……!? 全員、一斉攻撃しろ!』

何かを察したように隊長が叫び、古竜たちは思い思いに攻撃を開始する。隊長は巨大生物と「古竜の里」の間に割って入り、攻撃魔法の準備を行った。自分の持てる魔力を全て使ってでも、ここで奴を倒す……隊長はそう心に決めていた。

黄金色の光がさらに強くなり、大地が細かく震動し始める。それと時を同じくして、隊長の水魔法の準備も整った。

『全力全開……! 「大水流ブレス」!』

隊長の古竜が呟き、両腕を前方へ突き出す。すると、まるでどこぞの波動でも撃ち出す時のように、隊長の両腕の間に水が集められ、巨大な水球が出現した。

次の瞬間、轟音と共に水球から太く青白いレーザーのようなものが発射された。それはレーザーなどではなく、激流として撃ち出された大量の水である。それと同時に、前方に向けられた巨大生物の両翼……現代日本人が見れば、まるで大砲のようだと感じるであろう形状の両翼の先端が、激しい閃光を放った。そして両翼の先端に開いた大穴から、赤橙色の極太(ごんぶと)ビームが2本、発射される。いや、それはさっきまで空に向かって撃ち上げられていた真っ赤な液体が、高い圧力をかけられたことでビームのような形状になったものだった。発射による反動が凄まじいらしく、巨大生物の巨体が地表をガリガリと削りながら後退している。

1本の青白いレーザーと、2本の赤橙色のビーム。それは空中ですれ違った後、互いの発射主へと襲いかかった。

巨大生物には青白いレーザー……古竜戦士隊の隊長が放った「大水流ブレス」が胸部に命中し、爆弾でも爆発したかのような大音響と共

に大量の水蒸気が湯気となって発生する。それが白い煙幕のように周囲に広がり、何も見えなくなった。

一方、古竜戦士隊の隊長には、赤橙色のビームのうち1本が直撃。だがビームはそこでは消滅せず、なんと隊長の後方へと抜けた。そして、大地に2本の赤い線を引きながら進み、別の古竜を1頭貫いて、さらには「古竜の里」すら撃ち抜き、そのまま勢いよく地平線まで振り抜かれた。ビームで撃たれた隊長は、体幹に赤熱した大穴を開けられ、心臓と魔石を破壊されて即死した。いや、隊長だけではなく、もう1頭の古竜も同じ運命を辿った。そして「古竜の里」では、この巨大生物の一撃によってまたも命が奪われた。少なくとも雌竜4頭と幼竜2頭がビームの直撃を受けて即死し、ベレデテスも懸命にシェララの看護にあたっていたところにビームが命中し、一瞬で灰と化した。シェララはギリギリで直撃を免れたものの、今度は彼女自身が恋人（竜）の死を嘆くことになった。

巨大生物のビームで薙ぎ払われた大地は真っ赤に赤熱し、なんと岩までもが溶けたように崩れている。そして大地は深く抉り取られたようにひび割れ、そこから地揺れを伴って赤い液体が噴出した。もちろんこれは溶岩である。このため、戦場の大気はさらに熱せられ、古竜たちは巨大生物の力とは別に肺を焼かれて行動に制限をかけられることとなった。特に代謝の激しい幼竜たちは、次々と熱中症を起こし、意識を失い、あるいは生命活動を強制停止させられるに至った。

隊長の「大水流ブレス」による大量の湯気が、風に吹かれて少しずつ散らされていく。その中に、何やら巨大な影のようなものが浮き上がった。まだ生存していた古竜戦士隊の隊員たちは、それを見て息を呑む。

『『『まさか……！』』』

最悪の想像が、古竜たちの脳裏に浮かんだ。そしてしばらくして湯気が完全に晴れた時、彼らの想像は現実のものとなった。

四方八方からの同時攻撃、そして隊長の必殺技とも言える「大水流ブレス」を受けてなお、巨大生物はぴんぴんしていた。胸部の甲殻は一部がひび割れ、凹んでいるように見受けられたが、逆にいうとそれ

だけだ。全身を走る赤いラインは相変わらず赤い光を放っており、胸部の核らしきものの光も全く衰えていない。
ビームを撃ち込んで「古竜の里」に甚大な被害を与えた巨大生物は、一声唸って一挙に前進した。やや蛇行するように這いずり、ある方向へと向かう。その先には、火球ブレスによる精神的苦痛を何とかしようとしているヴァルティンと、その護衛に当たる2頭の古竜がいた。
2頭の古竜が、指導者を守ろうと身構える。その2頭の前で立ち止まった巨大生物は、ぱかりと口を開き、その中に炎をチャージし始めた。明らかにブレスの発射態勢に入っている。
2頭の戦士たちもそれに応じ、水ブレスの発射態勢に入りかけて……気付いた。これまでのブレスとは様子が違う、と。これまでの戦いで巨大生物が放ってきた火球ブレスは、赤い炎を纏っていた。だが今、生物の口から溢れている炎の色は、青白い。
(まさか……!)
猛烈に嫌な予感を感じた2頭の戦士は、大急ぎで水ブレスの発射準備をした。2頭が前方に両腕を突き出し、その手の内側に水球を形成する。そして形成が終わり次第、水球ブレスとして発射した。
その直後、巨大生物もブレスのチャージを完了し、口から青白い巨大な火の玉を放つ。2つの水球と青白い火の玉は、巨大生物と古竜たちのちょうど中間でぶつかりあった。
じゅううう…!
2つの水球と1つの火球がぶつかりあった直後、辺り一帯に白い湯気が立ち込める。
(やったか?)
古竜たちがそう自問した時だった。
湯気を切り裂いて、何やら青白いものが飛来した。そう思った次の瞬間、2頭の古竜の足元から巨大な爆炎が湧き上がり、ついで暴力的なまでの大音響が彼らの鼓膜を突き破る。視界が赤一色に染まり、耳と意識が遠くなる中で、2頭の古竜は全く同じことを考えた。
(やり損ねた……!)
あの青白い火球ブレスの威力は、想像以上に凄まじいものだったの

だ。まさか、自分たちの全力の水球ブレスを弾き飛ばされるとは思ってもいなかった。
だが、後悔の念を抱く前に、彼らの肉体と意識は赤い爆炎の中で粉微塵に消し飛ばされた。そしてそれと同時に、彼らが守っていた指導者ヴァルティンも、爆炎に包まれて焼き殺された。
古竜戦士隊の隊長と指導者が相次いで殺害され、古竜戦士隊は完全に指揮系統がバラバラになってしまった。そしてその後は、反撃らしい反撃もできぬまま巨大生物に一方的に火球ブレスを撃たれ、1頭ずつ仕留められた挙げ句全滅してしまったのである。
戦士隊が全滅した、というまさかの結果に、「古竜の里」は大混乱に陥った。そしてついに、里の外縁部の防衛に当たっていた前指導者の古竜は、苦渋の決断を下した。かくなる上は、この地を捨てて脱出し、どこかで再起を図るより他にない、と。
さっそく脱出にかかった古竜たちであったが、しかしそこへ大量の火炎弾が空から降ってくる。そう、あの青白い火球ブレスを放った巨大生物が二足歩行に戻ったと同時に、両翼から大量の液体を撃ち出したのだ。
さらに、巨大生物は地面に倒れ込んで四足歩行状態に移行するや、あの極太ビームを連続で発射し、空を飛んで逃げようとする古竜たちを容赦無く狙撃する。何とか逃げようとする古竜たちであったが、上空から雨のごとく降り注ぐ火炎弾、そして大気を切り裂いて高速で飛来するビーム状の高温の液体によって、次々と焼き殺されていく。そして、落下して炸裂した火炎弾により、「古竜の里」は全域が炎に包まれた。
と、この惨状を作り出した巨大生物に向け、1頭の古竜が突っ込んでいく。その古竜は、片腕の爪のうち1本に紋章が彫られていた。
元古竜戦士隊の隊員、ケラゴンである。もはや生き残っている古竜が非常に少なくなってしまい、せめて他の竜が逃げられるだけのチャンスを作ろうとしての行動であった。
里の方で現在生き延びている古竜は、まだ年少の古竜であるウェンスと、重傷ながら何とか生きているシェララだけである。その2人の

脱出の時間を稼ぐため、ケラゴンは決死の覚悟を決め、たった一体で巨大生物と対峙していた。
『あいつらの元へは行かせん！』
叫びながら、ケラゴンは巨大生物に向けて「アース・ランス」を放つ。巨大な土の槍は、真っ直ぐに巨大生物に向けて飛んでいったが、それを見越した巨大生物は四足歩行で素早く後退した。そのため、ケラゴンが放った土魔法は虚しく空を切った。
『そうだ！　俺の方を見ろー！』
ケラゴンは続けて土魔法「アース・ジャベリン」を放つ。今度は見事に命中したものの、土でできた細身の剣は巨大生物の体幹に命中して砕けてしまった。どうやら、甲殻の硬い部分に命中したらしい。
だが、今までのケラゴンの攻撃は、全くの無駄ではなかった。どこか鬱陶しそうに、巨大生物はケラゴンの方に向きを変えたのだ。それはつまり、奴の注意が「古竜の里」から離れた……つまり、ウェンスとシェララが逃げ出せる可能性が上がったということである。
（よし、このまま……！）
新たな攻撃魔法「ソイル・スピアー」を放ちながら、改めて巨大生物を睨み据えるケラゴン。その瞳には、自分の命と引き換えにしてでもまだ若い2頭の竜を逃す、という悲壮な決意があった。
その巨体に見合わぬ高い機動力を発揮し、ケラゴンに突進する巨大生物。ケラゴンはそれを、上空に飛び上がることで回避した。巨大生物そのものは躱せたものの、その翼から噴き出た火炎弾の1発が足底を掠めた。
（……!!）
激痛にも似た灼熱を足の裏に感じながら、ケラゴンは必死に羽ばたきつつ、足に水魔法をかける。少しだけ足の痛みを軽減させ、ケラゴンが大地に降り立った時には、巨大生物は既に火球ブレスの発射態勢に入っていた。ケラゴンも急いで「アース・ジャベリン」を行使して反撃する。
巨大生物が放った赤い火球ブレスと、ケラゴンが射出した土の剣は、両者の中間くらいのところで衝突した。火球ブレスが爆発し、土

の剣は木っ端微塵に吹き飛ぶ。その爆発の煙が収まりかけた時、まだ残っている爆煙を裂くようにして2発目の火球ブレスが飛来した。
すんでのところで横っ飛びに回避したケラゴンは、またも「アース・ジャベリン」を唱える。大地から生み出された土製の細身の剣は、見事に巨大生物の右翼の中ほどに命中した。それも、ちょうど真っ赤なラインが走っているところに命中したのである。
命中した土の剣は砕けることなく、翼に突き刺さった。その途端、剣が刺さったところから真っ赤な液体が噴き出し、地面に滴り落ちてしゅうしゅうと煙を上げる。剣が刺さった部位からも、同じように煙が噴き出していた。どうやら血管のような管を傷付けたらしい。
(よし……)
ようやく巨大生物にダメージらしいダメージを与えたことに、ケラゴンは少しだけ安堵し……た直後に目を見開いた。
なんと、翼に刺さった土の剣がぽろりと抜け、地面に落下したのだ。力なく地面に落ちた剣は、長さが明らかに短くなっており、特に先端の方は明らかに溶けた痕跡がある。
土の剣は、巨大生物が引っこ抜いたのではない。生物の体液が持つ高い温度によって、溶かされてしまったのだ。
『なんだと!?』
まさかの事態に、ケラゴンは流石に驚き……それは致命的な隙に繋がってしまった。土の剣の末路にケラゴンの注意が逸れたその一瞬は、巨大生物が火球ブレスを発射するには十分な時間だったのだ。ケラゴンは一瞬後にブレスの存在に気付いたが、時既に遅かった。
目の前に火球ブレスが迫り、視界が真っ赤に染まりかけた時、ケラゴンの視界には彼が過去に見た光景が次々と流れ去っていった。
子供の目から見た、親竜の雄姿。
まだ若かった頃、「自分は選ばれし種族である、あらゆる種族の頂点に君臨し、彼らを導いてやろう」などという考え……現代の日本人に言わせると「厨二病」などと呼ばれるだろう考えを抱き、それを長老方に叱られたこと。
戦士隊に配属された時に感じた、名誉の気持ち。

そして、戦士隊除名のきっかけとなりながら、同時に新たな友となった、ヒト族の1人の少女。
『…マイル様……』
その少女の名を呟いた直後、ケラゴンの頭部に火球ブレスが直撃し、彼の命は消し飛ばされた。

アルバーン帝国南東部「古竜の里」、全滅。生存者（竜）はウェンスと、重傷を負ったシェララのみ。他は老若男女の別なく殺害された。
全域が炎の海と化し、全てが炎の中に崩れていく「古竜の里」。上体を起こしてそこに佇んでいた巨大生物は、勝ち鬨でもあげるかのように、天を仰いで力一杯咆哮した。
グオオオオオアアアアアアーッ!!!
それと同時に、生物の両翼がもう何度目になるか分からない噴火を起こし、上空に分厚く垂れ込めた真っ赤な雲へと緋色の灼熱の液体を送り込む。そのタイミングで、「古竜の里」の周囲にある山々が一斉に噴火した。
なお、この山々の中にはスカベンジャーやゴーレムたちの拠点も築かれていたのだが、それらのほぼ全てが噴火によって壊滅し、逃げ遅れたスカベンジャーやゴーレムは地中から噴き出るマグマによって溶かされていった。
ドドドドドドドド……
古竜たちの葬送曲としてはあまりに無惨な轟音が、辺り一帯にこだまする。
火山の噴火によって発生した火山弾が周囲に飛び散り、その上から50発にも達する火炎弾が降ってくる。
全てが炎と黒煙に支配された世界に、巨大生物の禍々しい咆哮だけが轟いていた。

第６話　獄炎に座す、覇たる者

「カザンが破壊されただと!?」
　巨大生物が「古竜の里」を壊滅させていたその頃、アルバーン帝国の帝都。ハンターギルド・アルバーン帝国帝都支部の一室に、この支部のサブマスターを務める壮年の男性、オーヴィンの叫び声が響いた。
「カザンから逃げてきた、というハンターパーティが、そう言っております」
　報告に来た男性のギルド職員が、そのように報告する。
「……本当なのか？」
「遺憾（いかん）ながら、事実であると思われます」
「その根拠は？」
「はい、まず第一に、ハンターたちの格好です。装備の一部に破損・焼け焦げらしき黒ずみが見られる他、皮膚に火傷を負ったり、頭髪が焼けている者も見受けられました。
　第二に、ハンターたちの報告内容と彼らの表情です。本件を報告してきたハンターパーティは３組、いずれのパーティの者もほぼ同一の内容を述べています。また、彼らの表情にはただごとではない必死さが見られました。
　第三に、彼らが護衛していた人々の様子です。彼らが護衛していたのは、いずれも格好からして民間人と思われる者ばかり、合計で５０人前後です。中には多数の道具を所持している者もありましたし、それらの者たちは皆一様に恐怖の表情と焦燥感を顔に浮かべておりました。譫言のように何かを繰り返し呟いている者もいました。１人２人ならともかく、５０人全員が同じような状態に陥るのは異常です。
　以上の点から、カザン壊滅の報はもしかすると、事実ではないかと考えられます。非常に考えにくいことではありますが……」
「なるほど……で、そのハンターたちと民間人は、今どこにいる？」
「ハンターたちは、ギルド内に部屋をあてがって休ませております。

民間人については、集会所をお借りしてそちらに移ってもらいました」
「ふむ……」
オーヴィンは腕を組んで考え込む。ややあって口を開き、重々しい声で告げた。
「本当にカザンが壊滅したとすれば、事は重大だ。情報を集める必要がある。
まずはハンターたちと民間人たちから話を聴こう。お前は、ハンターたちを連れて先に集会所へ行ってくれ。俺はマスターに話を通して、マスターと上級幹部を何人か呼んでくる」
「分かりました!」
職員に指示を出したオーヴィンは、その足でギルドマスターの執務室へ向かった。緊急会議の招集のためである。

１０分ほどの後、オーヴィンはギルドマスター、及び7人の上級幹部と共に集会所を訪れた。既に制服を着たギルド職員たち、そして防具を装備したハンターらしき人々と平服の一般人らしい集団が集まっており、人数は合わせて６０人を優に超える。これだけの人数が一堂に会すれば、流石の集会所も少し手狭に感じられた。
「済まない、待たせてしまった。皆様には疲れているところを申し訳ないが、カザンで何があったのかを早速教えてもらいたい」
オーヴィンの司会進行と共に、緊急会議はスタートする。状況の重大さと精神面での余裕の無さを考慮し、まずはカザンから逃げてきた一般市民から事情聴取が行われた。
事情聴取の時間を待っていたかのように、一般市民たちは自分たちが見たものや感じたことを語りまくった。それは言葉の激流となって、ギルド上層部メンバーを襲った。司会を務めるオーヴィンは、時折声をかけて彼らの話を中断させざるを得なかったほどである。
２時間ばかりもの時間をかけて、一般人たち全員から話を聞き終えた後、ちょうど昼食時であったため、会議は一時中断した。そして午後から、ハンターたちへの事情聴取が行われた。

随分待たされることになったハンターたちであったが、しかし彼らも事の重大さと一般市民たちの余裕の無さをよく分かっていた。そのため、彼らは不平1つ言わずにギルド上層部に従ってくれたのである。心の中で深く感謝するオーヴィンであった。

２時間近い時間をかけて事情聴取を終え、ハンターたちに労いの言葉をかけて下がらせた後、ギルド支部に戻ってきた一同はすぐさま緊急会議を開いた。一般市民やハンターたちから集めた情報を整理し、何が起こっていたのかを正確に把握するためである。

整理された情報から把握されたのは、次のような内容であった。

・非常に巨大な竜らしき生物が、ある朝突然カザンに海から来襲。カザンは港も街も破壊され、炎の海に飲み込まれたようである。

・上記侵攻に伴い、アルバーン帝国軍のカザン駐留部隊、カザン港に集結していたアルバーン帝国海軍の艦隊、そしてハンターギルド・カザン支部は全滅。巨大竜の迎撃に当たったハンターたちは、そのほぼ全員が死亡した。

・巨大竜は、目測で全長６０メートル、幅３０メートル、全高５０メートルはあると見られ、古竜と同じかそれ以上に大きいと見られる。また、全身から炎と真っ赤な液体を吐き出し、それによって瞬く間に周囲を炎に沈めてしまう。

そして幸いなことに、事情聴取に協力してくれたハンターの中に絵心のある者がいて、その者が巨大竜の絵を大まかながら描いてくれた。それによると、件の巨大竜は四肢と長大な尾、そして細長い首の先に比較的小さな頭部を持つようだ。頭部には2本の角が天を衝くように生えており、特に後脚は非常に太く、巨体を支えるに相応しい逞しさが窺える。

ここまでは古竜にそっくりの特徴を持つのだが……最大の相違点は翼である。巨大竜は、四肢の他に背中には一対の翼を持つようだが、どう見ても飛ぶためにあるようには見えなかった。翼には翼膜が存在しておらず、代わりに先端には大きな赤い穴が開いている。ハンターや一般人の証言から考えるに、どうやらこの翼から大量の炎を打ち上げ、それを火炎弾として空から降らせてきたらしい。だとすれ

ば、翼の存在意義は飛ぶことではなく、炎を打ち上げることだと考えられる。
　これは明らかに異質な生態であった。古竜も確かに炎を吐くのだが、それは口から放つ火炎放射のようなブレスとして吐くものだ。全身から炎を垂れ流すものとは異なる。そのため、カザンを襲った巨大竜はこれまでに確認されたことがない新種だと考えられた。
　また、巨大竜の項には翼にあるものと同じような赤い大穴が複数開いている他、胸部や両肩、それに尾の付け根にある核のような部分から全身に赤いラインが伸びていた。ラインは翼や項の大穴にも繋がっていることから、どうも核らしき部分と翼や項の大穴には何か関係があるようだ。
「こんな竜、というか生物は、見たことないな……」
　ギルドマスターの呟きは、絵を見た者全員の心境を代弁していた。
　その数日後、ギルドから指名されて調査に向かったハンターパーティ「蒼い疾風（ブルーゲイル）」は、帝国東部で火山の噴火やら地震やら地崩れやら魔物の暴走やら、異常な事態が同時多発的に発生していることを確認した。また、カザンが港も街も全滅していることも、その目で確認した。
　彼女たち（「蒼い疾風」は女性ばかりのパーティである）は調査記録として、以下のような文章を認（したた）めた。
『カザンの街は、全ての建物が炎に包まれており、地面すら黒く焼け焦げて、もはや更地と化している。また、港も全て破壊され、船1隻見当たらない。さらに、港から見える海は一面真っ赤に染まっており、何をどうすればこうなるのか想像もつかない。まさに「火炎地獄」というに相応しい』
　こう記した報告書を引っ提げて、彼女たちは帝都への帰還を急いだ。
　また、ハンターギルド・アルバーン帝国帝都支部はカザン壊滅を事実であると一旦認め、カザンをたった一体で壊滅に追いやったという「全身から炎を吐く、巨大な黒い竜」も現実に存在すると認めた。そして、帝都支部ギルドでは規則で認められている「緊急事態特別措置」を

適用し、ハンターギルド本部に以下の２点を意見具申することを決めた。

・カザンを壊滅させた巨大な竜を「煉獄竜（れんごくりゅう）　フレアドラゴン」と仮称すること。

・フレアドラゴンを「ハンターギルドに喧嘩を売った者」と認定し、最優先討伐対象に指定すること。

「煉獄竜」という命名は、「カザンが壊滅する様子はまさに、神話や御伽噺に出てくる地獄絵図、あるいは煉獄そのものだった」という、カザンから逃げてきたハンターたちの証言から取ったものである。大規模な街一つが炎の海に飲み込まれ破壊された、という様子から、御伽噺に出てくる「火炎地獄」「煉獄」に絡めたネーミングである。

同じ頃、アルバーン帝国の皇宮と軍の上級司令部にも、似たような報告が上げられた。こちらは、カザンに住んでいた市民たちの避難誘導にあたった兵士たちや、実際に巨大生物と交戦して部隊壊滅の憂き目に遭い、命からがら逃げ延びた陸軍の兵士たちからの報告である。

また、帝国東部や南部に領地を持つ貴族たちからも、悲鳴のような報告が矢継ぎ早に皇宮に飛び込んだ。その内容は「領内の山が爆発して赤と黒の灼熱の液体が大量に大地から噴き出し、そのせいで畑や村落が埋もれてしまった」「領内で巨大な地揺れが突然発生し、それによって町が甚大な被害を受けた」「魔物や動物が領内各地で暴走し、畑や街道に大きな被害をもたらしている」といったものである。そしてそれらの中に、こんな報告も混じっていた。

『全長６０メートル以上の超巨大な黒い竜が、全身から炎を噴き出しながら領内に侵攻。領軍主力を以て迎撃に当たるも、部隊は全滅。これより、領都を砦として最終決戦を挑む。皇帝陛下万歳』

『帝国南部にある古竜の生息区域が、謎の超巨大生物によって全滅させられた』

いずれも事態が切迫していることを否応無しに痛感させるものであった。それも、「古竜の里」を全滅させた……つまり、古竜たちを皆殺しにしたとなると、これは非常にまずい。

この世界において「最強の魔物」と称される種族、それが古竜なのだ。アルバーン帝国人でその強さを知らぬ者は、赤ん坊くらいしかいない。如何なる生物であろうと、古竜には勝てないはずであった。

しかし、突如現れた巨大竜は、その古竜たちを皆殺しにして古竜の生息区域を全滅に追いやったのだ。となると、これは国軍を全力動員しても勝てるかどうか怪しいかもしれない。

同じ内容の情報が複数のルートから同時に入ってきたため、アルバーン帝国皇帝はカザン壊滅や「古竜の里」の全滅、そして突然現れたという巨大竜を、全て事実であると認めた。そして、出動の準備をしていた国軍……本来ならブランデル王国かティルス王国への侵攻に用いるはずだった兵力である……を急いで帝国南部に展開させ、防衛線を構築して巨大竜を迎撃するよう命令を出した。また、帝国北部に領地を持つ貴族たちにも令状を送り、領軍を寄越すよう命じた。

しかし……残念ながら、ハンターパーティ「蒼い疾風」の報告も、アルバーン帝国軍の迎撃陣地の構築も、少し遅かった。

帝国南部を荒らし回った巨大生物……フレアドラゴンは、帝国中部～南部に領地を持つ貴族たちの領軍を蹴散らし、各地の森林を焼き払い、活火山を量産し、村や町を炎の海に沈めながら、次第に北上。アルバーン帝国の帝都へと確実に迫りつつあったのだ。

アルバーン帝国軍は、皇帝親衛隊と帝都防衛隊だけではなく、自警団やギルドのハンターたちまでも総動員し、帝都の守りを固めた。また、大急ぎで国土中南部に2つの大規模防衛線を構築した。名前は「大規模」だが、その実態はテント中心の急造野戦陣地ばかりである。まあこれは無理もない。この世界では、戦国時代の日本よろしく「一夜で城を築く」なんて発想がなかったのだから。ただし、移動式の弩弓（バリスタ）を持ち出すなど、装備の面では比較的しっかりしていた。

そして、アルバーン帝国上層部とハンターギルド・アルバーン帝国帝都支部に「カザン壊滅」と「巨大竜侵攻」の情報が届いてから2日後。巨大竜……フレアドラゴンはアルバーン帝国軍が築いた第一防衛ラインに到達し、戦闘が始まった。

防衛の任に当たっていた2万人のアルバーン帝国陸軍の兵士たちは、精鋭たるの矜持を胸に、見上げんばかりの巨体を持つ竜に対して果敢に挑みかかった。そして、

グオオオオオアアアアアアーッ!!!

ひゅうううううう……ずどどどどどがぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!

「「「「ぎゃあああああー!!」」」」

フレアドラゴンが空から降らせた火炎弾の雨と、巨大竜が放つ高威力かつ超精度の火球ブレス、そして竜の巨体から繰り出される肉弾攻撃によって、凄まじい被害を受けた。

火炎弾の直撃を受けて一瞬で焼け焦げた肉の塊と成り果てる者、直撃こそ免れたものの火炎弾やブレスの爆発に巻き込まれ、命を散らす者。形はどうあれ、彼らの運命は皆等しく、「死」という唯一の結末へと続いていた。

第一防衛ラインでは、堀の掘削こそ間に合わなかったものの、森林から木を切り出して作った丸太の柵や乱杭、逆茂木などの障害物を準備し、土魔法の「アース・シールド」を重ねがけして防壁を作り、バリスタを並べて遠距離攻撃の準備もしていた。しかし、バリスタは矢の射程の遥か外側から巨大竜が放った火球ブレスの直撃を受けて爆砕され、障害物は巨大竜が放つ火によってあっさり焼け落ちた。そして土の壁は、四足歩行状態になった巨大竜の突撃を受けて、何ら抵抗らしい抵抗もできずに破壊され、突破された。ついでに、壁を挟んで巨大竜と対峙していた兵士たちが何人も轢き潰され、焼け焦げたミンチ肉の塊と成り果てた。

３０分。それが、フレアドラゴンとの交戦開始から第一防衛ラインが突破されるのにかかった時間だ。2万人の兵士たちのうち、1万3千人までが行方不明となるか、もしくはその命を露と散らした。それに対して、兵士たちは数十本のバリスタの矢を巨大竜に命中させ、攻撃魔法も何発か直撃させたものの、手傷らしい手傷を与えたとは思えなかった。それだけの攻撃をぶち当てても、フレアドラゴンは一切怯むことなく攻撃を続けたからである。

第二防衛ラインでは、命からがら第一防衛ラインから撤退してきた

５，０００人の兵士を加え、実に５万５千人もの大軍が動員されていた。また、こちらには魔法で作った土壁の他に、水魔法や土魔法、それに人力を駆使して水濠が掘られ、バリスタや投石器をはじめとする防衛用兵器の量も多く、また兵士の練度も高かった。さらに、平野部だけでなく周辺の山にも攻城兵器が据え付けられ、何が何でも巨大竜の侵攻を阻止できるよう準備されていた。

帝都のような頑丈な城壁こそないものの、これだけの装備を整えれば、あの巨大竜でも打ち倒せる。兵士たちはそのように自信を持っていた。

第一防衛ラインが突破された２日後、アルバーン帝国陸軍はついに第二防衛ラインにてフレアドラゴンと接敵。たちまちのうちに、戦闘が始まった。

ところが。

グオオオオオアアアアアァァァーッ!!!!

戦闘開始と同時に、フレアドラゴンはまるでゴングを打ち鳴らすかのように咆哮を轟かせた。その瞬間、そのタイミングを狙ったかのように、地面が大揺れに揺れたかと思うと、攻城兵器を配した山が一斉に爆発し、その頂上から大量の火山弾と火山灰を撒き散らした。それば かりではなく大量の溶岩が溢れ出し、さらに噴き上がった火山灰は火砕流となって谷間に築かれた防御陣地めがけて殺到した。

「「「「「「ぎゃあああああああ!!!!」」」」」」

山々に配備された攻城兵器により、フレアドラゴンに石と矢の猛射を浴びせようと待ち構えていた兵士たちは、次々と降り注ぐ火山弾に打たれ、一矢を射る暇もなく戦死していった。それだけではなく、巨大竜は咆哮と同時に両翼から大量の灼熱の液体を撃ち出しており、それは５０発を超える数の火炎弾となって防衛ラインの頭上に落下した。その火炎弾の炸裂と火砕流により、せっかく配備された攻城兵器は次々とスクラップに変わっていく。

同時に、谷間に築かれた防御陣地にも悲劇が襲いかかった。火山弾と火炎弾は容赦無く降り注ぎ、回避し損ねた兵士たちを粉微塵に打ち砕く。その地獄の雨を逃れた兵士たちも、時速数百kmもの速度で流れ

落ちてきた火砕流から逃れることは能わなかった。たちまちのうちに灰色の高温の風に飲み込まれ、兵士も魔術師も関係なく焼かれ、地獄の亡者のごとき悲鳴を上げながら焼け死んでいったのである。

火山弾と火炎弾に打ち砕かれ、火砕流によって焼き尽くされた防御陣地。その上から、山から流れてきた溶岩が覆い被さり、全てが業火に消えていく。そして、その溶岩の上をフレアドラゴンは平然と歩行し、何ら邪魔されることもないまま谷間を抜けて、後方の平野部にある本陣に襲いかかった。

第二防衛ラインを守っていた帝国軍は、ドラゴンに何の手傷も与えられぬまま2万人近い兵士を失い、士気もズタズタになっていた。敵前逃亡という、軍人にあるまじき行為を働こうとした者もいたほどである。それでもなお、彼らは帝都を、皇帝を、家族を守るため、死に物狂いで抵抗した。

だが、「それがどうした」とでも言わんばかりに、フレアドラゴンはバリスタから放たれた矢の雨を浴びようと、土属性の攻撃魔法で巨大な槍を撃ち込まれようと、痛手らしい痛手を負うことがない。逆に、挑んできた兵士たちを這いずり突進で轢き潰し、水濠には一度は落下したものの瞬く間に水を蒸発させながらあっさりと乗り越え、土壁を兵士たちや攻城兵器ごとチャージブレスで消し飛ばした。全身から炎を撒き散らし、辺り一帯を炎の海に沈めながら進攻する巨大竜に、アルバーン帝国軍は為す術なく、ただただ死体の山を積み重ねるだけとなっていた。

戦闘開始から僅か４０分後、フレアドラゴンは第二防衛ラインを完全に突破して帝都方面へと進攻。第二防衛ラインの守備に就いていたアルバーン帝国軍は、５万５千人中４万人までが戦死または行方不明となった。残る１万５千人も、その大半は部隊が壊滅した状態となって組織的戦闘力を失った上に、戦意も地の底まで落ち込んでおり、とても戦える状態にない。中にはあまりの恐怖で心が壊れたのか、意味不明の譫言を言い続ける者や、いるはずのない何かの視線に常時怯える者などもおり、ついには謎の狂死を遂げる者まで現れた。こうなってくると、いっそ死んでいた方がまだマシだったかもしれな

い。
防衛ラインが2つとも壊滅した、という情報はすぐに帝国軍の上級司令部と皇宮に届けられたが、しかしこの情報は帝都の一般市民の間にまで広まることはなかった。パニックが発生することを危惧した皇帝の命令により、情報統制されてしまったのだ。このため帝都の一般市民やハンターたちは、この事実をまだ知らなかった。
しかし、巨大竜の接近に伴い、アルバーン帝国の帝都周辺では異変が発生するようになった。具体的には、1日のうちに何度も大小の地揺れが発生し、原因不明の森林火災が多発した。また、小動物や魔物、鳥までが何かから逃げるように次々と大移動を起こし、スタンピードもしばしば発生した。帝都に屯する3万人の帝国軍兵士たちや、帝都で活動しているハンターたち、それに一般市民で構成される自警団の団員たちは、それらのスタンピードにどうにか対処したものの、多数の怪我人や死者を出すことも珍しくなかった。というのも、暴走した魔物や動物はどれも皆様子が尋常ではなく、何としてでもここから離れようとする様子を見せるものが多かったのである。力押しに突破しようとした魔物や動物を必死に食い止めようとした結果、特に自警団やハンターたちの被害が大きくなったのであった。
地揺れ、森林火災、動物の暴走。明らかに尋常ではない事件が立て続けに発生し、帝都の住民たちや兵士たちが重苦しい不安感を感じ始めた頃。
皇宮と軍の上級司令部に、不可解な報告が上がった。第二防衛ラインを突破したあの巨大竜が、第二防衛ライン跡付近で突如として消息を絶ったというのである。山のごとき巨体を持つあの竜が突然、神隠しにでもあったように忽然と消えてしまったのだ。
混乱しながらも上級司令部は、兵士を動員して第二防衛ライン周辺を調べた。だが、何も見つけられないまま、時間だけが虚しく過ぎていった。
このタイミングで「蒼い疾風」がカザン方面から帰還し、帝都のギルド支部に報告書を提出した。カザン壊滅に関する全ての情報が事実であると知ったギルド支部には衝撃が走り、ギルドマスターは大急

ぎでギルド本部や付近のギルド支部に急使を向かわせた。そして、帝国軍の動きが慌ただしくなっていることから、巨大竜に関して何かがあったと直感したマスターの命令により、「青い疾風」を含む帝都のハンターパーティが全て招集された。E、Fランクのハンターやパーティは万が一の時に一般市民の避難誘導に当たることとされ、Dランク以上のハンターやパーティは巨大竜の迎撃に当たるよう命じられたのである。

なかなか巨大竜の消息を掴むことができず、帝国軍はさらに追加で調査の兵士たちを派遣し、何としても竜の痕跡を見つけるよう命じた。また、万が一を想定して帝都に残る兵士たちに厳戒態勢を命じた。それだけではなく、上級司令部からの要請を受けて皇帝が親衛隊を動かしている。

ハンターパーティ「蒼い疾風」が帝国東部の調査から帰還した、その翌日。

空一面が朝焼けによって赤く染まる中、アルバーン帝国帝都中央にて突如として大地震が、次いで大爆発が発生。地面と、爆心地にあった家屋や商店、教会などが大きく吹き飛び、周辺の建物も一斉に倒壊し、居合わせた人々はその大半が即死した。そして、その爆発の中心地から現れたのは……全身を赤い鱗と真っ黒の甲殻で覆い、絶対零度の眼光を放つオレンジ色の双眸（そうぼう）を以て辺りを睥睨（へいげい）し、山のごとき巨体を以て周囲のあらゆる生命を圧倒し、身体のあちこちに開いた赤熱した大穴から次々と火炎弾を吐き出す竜の姿だった。

そう、フレアドラゴンが出現したのだ。何の前触れもなく、いきなり帝都中央に。

帝都を守るアルバーン帝国軍は、予め巨大竜フレアドラゴンを迎撃する作戦を立てていた。それが、帝都を囲む城壁に設けられたバリスタ等の攻城兵器を駆使しつつ、地上では移動式バリスタや魔術師・兵士を馬車に搭載し、あるいは騎兵を投入して、バリスタの矢や攻撃魔法、あるいは兵士が投擲する大槍などによる遠距離攻撃を仕掛ける。そして、城壁という高所からの射撃と合わせて、四方八方からフレアドラゴンに間断ない攻撃を浴びせる、というものである。また、馬車

や騎兵による攻撃部隊の援護のため、本来は虫殺しに使う草や湿らせた干し草等を燃やして白煙を大量に発生させ、それを煙幕代わりに使うことも検討した。それほど厳重な作戦を立てていたのである。

しかしこれは、「フレアドラゴンが帝都外周を守る城壁に地上から接近してくる」という想定の元に立てられた作戦である。残念なことに、その想定を根本から覆されてしまったのだった。

後詰めの部隊として市街地や大通りに待機していた、国軍や貴族領軍の歩兵や騎兵たち、あるいは側面から機動援護を行う予定だったハンターたち、そして皇帝親衛隊といった面々は、皇宮の至近に突然現れたフレアドラゴンに対して決死の抵抗を試みた。何としてでも、それこそ自分たちの命を捨ててでも、皇帝陛下と皇族の皆様方、あるいは自分の大切な物や人を守る……そんな悲壮な覚悟を決め、彼らは得物を手にフレアドラゴンへと吶喊した。

だが、フレアドラゴンは地中から出現した直後に身体を丸めたかと思うと、力を溜めるような素振りを見せた。そして、ドラゴン自身の高い体温を以て歩兵や騎兵の突撃を退けると、

グオオオオオアアアアアアーッ!!!

魂そのものを揺さぶり、原始的な恐怖を否応なく惹起させる咆哮を轟かせながら、両翼の先端から大量の赤い液体を空に向けて撃ち出した。灼熱を放つ赤い液体が、朝焼けとは異なる異様な赤色に染まった空に吸い込まれた数秒後、それらの液体は１００発を優に超える量の火炎弾と化して降り注いだ。

ひゅうううう……ずどどどどどがぁぁぁぁぁぁぁん!!!!

たちまちのうちに、帝都はその全域で火の手が上がった。そしてそれと同時に、人々の悲鳴があちこちに満ちた。

一般市民たちは、突如訪れたこの惨劇によってパニック状態に陥った。落下してきた火炎弾の炸裂で消し飛ぶ者、崩れた家の瓦礫に潰される者が出る。また、それらの者の家族や友人が、死体を前にして悲鳴を上げ、泣き崩れる。その上から追加の火炎弾が落下し、パニックが加速していく。

また、隊列を組んでフレアドラゴンに応戦しようとしていた歩兵

隊、特に重い鎧と大盾を装備し、重防御を誇る代わりに機動力が低くなっている重装歩兵隊には、大きな被害が出た。重量物を装備したことで動作が鈍くなっている上に、密集した隊列を組んでいるため、咄嗟に飛び退いたりすることも難しい。そのため、落下してくる火炎弾に対して有効な回避行動が取れず、火炎弾1発で数十人単位が消し飛ばされたのだ。機動力に優れるはずの騎兵隊も、市街地という比較的狭いフィールド構造が災いし、火炎弾を避け切れずに焼かれる者が続出している。

その時、ひゅうっ、という弓弦（ゆづる）の唸りが何重にも重なって響いたと思うと、数十本の矢が風を切って飛び、フレアドラゴンに次々と命中した。弓箭隊（きゅうせん）が到着し、フレアドラゴンに矢を放ったのだ。それに続いて、

「アース・ジャベリン！」

「ソイル・スピアー！」

「アイシクル・スピアー！」

「ウォーター・ランス！」

攻撃魔法の詠唱の声が複数響く。そして、土や槍、水でできた剣や槍が飛翔し、フレアドラゴンに向かっていった。それに混じり、金属製の大槍が投擲される。

魔術師たちの攻撃魔法詠唱にタイミングを合わせて、歩兵たちが投槍による攻撃を狙ったのだ。体温の高さのためにフレアドラゴンに接近できないのなら、体温の影響範囲の外側から槍を投げて攻撃すれば良い。そう考えたのだ。

しかし、矢はフレアドラゴンに命中こそしたものの、首尾良く突き刺さったものは僅か十数本であり、大半は甲殻に弾かれてしまった。攻撃魔法に関しては、土魔法は命中したものの甲殻に当たって砕けてしまい、大したダメージになった様子がない。水魔法や氷魔法に至っては、フレアドラゴンのあまりに高い体温のために命中する前に蒸発するか溶けてしまい、まともな攻撃にすらならない。槍に関しては、命中角度が浅かった数本の槍が弾かれたが、大半は見事に突き刺さった。「命中さえすればオーガをも貫く」と帝国兵たちは豪語していた

が、それが実証された形である。
槍が刺さった部分の甲殻が割れ、割れ目から溶岩を思わせる真っ赤な液体が噴き出る。帝国軍の兵士たちは、今のところ投槍が最も有効な攻撃手段だと判断し、遠距離攻撃メインに切り替えることにした。しかし。
グオオ……！
フレアドラゴンが短く吼える。何かをしようとしているのだ。警戒の構えを取った帝国兵たちは次の瞬間、思いがけないものを目にして唖然とした。
先ほどフレアドラゴンに突き刺さった槍や矢が全て、ぽろりと抜け落ちたのだ。しかもよく見ると、槍の穂先（ほさき）や鏃（やじり）は全て溶けてしまっている。鋼鉄でできており、頑丈なはずのそれらが、あっさり溶かされてしまったのだ。そして。
槍や矢の命中によって傷付けられたはずの甲殻は全て、何事もなかったかのようにきれいに治されていた。ひび１つ見当たらない状態になっている。
「「「「なっ!?」」」」
少々のことには動じない帝国兵たちも、これには流石に驚いた。
この世界において使われる魔法の１つに、「回復魔法」というのがある。文字通り、身体に受けた傷を治癒することができる魔法だ。上級者になると、創部の痛みを除去するばかりか、骨折の修復や神経の再生などですら平然とやってのけることができる。まさに魔法の中でもチートを地で行く代物である。だがいくら何でも、回復魔法のついでに腕に刺さった矢を引き抜くなどということはできない。
しかしフレアドラゴンは、そんな常識など知ったこっちゃないとでも言うように、割れた甲殻を一瞬で全て修復したばかりか、刺さったままだった槍や矢を全て抜いてしまったのだ。それも、鏃や穂先を溶かすという、常識では考えられない方法を以て。
フレアドラゴンは、いったいどれほどの再生能力を有しているというのか。
帝国兵たちは目の前の光景を理解できずに固まってしまい……そ

れが致命的な隙となってしまった。
　フレアドラゴンの巨体が勢いよく前進する。四足歩行状態での這いずり突進だ。フレアドラゴンにしてみればただの這いずりなのだが、全長６０メートル以上の巨体ともなればその攻撃範囲、そして威力は、人間に対しては想像を絶するものとなる。
　たちまちのうちに、フレアドラゴンの正面に展開していた歩兵隊が一瞬で轢き殺された。人間がアリでも踏み潰すかのように、訓練を重ねた精強な帝国兵たちがあっさりと踏み殺されてしまったのだ。しかも、その遺体はフレアドラゴンの高い体温によって骨も残さず瞬時に焼かれてしまい、グチャグチャに潰れた炭の塊しか残されない。
　その上、フレアドラゴンが身体を動かす度に、両翼や項の大穴から大量の火炎弾が噴き出し、こぼれ落ちてくる。フレアドラゴンの巨体そのものは回避できたものの、回避した先に落ちてきた火炎弾が直撃して一瞬で蒸発する兵もいた。１００人単位の兵が一瞬で戦死する状況に、士気が挫けそうになる。
　歩兵、重装歩兵、騎兵、弓箭兵、魔術師。兵科の別なく十把一絡げに轢き潰したフレアドラゴンは、大通りの商店や家屋すら踏み潰しながらさらに進む。その先には、皇宮があった。
「まずい！」
「陛下が…！」
　兵士たちは叫び、慌てて皇宮の方へ走り出そうとする。しかし、大通りは瓦礫や炎によって封鎖されたような状態になっており、行動できる範囲は非常に狭い。とても大軍が通れるものではなかった。
　皇宮の前には、皇帝親衛隊５，０００人が展開し、肉弾防壁となってでも皇帝とその一族を守ろうとしている。その親衛隊の隊列の前で立ち止まったフレアドラゴンは、胸部と両肩の核を明るく光らせた。両翼へと繋がる赤いラインが色を変え、オレンジ色を経て金色の光を発する。そして、両翼の先端に開いた大穴が皇宮の建物に向けられ、怪しげな白い煙が噴き上がった。
　親衛隊の隊員たちは最大限に警戒し、弓による遠距離攻撃を開始したのだが……遅すぎた。

弓による攻撃を意に介することなく、フレアドラゴンは両翼から灼熱の極太（ごんぶと）レーザーを発射したのだ。それは熱したナイフでバターでも切るかのように親衛隊の隊列を3つに切り崩し……そして、荘厳な皇宮の建物すら、あっさりと切り裂いていった。

ドゴオオオオオオン!!!

激しい爆発音が、辺りの大気を震わせる。そして、皇宮の建物はいとも簡単に崩れ落ち、炎の中で瓦礫の山と変わり果てた。

「「陛下ぁぁぁ!!」」

親衛隊の隊員たちから、悲痛な悲鳴が上がる。

「おのれぇぇぇ!」

1人の親衛隊員が、手にした大槍をフレアドラゴンに向けて投擲した。それは見事にドラゴンの顔に命中し、眉間に突き立った。

「ざまあ……」

ざまあみろ、と言いかけた親衛隊員はしかし、口を閉ざした。フレアドラゴンの瞳に睨み据えられた瞬間、戦意が一瞬で挫けたのだ。この竜は駄目だ、戦いを挑まなければ良かった……そう感じたが、もう遅かった。

急に熱風が吹き付けてきたのを感じ、親衛隊の面々は一斉に風上を……フレアドラゴンの方を見た。その彼らの目に飛び込んできたものは。

大口を開き、その中に大量の青白い炎をチャージして、強力なブレスを放とうとしているフレアドラゴンの姿だった。

(((((あ、詰んだ)))))

そう思った時、視界一面を染める白光、そして轟音と共に、彼らの意識は吹っ飛んだ。

フレアドラゴンが放ったチャージブレスは3発。1発目は比較的手前に着弾し、皇宮を囲む城壁の残骸を親衛隊の隊列ごと吹き飛ばしたが、残り2発は皇宮の敷地内で炸裂し、残っていた建物のことごとくを消し飛ばした。帝国の象徴だった皇宮は完全に破壊され尽くし、灰と消えてしまったのだ。

あまりの事態に、2，000人程度にまで数を減らしながらも戦っ

ていた親衛隊の面々は、完全に打ちのめされた。そして、守るべき皇帝と皇族を殺された悲しみを怒りに変え、フレアドラゴンに対して正面から挑み……しかし力及ばず、次々とフレアドラゴンの猛威に討たれ、戦火に斃れ伏す骸となっていったのである。

全体に炎が回り、崩れ行くアルバーン帝国の帝都。その城門には大勢の一般人が押しかけ、どうにかして逃げ出そうとしていた。しかし、フレアドラゴンが放った大量の火炎弾が落下し、そのうち数発が門前の道路と城壁に命中した。これにより、道路に溢れかけていた避難民が４０人ばかりまとめて吹き飛ばされ、即死した。そして運の悪いことに、火炎弾が命中した城壁が崩れ、火炎弾炸裂によって広がった炎と共に門を塞いでしまったのだ。このため、避難民たちは有力な退路を１つ失ってしまい、炎が荒れ狂う帝都を逃げ惑い、１人また１人と斃れることになってしまったのである。

混乱と恐怖のどん底に突き落とされた帝都に背を向け、１騎の騎馬が街道を走っていた。その背中には、ハンターギルドの制服を着た壮年の男性が跨っている。彼の目には涙が流れ、しかし帝都の方を振り返ることなく、北に向けて馬を走らせていた。

その男性、ハンターギルド・アルバーン帝国帝都支部サブマスターのオーヴィンは、マスターから渡された複数の書類を入れた鞄を肩にかけ、必死に馬を走らせている。実は彼は、帝都にフレアドラゴンが出現し、絶望的な交戦が始まった頃にマスターから命令を受けたのだ。

『私はここでハンターたちを指揮し、フレアドラゴンの打倒に生還の望みを賭ける。お前は、フレアドラゴンに関する一切の情報を、帝国北部の国境の町、そしてブランデルとティルスの王都ギルド支部に至急伝えてこい！　お前にしか、できない仕事なのだ！

我々はここで敗れ、戦場の露と消えるやもしれん。だが情報だけでも伝われば、我々が仮に敗死したとしても、他国の兵やハンターがきっと仇を討ってくれるはずだ！　行け！　ここは我々が奴の注意を引き、時間を稼ぐ！』

ギルドマスターのこの采配により、オーヴィンは帝都の門が避難民

と火炎弾、そして城壁の瓦礫によって封鎖される前に、帝都を脱出することができたのである。
　彼にも分かっていた。この後、フレアドラゴンに挑んだマスターやハンターたちに、如何なる運命が待ち構えているのか。心情的には今すぐにも帝都に取って返し、マスターたちと共に戦いたいところだ。だがそれをすれば、フレアドラゴン打倒の可能性が消えてしまうことになるし、マスターたちの犠牲も無駄になってしまう。
「マスター、そして帝都で必死に戦うハンターたち……すみません。この情報は必ず、北の町とブランデル・ティルス両国に伝えてきます……！」
　今この瞬間にも失われているだろう命を悼みつつ、オーヴィンは馬を走らせるのだった。
　彼の頭上には、鮮血のような不吉な赤い色に染まった異様な空が広がり、しかもその赤は青空を徐々に侵食しつつある。それはまるで、今後の戦禍の動向を暗示しているかのようであった。
　そして、帝都の方はというと、不気味な赤銅色の雲が分厚く広がり、それによって覆い隠されてしまっている。そこで起きている地獄のごとき光景と街の運命を、天が憐れみ、他人に見せないようにしようとしているかのようだった。
　軍事大国アルバーン帝国、壊滅。皇族たちはその全員が帝都にて戦死し、帝都は完全に焼け落ちて更地と化した。また同時に幾つもの街や町、村が、巨大生物の猛威の前に灰塵に帰したのである。
　皇族たちの中で戦禍を免れることができた者は、誰もいなかった。他国を武力で併合し、繁栄を謳歌するはずだった帝国の皇族たちは、１人残らずあの地獄の業火に消えてしまったのだ。
　また、帝都の守りに就いていた国軍の兵士、貴族領軍の兵士、皇帝親衛隊を合わせて約６万人、それとは別にハンターたち２６人（「蒼い疾風」所属メンバー含む）、そして帝都に暮らしていた一般市民・奴隷合わせて９万人、総合計１５万人以上もの命が、業火の中に失われていったのである……。
　グオオオオアアアアアアーッ!!!

炎が火災旋風となって帝都一帯を荒れ狂い、帝都の建物全てが燃え落ちる中、アルバーン帝国の運命を告げ知らせるかのようにフレアドラゴンの咆哮が響き渡った。

「アルバーン帝国内の偵察と調査？」

「ああ」

一方こちらは、アルバーン帝国の北にあるティルス王国の王都。そのハンターギルドにて、「赤き誓い」がギルドマスターから説明を受けていた。彼女たちはギルドの依頼ボードを見ながら受ける依頼を探していたところ、ギルドマスターに呼び出されたのだ。そしてマスターから申し渡されたのが、「アルバーン帝国の偵察と調査」という指名依頼だったのだ。

「またあの国が、何か怪しげな動きでもしているの？」

レーナが真っ先に口を開く。

以前、「赤き誓い」は情報収集任務でアルバーン帝国に潜入したことがある。レーナはその時のことを思い出したのだ。

「いや、違う。実はな、アルバーン帝国帝都のハンターギルド支部から、緊急の情報が入ってきたのだ。ここから先は、他言無用で頼む」

だが、マスターの口から出てきたのは、思いがけない内容だった。

「分かりました。それで、緊急の情報、とは？」

すかさず、メーヴィスが交渉役を引き受ける。こういう場合は、パーティでも一番の年長者にして、パーティリーダーでもあるメーヴィスが出ることが多い。……普段レーナやマイルに指揮権を取られがちなので、ついうっかり忘れそうになるのだが。

「何でも、アルバーン帝国内に突然巨大な竜が現れたらしい」

「竜ですか？　古竜のような？」

「そうらしい。だが、全身を赤い鱗と岩盤のような黒い甲殻で固め、身体のあちこちから炎を噴き出すのだそうだ。これまでに確認された竜種とは似ても似つかない、と報告されている」

マスターの説明を聞いて、メーヴィスは必死にイメージを膨らませようとした。だが、正直なところイメージが浮かばない。

「そんな竜が出た、ということは、帝国には大きな被害が出ているのではないですか？」
「ああ。実際その竜の襲撃によって、アルバーン帝国の東部から南部にかけて大きな被害が出ているそうだ。特にアルバーン帝国東部の港街カザンは、その竜の襲撃によって全滅に追い込まれたそうだ」
　これには流石に、「赤き誓い」の面々も驚いた。
　確かに竜種は、この世界においては間違いなく生態系の頂点か上位に食い込む生物だ。しかし、大規模な街1個を全滅させるとなると、古竜くらいにしかできない芸当だろう。つまり、アルバーン帝国に出現した新種の竜は、古竜クラスの実力を持っている可能性が考えられる。
　しかも、力を以て街1個を全滅させるとなると、かなり凶暴な性質を持つらしい。非常に危険な相手だ。
「アルバーン帝国帝都のギルド支部はこの竜を、『煉獄竜フレアドラゴン』と仮称することにした。また、カザンにあったギルド支部も壊滅させたことから、このフレアドラゴンをハンターギルドに喧嘩を売った者と認定し、最優先討伐対象に指定することを具申してきた」
　マスターの説明は続く。
「アルバーン帝国は言うまでもなく、我が国の隣国だ。その隣国でこれほどの事態が発生した、というのは坐視できない。フレアドラゴンに関して、情報収集を行う必要がある。最悪の場合、フレアドラゴンと一戦交えて情報を持ち帰らなければならんかもしれん。
　だが、この辺一帯では最大の港街であるカザンを全滅させたとなると、フレアドラゴンの力は凄まじいものであると考えられる。おそらく、並のハンターパーティでは情報収集はできないだろう。それどころか返り討ちに遭ってもおかしくない。
　そこで、お前たちに白羽の矢が立ったというわけだ。
　この任務は我が国、そしてハンターギルドという国家を跨ぐ組織にとって、極めて重要な任務である。なるべく多くの情報を集めてもらいたいが、最優先すべきは生きて帰ることだ。おそらくお前たちにしかできないだろうと考え、指名依頼とする」

「依頼内容は分かりました。それで、報酬はどのくらいになりますか？」
一通りの内容を聞いたメーヴィスが、疑問を提起した。
「うむ、報酬はまず前金として金貨４０枚。生還すればオリハルコン貨４０枚。収集した情報の内容によっては、さらにボーナスが上乗せされる。それとは別に、生還すれば功績ポイント1万を付与する」
これを聞いたポーリンの目が一瞬、凄まじい光を放った。
前金だけで金貨４０枚というのは、かなり破格だ。それに加えてオリハルコン貨４０枚プラスアルファとなれば、大儲けになる。功績ポイント1万というのも、とんでもない好条件だ。
「さて、どうする？　この依頼、受けてくれるか？」
ギルドマスターの問いに、「赤き誓い」の４人は全員が爽やかな笑み（ただしポーリンのみ若干黒い笑いが混じっている）を浮かべて答えた。
「「「この依頼、お受けします！」」」
そして、ギルド支部を出た「赤き誓い」一行は、急いで宿屋に戻って旅の支度にかかった。もちろん、宿屋の看板娘であるレニーにも、「急な依頼で遠出することになったため、1ヶ月くらいここを留守にします。ゴメンね！（意訳）」と告げている。
翌日、ギルド支部が用意した2頭立ての馬車の中で、レーナが気合十分の声を張り上げた。
「第一目標、アルバーン帝国北部国境の街。『赤き誓い』、出撃！」
「「「おお！」」」
かくて「赤き誓い」は出撃した。
問題の「フレアドラゴン」と遭遇した時、彼女たちは何を感じどんな情報を収集するのか。それを知る者は、この時点ではまだ誰もいなかった……。

第7話　黒（こく）焔（えん）盛んにして災異未だ止まず

「転移！」
「あんた、そういえば前にもそれ、やらなかった？」
何やら訳の分からぬことを叫びながら、国境を示す道標の石の前を飛び越すマイル。それを見たレーナが、呆れた表情でツッコミを入れる。
レーナの言う通り、実はマイルは以前にも、アルバーン帝国に入国する際に同じことをしている。あの時はギルド（を通して王国軍の上級司令部、もしくは王宮）からの依頼を受けて帝国の内情を探るため、商人に扮した間諜を護衛する形での入国であった。
「何か、お約束みたいなことになってますね……」
そう言って肩を竦めるポーリンと、苦笑するメーヴィスであった。
ティルス王国の王都を出立してから2日後、「赤き誓い」一行はティルス王国とアルバーン帝国の国境にたどり着いていた。流石（さすが）にギルドが出してくれた馬車は、速度が速い。しかも今回は、前回「赤き誓い」がアルバーン帝国に潜入した時とは異なり、余計な荷物を一切積んでいない。そのため、国境まで来るのにかかった時間は以前よりも短かった。
さらに言えば、今回は「夜を明かすため」という理由で国境手前の町で宿泊した後、朝一番で国境を超えている。実質1日で国境まで来たようなものだ。
ギルドの馬車と「赤き誓い」の一行が国境を越えた時、彼女たちの前方、つまりアルバーン帝国領側から馬に乗った男が1人やってきた。かなりの速度で馬を走らせており、よほど急いでいるようだ。
その男が着ている衣服がギルドの制服であることにメーヴィスが気付いた時、男も「赤き誓い」に気付いたらしく、馬を停止させた。そして、声をかけてくる。
「商人のキャラバンか？　この先は非常に危険……って、お前たちは

……」
早口で話しかけてきた男は、「赤き誓い」一同に気付くと声の調子を変える。まるで、どこかで会ったことがあるかのような口ぶりだった。
そしてすぐ、「赤き誓い」のメンバーも、相手が誰であるか気付いた。
「「オーヴィンさん！」」
「……誰？」
ただ1人、マイルを除いて。
そう、実はマイルは人の顔を覚えるのが苦手なのである。これは前世以来のマイル、もとい「栗原海里（くりはらみさと）」の癖であった。
「赤き誓い」の面々は、一度オーヴィンと会ったことがある。アルバーン帝国帝都のギルド支部で「腐（ト）った依頼（ラップ）」を掴まされた時のことだ。その時にお互いの顔を覚えていたのである。……1名を除いて。
「こんなところで会うとは奇遇（きぐう）だな。何しに来たんだ？」
オーヴィンに尋ねられ、パーティを代表してメーヴィスが答える。今回は特に、隠すようなこともないはずだ。
「アルバーン帝国の方で何か大きな事件があった、と聞きまして、その情報収集のために参りました。『フレアドラゴン』とかいう巨大な竜が出現したと伺っています」
「ああ、その件か。ならちょうど良い、伝えておくことが幾つかある」
入国した途端にいきなり有力な情報を手に入れられそうになったため、「赤き誓い」一同も少し身構えた。
「まず1点目、この先は非常に危険だ。というのも、あのフレアドラゴンが出現して以来、この国の国土はめちゃくちゃにされている。山々は次々と爆発して火を噴き、原因不明の地鳴りや森林火災が多発し、それらに触発される形で動物の暴走もしばしば起きているんだ。おかげで、帝国各地の村や畑、街にも被害が出ている」
のっけから凄まじい情報が出てきた。この情報には、流石の「赤き誓い」一同も目を丸くしている。
「次に2点目、これが非常に重要な情報なんだが……昨日、アルバーン帝国の帝都にフレアドラゴンが突然現れた。このため、迎撃態勢の構

築が間に合わず、アルバーン帝国の帝都は全域に火が回った。多分今頃は、フレアドラゴンの力によって陥落しているだろう。
私がここにいるのも、ハンターギルドの帝都支部が壊滅する前に、マスターから情報伝達を託されたからだ。これからブランデル、ティルス両国に情報を伝えに行く」
まさかまさかの情報に、「赤き誓い」の面々は大きな衝撃を受けた。
アルバーン帝国といえば、この周辺切っての軍事大国だ。一度、帝国への潜入・情報収集任務を行なった際に帝都に行ってきたが、そこは街全体を分厚い城壁で覆い、精強な兵士たちや多数の兵器を配備した鉄壁の要塞だった。そんな王都をあっさり攻め落とされたとなれば、これはただごとではない。
「そして3点目、ちょっとこれを見てもらいたい。これは、カザンでフレアドラゴンと交戦したハンターが描いてくれた、フレアドラゴンの姿だ」
そう言って、オーヴィンは肩にかけた鞄から1枚の紙を取り出し、それをメーヴィスに手渡した。
4対の目から放たれる視線が、一斉にその紙に注がれた。そこには、2本の太い脚で上体を支える巨大な竜が描かれている。
竜は四肢の他に一対の翼を有しており、細長い首の先に比較的小さな頭部を持つ。その容姿は、古竜のそれに似通っていた。ただし、決定的な相違点として、フレアドラゴンの翼には翼膜がない。代わりに翼の先端には真っ赤な大穴が口を開けており、何かを射出する機能があるように思われた。
全身を覆う黒い甲殻には、炎を思わせる真っ赤なラインが無数に走っており、それらのラインは胸と思しき部位と前脚の付け根にある赤い部分へと繋がっている。
「……これが、フレアドラゴン、ですか……？」
「見たことないわね……」
「私も、これは初めて見るな……」
ポーリン、レーナ、メーヴィスの反応を見て、オーヴィンは言葉を続けた。

「これは、ブランデル・ティルス両国のギルド上層部と政府に見せなければならないものだから、済まないが皆にはここで容姿を覚えてもらうしかない。済まない……」
「いえ、ありがとうございます。これほど独特の容姿なら、すぐに覚えられますよ」
　メーヴィスのこの言葉は、お世辞でも何でもない事実である。
　ハンターというのは、命懸けの職業だ。己の命を長らえさせるためには、実際に経験したことはもちろんだが、噂に聞いた程度のものであってもなるべく覚えておく方が望ましいのである。
「私からは以上だ。すぐにもブランデル王国へ行かなければならないので、私はここで失礼する。君たちはフレアドラゴンの情報を収集しに来たと言っていたが……どうか気をつけて欲しい。もはや何が起こるか分からんからな。
　そうそう、この先にある国境の町では、帝国軍と地元のハンターたちが防衛拠点を置いてフレアドラゴンに抵抗しようとしている。まずはそこへ行ってみると良いだろう。
　君たちの無事を祈っている」
　言い終えると、オーヴィンは馬に鞭を振るい、北へと走り去っていった。その後ろ姿を見送り、メーヴィスが声をかける。
「よし、まずは有力な情報をゲットしたね。フレアドラゴンの容姿と、その力の一端が分かったのは大きい。
　まずは国境の町へ行こう。そこで更なる情報収集だ」
「そうね。初めて戦う相手、それも竜種となれば、情報は多い方が良いわ」
　レーナが賛成し、ポーリンも頷いたところで、メーヴィスは最後の1人、マイルに声をかけた。
「マイル？」
「……え？　ああ、はい！
　まずは国境の町に行ってみる……ですね？」
「そうそう。それじゃ、行こう！」
　メーヴィスの号令により、再び歩み始める「赤き誓い」一同。

マイルはずっと、考え込んでいた。フレアドラゴンの姿を描いた絵を見てから、彼女の脳には何かが引っかかったままになっている。
（フレアドラゴンのあの姿、どこかで見たような……。でも、どこで見たのか、そして何の姿だったのか思い出せない……）
絵を見た直後からそれに気付いたマイルは、ナノマシンに頼んで情報を検索してもらった。しかし。
【申し訳ございませんが、我々ナノマシンのデータベースにも、フレアドラゴンに関する情報がほとんどありません。見つかった情報といえば、このフレアドラゴンがカザンと呼ばれる港街を全滅させたこと、帝都もフレアドラゴンによって陥落していること、それからフレアドラゴンが最初に現れた地はオーブラム王国中西部の森林地帯であること、そしてフレアドラゴンは、とある教団の男たちによって異世界から召喚されたらしいということのみです】
（オーブラム王国？　それじゃ、もしかして……）
【はい。マイル様ご一行が対処したあの森林火災、あれを引き起こしたのがフレアドラゴンです。あの時残っていた巨大な足跡は、フレアドラゴンのものだったのです】
（やっぱりそうだよね……。あと、とある教団の男たちって、もしかして……）
【お察しの通り、マイル様の仰る「ファリルちゃん事件」の時の教団の仲間です】
（やっぱり……。それで、アルバーン帝国のどの辺に、フレアドラゴンの被害が及んでいるの？）
【率直に申し上げますと、この国の東部から南部、中部、さらには西部にまでフレアドラゴンの影響が及んでいます】
（南部と西部？　カザンは帝国東部の街だし、帝都は中部にあるよね？　なんでそんなところに被害が出ているの？）
【フレアドラゴンは最初にカザンに出現し、海岸線に沿って東部から南部までぐるりと回った後、急速に北上して帝都に至ったのです。西部については……あのフレアドラゴンの出現以降、いきなり火山の噴火や原因不明の森林火災が多発するようになりました。そのため、ま

だ不確定ではありますが、これらの事象は全てフレアドラゴンと何らかの関係があると見られています】
（まだ分かってないんだね……ありがとう、ナノちゃん）
【いえいえ。お役に立てず申し訳ありません】
（そういえば、古竜の皆さんは？）
ふと思い出したように、マイルは付け加えた。
アルバーン帝国の南東部には、「古竜の里」がある。そのことを思い出したマイルは、ケラゴンや他の古竜のことが気になったのだ。
【……】
だが、ナノマシンからの答えが返ってこない。
（……ナノちゃん？）
【……】
（……ナノちゃん？）
【……その、マイル様……大変申し上げにくいのですが……】
（……まさか……）
【はい。フレアドラゴンの攻撃により「古竜の里」は全滅。古竜たちはそのほとんどが死亡しました】
（ケラゴンさんや、あの、便利です、とかいう古竜も？）
【はい。ケラゴン殿、ベレデテス殿、その他指導者ヴァルティン殿を含む長老たちは、全て死亡……生き残っているのは、ウェンス殿とシェララ殿だけです】
（そんな……）
マイルにとっては、特にケラゴンは友人（いや、友竜か）と言っても良い存在である。それが死んだとなれば、その衝撃は大きかった。
（フレアドラゴンが敵であることは分かったけど、そのフレアドラゴンは元々この世界にいた存在じゃないのね？）
【それは確からしいと見られています】
あの邪神教団が、何かとんでもない存在として「フレアドラゴン」を召喚したに違いない……マイルはそう睨んでいた。
オーヴィンと別れた後、アルバーン帝国側の国境付近の町に着いた

「赤き誓い」一行。この町は、以前に来た時とは雰囲気が大きく異なっていた。町の南側には、明らかに軍人と思われる鎧を着た男たちが陣形を形作っており、雰囲気がピリピリしている。
また、町の中と町の外部北側には、様々な荷物を持った一般市民らしい人々が大量に集まっていた。帝国各地からの避難民らしい。
そうした人々の顔には、共通して恐怖が刻まれていた。何かの視線に怯えるように周囲を見回す人、きつく目を閉じて何かを念仏のように唱え続ける者、泣いている子供。中には発狂したのか、突然喚き始める者もいる。
そうした人々の間を抜けて、「赤き誓い」を乗せた馬車は町のハンターギルド支部に着いた。まずは情報収集である。
かららん
いつものドアベルの音と共に、建物の中に入った「赤き誓い」一行はすぐに、様子がおかしいと気付いた。
どこの国のどんな町のハンターギルド支部であっても、ギルドが開いている時間はいつもハンターパーティの1つくらい、あるいは個人活動している等の理由で1人でいるハンターの数人は、いるものである。だが、このギルド支部にはハンターが1人もいない。それだけではなく、ギルド支部の職員や幹部と思しき人々が忙しげに行き交い、受付嬢ですらその表情に焦りが見られる。
受付嬢に話を聞いてみると、どうやらフレアドラゴンの襲来に備えて急ピッチで防衛線が築かれているらしい。既に帝都はフレアドラゴンの力によって陥落し、それに伴って上級司令部や皇宮とも連絡が取れなくなり、指揮系統は麻痺状態にあるため、この防衛線は帝国北部に領地を持つ貴族たちが中心になって築いているそうだ。
防衛線は、この町と帝都付近の大きな街の間に三重に渡って築かれている。こちらには貴族たちの領軍が配置され、守備に当たっているそうだ。帝国の最北部、つまり国境線付近に領地を持つ貴族の軍勢は、まだ到着していないとのことである。帝都からここまでの距離を考えると、おそらく派遣部隊の編成が間に合わなかったのだろう。
また、ハンターたちは機動予備戦力となっている、とのことだった。

Dランク以下の個人ハンターやパーティは、万が一の事態が発生した時に避難民の誘導と護衛に当たることになっているそうである。そして、Cランク以上のパーティは迎撃戦力となっている、とのことであった。もちろんだが、Cランクパーティである「赤き誓い」も、迎撃戦力としての参加を要請された。

「参戦自体は構いませんが、我々はティルス王国のギルドから特別指名依頼を受けて動いています。万が一の時には、ここを離脱してティルス王国へ戻ることも考えられますが、それでもよろしいでしょうか？」

メーヴィスがそう尋ねると、受付嬢は一瞬迷った様子を見せた後、少々お待ちください、と言い残して奥へ引っ込んだ。受付嬢が戻ってきた時には、ギルド支部のマスターが一緒にやってきた。相談しに行ったのだろう。

場所を移して交渉した結果、「赤き誓い」は離脱を許可された上で防衛戦力の一翼として参加することに決まった。マスターも、迎撃戦力の最低ランクであるCランクのパーティが1つ抜けたところで、事情に大きな変化は生じないと判断したらしい。

「まあ、これは概ね想定通りじゃないかな？」

「そうですね、後はフレアドラゴンが来るのを待つだけでしょう！」

ギルド支部を出た後、そう言ったメーヴィスにマイルが応じた、その時だった。

ゴゴゴゴゴゴ……ドォーーーン!!

不意に、大地の底から響いてくるような大きな音が聞こえた、と思う間もなく、地面が大揺れに揺れたのだ。

「なっ、何だ!?」

「た、立てない！」

「揺れているのか、地面が!?」

兵士たちや町の住民たちが地面にしゃがみ込むか、もしくは揺れに足を掬われ、転倒する。

「何よこれ！　なんでこんなに地面が揺れるのよ！」

「分かりません……！」

レーナとポーリンも例外ではなく、「赤き誓い」の面々も思わず地面にしゃがんでしまっている。
「この地揺れは、相当に激しいねっ……！」
さすがはメーヴィス、「地揺れ」という表現を知っている辺り、教養のある貴族たる姿を見せている。「地揺れ」という言葉があるところからすると、この世界にも「地震」という現象はあるらしい。
（この世界にも、地震というものがあるんですね……）
そしてマイルは、どこか他人事のような考えを抱いていた。
その瞬間、一際大きく地面が揺れた、と思う間もなく、
ドガアアアアアアーン!!
国境付近の町から見て東にある山の1つが、突如として噴火した。山頂から強烈な噴煙が噴き上がり、一瞬だけ真っ赤な炎が見えた。
その直後、山の噴火を見ていた町の人々の前で、信じがたいことが起こった。なんと、山そのものを包み込むような轟然たる大爆発が発生し、巨大な炎と黒煙とが山を覆い尽くしてしまったのだ。山を構成していたと思われる土砂や岩が撒き散らされる。
「うわあぁぁぁ！」
「げぶっ……」
「助け……グジャッ」
土砂と岩の飛散に巻き込まれ、兵士や市民が次々と倒れる。ある者は飛んできた岩に潰され、またある者は上空から降ってきた大量の土砂によって、生き埋めとなった。家屋にも損傷し、あるいは崩壊するものが相次ぎ、また市街地の道路が家屋の瓦礫や土砂で封鎖される事態が多発した。
そして混乱が続く中、
グオオオオオオアアアアアーッ!!!
噴火の轟音すら霞むような、凄まじい咆哮が響き渡った。山そのものが上げる雄叫びとはまるで違う。それはこの町の運命を予言するかのような、恐ろしく禍々しい声であった。
「なっ、何だ今のは!?」
驚愕の表情でメーヴィスが叫ぶ。

と、黒煙の中に巨大な何かの影が一瞬だけ見えた。そして、黒煙が風に吹き散らされた時には、山は跡形もなく消え去り、代わりにそこには異形の生物が立っていた。

２本の太い足は、岩石のようなゴツゴツした甲殻に覆われた巨大な体躯を支えており、その上からは扁平な首が長く伸びて、先端に顔がある。額の部分には２本の角が天に向かって生えており、その根本には深紅に光る双眼がある。舌なめずりをする口元には、無数の牙が上下に並んで生えている。また、項にはオレンジ色に輝く巨大な穴が６つ開いていた。

そいつの首の表面には赤く光るラインが走っており、それは両肩と胸にある強いオレンジ色の光を放つ部位へと続いている。その部位は光り輝いているだけでなく、目を凝らすと中で何かを渦巻かせているように見えた。両肩のオレンジ色の核からは、両腕と翼に向かってオレンジ色のラインが伸びているが、翼はどう見ても翼に見えない。翼膜が存在せず、ただ単に岩の塊をくっつけただけのような形に見えた。

何より特筆すべきは、生物の大きさである。古竜を彷彿とさせるほど……いや、下手をすると古竜より大きい。山かと錯覚するほどの巨体を持ち、全身を黒い甲殻に包包み、絶対零度の眼光を放つ深紅の瞳を以てこちらを見下ろすその姿は、神々しくも禍々しかった。

「何よ……アレ……」

レーナの呟きは、「赤き誓い」全員の心中を代弁していた。そして「赤き誓い」の４人は、突然の巨大生物登場に硬直し、動けなくなっている。だが、アルバーン帝国の兵士たちはすぐに動き出した。

「出たぞ……出たぞおおおおお!!」

「ふ、フレアドラゴン！　まさか、地中を突破して防衛線を迂回してきたというのか！」

想定を完全に覆された帝国軍の兵士たちは、混乱しながらも迎撃のため走り出す。それを見て、メーヴィスがようやくのことで立ち直った。

「オーヴィンさんが見せてくれた絵とも一致する……どうやら、あの

竜が件のフレアドラゴンみたいだ。さあ行くよ！」
「え、ええそうね！」
「わ、分かりました！」
本来の「赤き誓い」リーダーの号令に、レーナとポーリンがようやく我に返る。そして2人ともスタッフを構えた……が、あと1人、マイルが硬直している。
「ど、どうして……こんなところに……」
目を見開き、マイルはフレアドラゴンを見つめて呟いた。その肩をメーヴィスが叩く。
「マイル！」
「……え？　ああ、はい！」
「突然あんなのが出てきたから、驚くのも無理ないよ。けど、あれが問題のフレアドラゴンなんだ、軍の兵士と一緒に迎撃するよ！　マイル、君がしっかりしてくれないと！」
「は、はい！」
ようやくのことで我に返り、剣を抜くマイル。
「ええと、作戦はいつも通り！　ポーリンさんとレーナさんは、攻撃魔法で後方から援護してください！　相手は火を吐いてくるそうですから、炎魔法は多分効きません。氷とかの魔法を中心に攻撃してください！
メーヴィスさんと私は前衛を担当、敵攻撃に注意しながら肉薄、攻撃します！　あの巨体です、攻撃範囲の広さに注意、吶喊（とっかん）！」
やっと元に戻ったマイルが、早口で号令を下した。「赤き誓い」では、こういう非常事態で指揮を執るのはマイルの役目なのである。
メーヴィスと共に走り出しながら、マイルは今一度「フレアドラゴン」と呼ばれた竜を見上げた。竜は既に兵士と交戦に入っており、火球ブレスを吐いて早くも帝国軍の兵士を数人、焼き払っている。
マイルは、さっき喉から出かけた言葉をギリギリで押し留めたことに安堵していた。
さっきのマイルの「ど、どうして……こんなところに……」という言葉。メーヴィスはそれを、「どうしてこんなところに、フレアドラゴ

ンがいきなり出てきたの？」とでも言おうとしたのだと解釈した。まあ、この状況ではそう捉えるのが自然であろう。

だが実は、マイルが言いかけた内容はそうではなかったのだ。マイルは危うく、こう言うところだったのである。

「ど、どうして……こんなところに、グラン・ミラオスが出現したの!?」

そう、マイルは思い出したのだ。フレアドラゴンが、何者であるのかを。

実はマイルはこの竜を知っていたのだ。この世界のハンターギルドが「煉獄竜（れんごくりゅう）　フレアドラゴン」と名付けたこの竜は、実は全く別の名を持っていたのである。その名前こそ、マイルがうっかり口に出しかけた「グラン・ミラオス」という名であった。

グラン・ミラオス。別名を「煉黒龍（れんごくりゅう）」と称（とな）えるこの龍は、本来この世界に生息するものではない。ではどこにいるのかというと、マイルの前世の姿たる「栗原海里」が住んでいた現代日本で販売されている、とあるゲームシリーズの世界にいるのである。このおかげでマイルは、「邪神教団の男たちが召喚したという存在」こそがこいつなのだと完全に理解した。

このゲームシリーズにおいては、「龍」と呼ばれる生物は「古龍種」というカテゴリーに数えられており、通常の生物より圧倒的に高い力を持つ。その「古龍種」の中でも、「黒龍」という名を持つものは頭一つ以上抜きん出た規格外の力を……世界すら滅ぼす力を持っている、と設定されている。そして、「煉黒龍」たるグラン・ミラオスも、恐るべき力を有しているとされる。

ゲーム中では、グラン・ミラオスは「大地の怒りが具現化した存在」として畏怖され、「偉大なる破壊と創造」「大地の化身」「煉獄の王」「獄炎の巨神」などと呼ばれていた。実際にとある海域に現れた際には、想像を絶する禍々しい力を以て海域一帯を岩漿（マグマ）のごとく煮立たせ、海域に存在した数多の島々を悉く海の底に沈めてしまったと伝えられる。海洋全てが血のように赤く染まった光景は、正しくこの世の地獄

と表現するより他にないほどだったそうだ。
これだけでも、グラン・ミラオスが非常に危険な存在であること、そして凄まじい力を持っていることは、お分かりいただけるだろう。
というのも、まず海を真っ赤に染めて煮立たせること自体が規格外なのである。グラン・ミラオスの身体には、血液とは別に「ほとばしるマグマ」と呼ばれる真っ赤な灼熱の液体が循環しているのだが、この液体、なんと水中でもしっかり炎を纏っている。普通、マグマは水に触れると冷えて固まってしまい、最終的には陸地になるものなのだが……水に入ってなお炎が消えることがなく、逆に海の方を真っ赤に染めて煮立たせてしまう辺り、ミラオスがどれほどの力を持っているのか、想像もつかない。
また、グラン・ミラオスは「獄炎の巨神」とも呼ばれる、というところから、神としての側面をも持ち合わせている。ここで思い出してほしい、あの邪教を信仰する男たちが召喚しようとしていたのは、「強き力を持つ異界の神」ではなかったか？
そう考えれば、男たちが「次元連結魔法」を使用して召喚の儀式を行った結果、グラン・ミラオスを召喚してしまったのも、ある意味では当然のことだったのかもしれない。ただ残念なことに、召喚してしまったのは神は神でも「邪神」だったようだが。
（まずい……！）
マイルの額を、一筋の汗が流れる。
世界観的に考えても、グラン・ミラオスは強敵だ。いや、この世界に生息する「最強の魔物」古竜すら超える圧倒的な力を持つ、と言い切れる。古竜には「島を海の底に沈める」なんてことはできないが、ミラオスにはできるからである。
また、グラン・ミラオスが生息していたゲームシリーズの世界は、この世界よりも文明レベルが進んでいる。具体的には、地球で「世界の三大発明」と呼ばれる火薬が実用化され、原始的ながら大砲が使用されているレベル。そんな文明レベルの進んだ世界でも、ミラオスは世界そのものを破滅させかねない力を振るっていたのだ。
ならば、ゲームシリーズの世界より文明レベルが遅れているこの世

界では、どうであろうか？　……考えるだけで、寒気がする。
「皆さん、この……フレアドラゴンの力は、あまりにも強大です！　複数の古竜を相手にした時以上の脅威だと思ってください！」
マイルはうっかり「グラン・ミラオス」という名前を口にしかけて、慌てて「フレアドラゴン」と言い直した。
「「了解！」」
マイルのこの一言で、メーヴィス、レーナ、ポーリンの3人は事情を理解した。そして、「アレ」の行使に踏み切った。
（水分凝縮、急速冷凍、整形……。氷結弾、発射用意……）
（ウルトラ・スーパー・デラックスホット魔法、発動用意……。赤き地獄、フルパワー……）
（燃えよ我が心、震えよ我が魂……。マイルの名の元に、メーヴィスが命じる。我が愛剣よ、真の姿を現せ！）
（栗原海里、アデル・フォン・アスカム、マイルが命ずる。我が命令を最優先で受諾せよ！
ナノマシン！　アイ、コマンド、ユウゥ……）
そう、本気モードの発動である。
「噴火中の火山の中から現れた、ということは、あのフレアドラゴンは溶岩にも耐える力を持ちます。
相手はあまりにも強大です！　全兵器使用自由（オールウェポンズ・フリー）、最初から全力で行きます！」
グラン・ミラオスが火山の中から出現した、というところからも、マイルはミラオスが並々ならぬ力を持つと確信していた。
そのマイルの言葉に、メーヴィスが返事の代わりにポケットから出した「ミクロス」を一気に呷（あお）る。その瓶は、通常の「ミクロス」の瓶の3倍もの容量があり、危険度を示すために赤く塗装されている。
……3倍だけに。
「氷結弾、発射！」
「ウォーターボール・エクストリームホット！」
「ＥＸ（エクストラ）　真・神速剣、参（さん）の太刀、斬竜剣！　参る！」
「位相光線（フェイザー・ビーム）、発射！」

どういう訳か、フレアドラゴン……もといグラン・ミラオスに突撃した兵士たちは、ミラオスを遠巻きにするだけで止まってしまっている。剣や槍による近接攻撃を実施していない。そこに、「赤き誓い」の攻撃が一斉に着弾した。

マイルが「全兵器使用自由（オールウェポンズ・フリー）」と言ったので、「赤き誓い」の他の面々も本気の攻撃を……古竜を相手にした時に使う魔法を使用した。

ところが。

しゅうううう……じゅうう……

しゅうううう……

ちゅん！　ちゅん！　ちゅん！

レーナの放った「氷結弾」は、グラン・ミラオスに到達する前に溶けてしまい、「ウォーター・ボール」にすら劣るただの水球と成り果てた。そして、ミラオスに着弾した瞬間、瞬時に蒸発し、消えてしまった。ポーリンの「ウォーターボール・エクストリームホット」も、空中で蒸発して消えている。

唯一有効打となったのは、走りながらマイルが撃った「位相光線（フェイザー・ビーム）」のみ。それらは見事に命中し、グラン・ミラオスの身体に穴を開けた。ミラオスが防御魔法を一切使っていなかったのだろう、ビームによって開けられた穴は、かつてマイルが古竜にビームを撃ち込んだ時よりも深い。

しかしそこで、信じがたいことが起こる。「位相光線（フェイザー・ビーム）」によってグラン・ミラオスの身体を覆う甲殻に開いた穴、そこから真っ赤な液体が噴き出る。同時に、煙がその穴から立ち昇った。ものの3秒ほどで煙も液体も消えたのだが……そこに開けられたはずの穴は、完全に塞がってしまっているではないか。

そして、マイルとメーヴィスはその時、立ち止まらざるを得なくなった。どういうことかというと、

「あ、熱いぃ!!」

灼熱のせいである。グラン・ミラオスの身体からの放射熱が凄まじく、近寄ることすらできないのだ。

（そんな……！）

状況を理解すると同時に、マイルの心に絶望が降りてきた。
「赤き誓い」はこれまで、どんな状況でも戦うことができていた。古竜戦士隊に所属する古竜を6頭同時に相手取った時も、初撃でそこそこのダメージを与えることができた。
しかし、今回の相手にはその攻撃のほとんどが効いていない。灼熱の体温のおかげでこちらは近接戦闘ができない。魔法も、レーナが得意とする炎系の魔法は一切通用しないだろう。水魔法や氷魔法は、灼熱の体温のせいで命中前に蒸発するか溶けるかしてしまい、ほとんど効果がない。唯一通用した「位相光線（フェイザー・ビーム）」も、受けた傷を瞬く間に再生されてしまった。
こんなことは、今までに一度もなかった。どんな相手にも、何かしらのダメージは与えることができていた。それが今回は、「赤き誓い」の全力に近い攻撃を行なったにも関わらず、グラン・ミラオスはまさかの無傷……そう、ほぼ無傷である。
その時、マイルの視界に赤みがかったような気がした。次の瞬間、
「「ぎゃぴぐぎゃげひぷべらば！」」
鋭い痛みが、目に、鼻に、口に、一斉に襲いかかってきた。
そう、先ほどポーリンが放った「ウォーターボール・エクストリームホット」。水分が完全に蒸発したことで気化していたカプサイシン成分が、周囲に拡散し、マイルたちに牙を剥いたのである。
（うわあぁぁぁ！　ば、バリアァァ！　フィルター、換気、清浄魔法ぅぅ!!
ま、前にもこんなことあったっけ……！）
激痛で涙目になりながらも、マイルは必死で魔法を使った。そして自らを立て直してから、同じ魔法をメーヴィスやアルバーン帝国軍の兵士たちに行使し、味方の態勢を立て直そうとする。しかし一瞬早く、赤赤と燃える火球ブレスが飛んできた。それによって、マイルのすぐ近くに展開していたアルバーン帝国軍の戦列の一角が崩される。
（!!　ヤバい！）
火球ブレスの炸裂によって生じた爆風を感じ、マイルの口元が引き攣った。

以前、マイルは古竜３頭分のブレスを同時に受けたことがある。あの時、マイルは「格子力バリア」でその威力をかなり減殺したものの、防ぎきれなかった分のブレスの威力によってマイルは吹き飛ばされた。

だが、今撃たれた火球ブレス……間違いなくグラン・ミラオスが撃ったものであるが、その威力は、古竜３頭分のブレスよりも遥かに高かった。マイルが咄嗟に「格子力バリア」を強めに張ったため、彼女は尻餅をつく程度で済んだものの、もし少しでもバリア展開が遅れていたら、おそらく２０メートルは吹っ飛ばされていただろう。しかもこれが、ブレスの直撃ではなく着弾点周囲に広がった爆風によるものだというのだから、恐ろしいものである。

ブレスが直撃すれば……骨も残らないレベルで消し飛ばされる。今さっきブレスを喰らった帝国軍の兵士たちのように。

火球ブレスを撃った当のグラン・ミラオスは……周囲を漂うポーリンのホット魔法の名残など一切気にする様子もなく、悠然と佇んでいる。生物に対して強力な威力を発揮するホット魔法であっても、まともに喰らわなかったのだ。

「ポーリンさん、ホット魔法はダメです！　フレアドラゴンの体温は半端じゃないです、水魔法は避けて土か岩の魔法を使ってください！」

後方で帝国軍の兵士たちの回復に当たっているポーリンに叫び、マイルは改めて気を引き締めた。

相手の力を測るためには、接近戦を挑む必要がある……が、グラン・ミラオスの体温は尋常ではなく、生身のままでは近寄ることすら覚束ない。ならば、やるべきことは１つ。

（高熱遮断、皮膚表面冷却……アイス・スーツ！）

そう、魔法による耐熱性を得た上での近接戦闘である。

アルバーン帝国軍の兵士たちが全く近寄れず、見てくれを気にするメーヴィスですら撤退を余儀なくされる中、マイルは単独でグラン・ミラオスに吶喊した。

一息に走り、マイルはグラン・ミラオスの懐へ潜り込もうとする。

そこへミラオスが火球ブレスを撃ってきたため、彼女は横っ飛びにそれを躱(かわ)した。ついでに、ブレスの爆風を防げるよう「格子力バリア」を張っておく。

ところが、マイルが爆風を防いで体勢を立て直した時、グラン・ミラオスが2発目の火球ブレスを発射してきた。

「このぉっ！」

マイルは咄嗟に、持っていた剣で火球ブレスを薙ぎ払う。ブレスは真っ二つに断ち切られ、マイルの背後で爆発した。その爆風を背中に受けて加速し、マイルは今度こそミラオスに肉薄する。

マイルが狙ったのは、グラン・ミラオスの左脚だ。ミラオスも龍、すなわち生物である以上、脚を支えているアキレス腱のような腱にダメージを与えれば、まともに動けなくなるはず……マイルはそう考えたのである。

巨体を支える太い脚は、岩盤を思わせるゴツゴツした黒い甲殻で覆われている。そして、脚の付け根から爪先に向かって真っ赤なラインが走っていた。ゲーム内で交戦した時の姿と全く同じものが今、実物として目の前にある。

「たぁっ！」

かけ声と共に、剣を振りかぶるマイル。

だがその瞬間、グラン・ミラオスは左脚を大きく振り上げ、一歩前へ踏み出した。そのため、マイルの一撃は残念ながら空を切った。

それだけではなく、ミラオスは振り上げた力強い脚を振り下ろし、マイルを踏み潰そうとする。マイルは飛び退(すさ)ることでそれを回避した。太い脚が大地に振り下ろされ、震度3くらいの揺れが起きる。

その時には、ジャンプで揺れを回避したマイルが今度こそ脚に肉薄していた。大上段の構えから振り下ろされた剣が、今度こそグラン・ミラオスの左脚に食い込む。瞬間、かなり重い手応えが剣を通じてマイルに伝わった。

「っ！」

想像以上の手応えに、思わず剣を離しそうになる。しかも、思ったより剣が食い込んでいない。だがそれを堪(こら)え、マイルはもう一撃、横

薙ぎに脚を斬った。
　重い手応えと同時に、傷口から真っ赤な液体が噴出し、しゅうしゅうと音を立てて白い煙が上がる。マイルは少し下がって、赤い液体を回避した。浴びればかなりの火傷を負うだろうことが、容易に想像できたからだ。
　3撃目を入れようとした時、グラン・ミラオスが大股に2、3歩前進する。その太い尻尾が高く振り上げられているのが、ちらりと見えた。
（!!）
　マイルがバックステップで離脱した直後、大木よりも太く重いミラオスの尻尾が、大地へと叩きつけられた。爆弾が爆発したかのような轟音と共に震度5強はありそうな揺れが発生し、砕かれた岩盤の破片が宙を舞う。もう少し気付くのが遅れていれば、あの尻尾で叩き潰されていたかもしれない。
　少し下がって様子を見ながら、マイルはグラン・ミラオスの挙動に不審感を抱いた。どうも、ミラオスの動きが鋭いように感じられる。マイルが足元に潜り込んだと分かった途端、彼女を潰そうとしてきたのだ。
　それに、その身体を明らかに斬られたというのに、グラン・ミラオスは悲鳴1つ上げない。それどころか、冷静に対処してきたのだ。古竜たちが攻撃を喰らって悲鳴を上げていたのとは、あまりにも対照的である。
（何でこんなに鋭いの……!?　それに、「身体を斬られる痛み」を知っているように見える。
　こんなの、勘ってレベルじゃない。まるで、人との戦いを経験したことがあるかのような……!?）
　そう考えた時、マイルの背筋に悪寒が走った。
（しまったぁ！　そういえばグラン・ミラオスは、少なくとも一度は「あの世界」の人々と交戦したことがあるんだったぁぁ!!）
　そう、実はグラン・ミラオスは少なくとも一度、ゲームシリーズの世界……マイルの言う「あの世界」の人々と交戦しているのだ。つま

り今、ミラオスはその時の経験を元に立ち回っている、と言える。
そりゃあ強いはずである、何しろ一度はその身を以て経験しているのだから。
また、交戦した経験を持つということは、当然ながらグラン・ミラオスは大なり小なり傷付けられたはずだ。つまり、「身体を斬られる」ことの痛みを知っているとも言える。だからこそ、マイルに脚を斬られることも、その痛みも折り込んだ上で、カウンターを狙うことができたのだ。
他者の追随を許さない力、受けた傷をすぐに回復する圧倒的なまでの回復力、そして身を斬られる痛みを知っている。間違いなくグラン・ミラオスは、この世界では段違いに高い実力を……古竜ですら及ばないほどの力を持っている。
（マズい！）
焦ったマイルは即座に、攻撃方法を切り替えることにした。剣を構えつつ、ナノマシンに指示を出す。
（手空きのナノマシンたちは全員、この辺りの上空に移動！
気温、湿度、気圧制御！　屈折率操作、氷晶整列、空間湾曲……集束魔法、発射用意！）
そう、アレである。最強にして最兇、最大の切り札（トランプ）。
この技は以前にもやったことがあるため、ナノマシンたちもマイルの意図を即座に理解して動いてくれた。マイルの指示が、専属ナノマシンを介して数万フィート上空に展開したナノマシンたちにも伝えられる。そして、
【マイル様、発射準備完了です！】
「行くよ……サンシャイン・デストロイヤアアアアーー!!」
ずばしゃあああああ!!
天空から光の剣が飛来し、それがグラン・ミラオスを直撃した。大量の煙が立ち込め、視界が遮られる。
この技は、マイルが古竜戦士隊の６頭の古竜を同時に相手にした時に使った大技である。太陽の光を集め、強力なレーザーを生み出して攻撃するものだ。その威力は、大地を切り裂けば岩が溶けてマグマと

化すほどである。
そんなものを直撃させたのだ。あれほどの威力があれば、如何にグラン・ミラオスといえども重傷は免れまい……マイルはそう考えていた。
そんな中、煙が次第に晴れていき……

グラン・ミラオスは、ほぼ無傷と言い切って良い姿でそこにいた。もちろん生きている。
「ほぼ」とついているのは、ミラオスの甲殻には確かに溶けたような跡が……さっきまでなかった痕跡が残っているからだ。だが逆にいえば、「マイルが攻撃を行った」という証拠になるものはそれしかない。

マイルの技の中でも、凄まじい威力を持つ「サンシャイン・デストロイヤー」。それを直撃で喰らってなお、グラン・ミラオスはぴんぴんしていた。その視線は、絶対零度の眼光を以て彼女を睨みつけている。それはまるで、ミラオスがこう言っているかのようであった。
「何(なん)なんだぁ今のは……？」と。
（もう駄目だぁ……おしまいだぁ……）
これには流石に、マイルも心が折れそうになった。
ゲーム内では、グラン・ミラオスの瞳に捉えられた者は、戦いを挑んだことを深く後悔すると言われている。今のマイルがまさにその状態だった。
まさか「サンシャイン・デストロイヤー」をほぼ無傷で乗り切られるとは、思ってもいなかった。果たして「マイル」というちっぽけな生物は、この強大すぎる存在(グラン・ミラオス)に敵うのか。
（……勝てない。グラン・ミラオスの生命力は圧倒的すぎる……）
そのマイルの後方では、レーナとポーリンが必死に攻撃を行っていた。レーナは次々と氷の槍を生み出しては発射し、ポーリンは土魔法に攻撃を切り替えて「ソイル・ランス」を放っている。

だが、どれも効いているように見えない。氷の槍は溶けかけているし、土の槍は命中するそばから砕けてしまっている。グラン・ミラオスの甲殻に弾かれているのだ。
同じようにして、兵士たちの弓撃も弾かれまくっている。騎士のうち何人かは、巨大な槍を投げて攻撃しているが、それも刺さるだけで大したダメージになっているようには見えない。
逆に、グラン・ミラオスは兵士たちから攻撃を受けながらも、平然とした様子でその場で両脚を踏ん張る。そして、
グオオオオオアアアアアアアーッ!!!
大気どころか大地すら震わせるほどの大咆哮と共に、両翼から大量の赤い液体を撃ち出した。それらは、ミラオスの出現と時を同じくして上空に現れていた赤い雲に飲み込まれていく。
数秒後、血を流したような赤い雲の中から大量の火炎弾が現れ、地上へと降り注ぎ始めた。
ひゅうううううう……ずどどどどどがぁぁぁぁぁぁぁぁん!!!!
「「「「ぎゃあああああー!!」」」」
たちまち辺りは、阿鼻叫喚の地獄絵図となった。
アルバーン帝国軍の兵士や貴族領軍の兵士たちは、天空から降ってくる火炎弾の雨の前に、急速にその数を減らしていく。ある者は、火炎弾の炸裂と同時に骨も残らぬレベルで消し飛ぶ。ある者は即死こそ免れたものの、全身に重い火傷を負い、虫の息で地面に横たわっている。またある者は爆風で吹っ飛ばされ、周辺の木に叩きつけられる。大きな音を立てて木が折れ、その上から目を見開いたままの兵士の身体が落下する。兵士は手足や首があらぬ方向にねじ曲がっており、どこからどう見ても既に死んでいた。
それだけではなく、火炎弾が降り注ぐ中でグラン・ミラオスは今一度咆哮する。
グオオオオオアアアアアアアーッ!!!
その途端、それを待っていたかのように、周囲の山々が一斉に噴火した。葬送行進曲（もちろん、送られるのはアルバーン帝国の兵士たちである）にしてはあまりに物騒な噴火の轟きが、辺り一帯にこだま

する。さらに、地面があちこちひび割れ、そこから溶岩が噴き出してきた。それによって戦場の大気は急速に熱せられ、それに反比例するように兵士たちやハンターたちの動きが鈍っていく。
そう、熱中症のリスクが急速に高まっていたのだ。特に兵士たちは重い金属製の鎧を着用しており、それが高熱を持ち始めたこともあって、急速に消耗していたのだ。
それを見逃すグラン・ミラオスではない。直ちに火球ブレスを1発叩き込むと、地面に倒れ込んで兵士たちを踏み潰す。そして二足歩行から四足歩行の姿勢へと変わった。
四足歩行状態になったグラン・ミラオスは、先ほどまでの比較的鈍い動きから一転、巨体に見合わぬ高い機動力を発揮し、兵士たちやハンターたちを次々と轢き潰す。弓やバリスタによる攻撃も攻撃魔法も何のその、その大半を甲殻で弾き返し、傷付いた様子を見せない。逆に、人がアリでも踏み殺すかのように兵士たちを容赦なく殺害していく。
「何よこれ！　これじゃ、全然歯が立たないじゃない！」
苛立たしげにレーナが叫んだ。
レーナは氷魔法も扱えるのだが、彼女が最も得意とするのは火魔法である。しかし、その火魔法はフレアドラゴン……グラン・ミラオス相手に通じないだろうことは明白だ。何せ火山の中から現れるなんてことを、堂々とやってのけたのだから。
「まさか、これほどの相手だとは……」
ポーリンも、その表情に絶望の色を浮かべていた。その時、
「レーナ！　ポーリン！　マイル！」
メーヴィスが走り寄ってきて叫んだ。
「現地のハンターギルドから離脱の許可を取った！　今のうちに逃げるよ！」
元々「赤き誓い」が受けた任務は「フレアドラゴンの情報収集」だ。無理に交戦する必要はない。
このまま交戦を続ければ、最悪の場合任務達成が不可能になる。それはつまり、この状況においては「赤き誓い」の全滅とほぼ同義だ。そ

のことを考え、メーヴィスは苦渋（くじゅう）の決断を下したのだ。
「……っ！」
レーナが、にが虫でも噛み潰したような表情を浮かべる。この地で戦っているハンターたちを置いて、自分たちだけ離脱することが、気になっているのだろう。
だが、一瞬の迷いの後に、彼女は歯を噛み締めて頷いた。
「……そうね……ここは一度退きましょう。情報収集任務を優先するわ」
「フレアドラゴンがここまで強力だとは、正直思っていませんでした。ここは一度退き、国に情報を報告しましょう。その後万全の態勢を敷いてフレアドラゴンを迎え撃ち、ここで散った兵士やハンターの皆さんの無念を晴らしましょう！」
ポーリンも同意した。
「……撤退します！」
ここに至り、マイルもついに腹を括った。
だが、その撤退行も楽なものではなさそうだ。何せ火山の噴火が起きているし、それに伴う火山性地震や森林火災も発生している。道が悪くなっているのは明らかだ。それに何より、グラン・ミラオスが目の前にいるのである。それでも「赤き誓い」は、この地獄の戦場を離脱し、生きて帰らなければならない。
メーヴィスがちょうど馬車を連れてきてくれたので、「赤き誓い」は迅速に撤退の準備を完了した。
『赤き誓い』はこれより、戦場を離脱！　ティルス王国へ帰還します！」
マイルの号令と共に、馬車は走り出す。火炎弾の着弾によって掘り返された地面や、横たわる人間や馬の死骸、地面で燃え盛る炎を避け、馬車は一路北へと向かい始めた。御者も馬もパニックを起こしかけており、若干速度が速めになっている。
（!?）
不意に後方から凄まじい殺気を感じ、マイルは馬車の車体側面に設置されたドアを開けて後方を振り返った。そこに見えたのは……

こちらを睨み据え、今まさに火球ブレスを放ったグラン・ミラオスの姿だった。
高速で飛来する真っ赤な火球、それに向けてマイルは無詠唱で魔力弾を放つ。
マイルが右手を前方に突き出し、掌(てのひら)を火球ブレスに向けると、掌の先に白みがかった緑色の光の玉が出現し、それが瞬時に巨大化してビー玉サイズからサッカーボールサイズに成長した。その魔力弾が発射され、空中を飛翔して火球ブレスとぶつかる。
ぎゅいいん
何とも形容しがたい、独特の衝突音が響いた。
マイルの放った魔力弾は、火球ブレスとの衝突によって軌道をずらされ、真下の地面に着弾してその威力を解放する。街道が直径2メートル、深さ1メートル程度に渡って抉り取られた。
そして、馬車を狙って飛んできた高精度の火球ブレスは、魔力弾によって軌道をわずかに逸らされ、馬車を飛び越えて街道脇の木立の中に着弾、炸裂した。数本の木が大きな音を立てて折れ、その1本が街道に向かって倒れてくる。御者は咄嗟に馬に鞭(むち)を振るい、馬は悲鳴を上げて加速する。数瞬後、猛スピードで走り抜けた馬車の後方に木が倒れ、街道を塞いだ。
そこに2発目の火球ブレスが飛んでくる。しかしこちらは馬車がスピードアップしたことで狙いが外れ、街道に倒れてきた木に命中した。倒木の幹や枝葉が一瞬で赤い閃光の中に消滅し、焼き切られた木の幹の先端部が街道に力なく転がる。
グラン・ミラオスからの攻撃は、それが最後だった。「赤き誓い」を乗せた馬車は、無事に戦場を離脱することに成功したのである。
グオオオオオアアアアアアーッ！
走り去る馬車を追いかけるように、グラン・ミラオスの咆哮が響く。
初戦における勝利を勝ち誇るかのように。

Ｃａｓｅ・ｉ　患（わずら）いの中央に在りし者

天を廻りて戻り来よ

ここは、ブランデル王国東部にある「国境の街」。ティルス王国とブランデル王国の間の国境付近にある街である。

ある日の夕方（と言ってもほぼ陽が沈みかけており、太陽は地平線付近に最後の光を投げかけているだけである）、その街のある宿屋に、３人組の少女がチェックインした。

ブランデル王国のハンターパーティ「ワンダースリー」の３人、つまりマルセラ、モニカ、オリアーナである。３人は、隣国ティルス王国でハンターとして活動している旧友に会いに行っていたのだ。

「あれ？」

荷物を降ろしたその時、モニカがあることに気付いた。荷物として背負っていた鞄の表面に、何か黒い粉のようなものがうっすら付着している。

「どうしました？」

マルセラの質問に、モニカは自身の鞄を指差しながら答えた。

「何か、変な黒い粉みたいなのが鞄に付いているから、それが気になって……。いつの間に付いたんだろう……」

「あら、本当ですわね」

モニカの鞄に目をやったマルセラが、黒い粉を見つけて呟くように言った。

「私の鞄やマルセラさんの鞄にも、同じものが付いていますよ」

注意を喚起（かんき）したのはオリアーナだ。「ワンダースリー」の中でも最も頭が回る彼女は、ポケットからハンカチを取り出し、早くも粉のようなものを自分の鞄からハンカチに払い落として観察している。

「少し光沢があるようにも見えます……何かを焼いた時に出る灰などとは違うようですね」

そう言うと、オリアーナはハンカチを顔の近くまで持っていき、その粉の匂いを嗅いでみる。

「……匂いはないですね。毒、とかいう訳でもなさそうですが……」
残念ながら、彼女にもこの黒い粉の正体が分からないようだ。
「何ですの、これ……」
眉を顰めながらマルセラが呟くように言った時、モニカが疑問を呈した。
「この粉、いつ頃から付いていたんでしょう。今朝、ティルス王国の王都を発った時にはこんなものは付いていなかったはずですが……」
そう、この黒い粉はいったいいつ付着したのかが疑問である。
「お昼の時点でも付着していませんでしたから、おそらく昼から夕方にかけての間に付着した、ということになりますわね」
そう言いながら、マルセラはモニカの衣服の背中側を払った。そこにも黒い粉が付いていたのだ。
「あ、衣服にも……」
マルセラの行動の意味に気付いて、モニカが声を上げる。
「背中に背負っていた鞄と、衣服の背中側に付いていた。ということは、私たちからみて後方、つまり東からこの粉が流れてきた、ということになりますね。そういえば今日、特にお昼以降は私たちの背中から風が吹き付けていました」
記憶をたどりつつオリアーナが意見を述べる。
「ということは……この粉は東側から風に乗って流れてきたようだ、ということになりますわね」
そう言った直後、マルセラは不意に何か不吉なものを感じた。
自分たちからみて東側、つまり風上には、ティルス王国の王都がある。そこでは、自分たちの最大の旧友たるアデル・フォン・アスカム……現在は身分を隠してマイルと名乗っている……が、ハンターとして活動しているのだ。
その王都の方角から流れてきたらしい、謎の黒い粉。これはいったい、何なのだろうか。
(何とも、嫌な予感を感じますわ……。アデルさん、どうかご無事でいてくださいまし……)
マルセラは心中密かに、アデル、もといマイルのことを案じていた。

そして、それに気付かないモニカとオリアーナではなかった。

「ワンダースリー」の3人が、謎の黒い粉についての考察に明け暮れているその頃、ティルス王国の王都には闇(やみ)の帷(とばり)が降りていた。ただし、それは太陽が沈んだことによる夜闇ではない。何故なら、この日は雲1つない快晴であるにも関わらず、王都の空には星1つ見えていないからである。

そう、この闇は夜の闇とは別種のものである。

そして、異様な闇に閉ざされたこの街の光景は、凄まじいものになっていた。今の状況を言葉で表現するとするなら、いったいどんな言葉が適切であろうか。候補は幾つかある。例えば「修羅場」とか「パニック」とか。

だが、その中から最も相応しい言葉を選ぶとするなら……おそらく答えは1つになるだろう。

「あああああああああ!!」

闇の中、獣のような咆哮が響く。その方角を見れば、そこにいるのは獣などではなく、1人の少女。返り血に染まった長い銀髪を振り乱し、その手に持った剣を振るっている。その剣もまた、返り血で赤黒く染まっていた。

そして、その少女の様子はどこからどう見ても普通ではない。眼は見開かれているが、その目が赤い光を放っていたのだ。また、彼女の全身からはぞっとするほどの狂気が溢れている。

と見る間に、少女は手に持つ剣を思い切り振り下ろし、1人の男性の身体を縦に断ち切った。頭部をカチ割られた男性は、灰色の肉片と大量の血液を周囲に撒き散らし、足の力を失ってうつ伏せに倒れる。当然ながら、この男性は既に事切れていた。

そしてこの男性も、少女と同じような状態になっていた。農民だったらしい身なりのその男性は、畑を耕すのに使う農具を高々と振り上げ、少女の脳天にそれを振り下ろさんとしていたのである。

この少女こそ、マイルであった。明らかに正気を失っている。

では、いったい何があって彼女はこんなことになったのか。

それは、「赤き誓い」の面々が「ワンダースリー」の面々と別れた後、数刻が経過してからのことだった。

夕方になり、西側の空が茜色に染まり、各家庭では夕飯の支度に入ろうという頃、異変は唐突に起こった。不意に、王宮の方から急を知らせる鐘の音が響いた。それとほぼ同時に、空が真っ暗になったのである。

「何？」

「お城の方で、緊急事態の鐘が……!?」

宿屋の部屋で寛(くつろ)いでいた「赤き誓い」だが、レーナとメーヴィスが真っ先に動いた。王城に面している側の窓に歩み寄り、窓を開けて外を見る。

そして、異常事態に気付いた。

「おかしい……まだ陽は沈んでいないはずなのに、もう真っ暗になってる……？」

メーヴィスの呟きに、ポーリンとマイルも窓辺に寄ってきた。

陽が沈むにはまだ少し時間があるはずなのだが、外はもう夜の帷が降りたかのように真っ暗になっている。しかも、通りを挟んだ向かい側の家並みすらも見えないほど、深い闇だった。

「何でしょう、これ……」

ポーリンが呟く。

その瞬間、

(!!)

「ぐあっ……！」

マイルは唐突に、激しい頭痛に見舞われた。金属バットのフルスイングで頭を殴られたかのような電撃痛が走り、マイルの口から悲鳴が漏れる。

「「マイル!?」」

3人が慌てて駆け寄ってくる中、マイルは何かおぞましい感覚を感じていた。それは、頭蓋骨の内側から伝わってくる。まるで、脳が溶

けて壊れていくかのようだ。
　脳が壊れていくのではないか、と思えるほどの状況の中で、マイルの灰色の脳細胞は様々な可能性を……今起きているこの事象の原因が何であるかという推測を、必死にリストアップしていた。というのも、今王都を覆っている闇は日没による闇とは異なるものだ、と彼女は認識していたからだ。ならば、この黒い霧のようなものは、いったい何であろうか。
（くろいきり……ポケットに入るサイズのボールから出てくるモンスターのもの……じゃない。あれは視界を悪くして、わざの命中率を下げるだけのものだったはず。
　火事の煙……焦げ臭い匂いがしないから、それも違う。ならば……もしかして！）
　一瞬の時間の後、１つの答えが導き出された。そしてそれと同時に、マイルは自分たちに待ち構える未来を悟った。
（この黒いものの正体は……まさか、人や竜を狂わせるウイルス的なもの!?　だとすれば……！）
　こうして考えている間にも、頭痛はさらに激しくなっている。もう、一刻の猶予もない。
「皆さん……逃、ゲ……」
　しかし、運命とはどれほど残酷なものなのだろうか……時間切れであった。
「がああああああ!!」
　皆さん逃げて、と言いかけたマイルの喉から、凄絶な咆哮が迸る。
　メーヴィス、レーナ、ポーリンの３人がぎょっとして固まった、その一瞬のことだった。
　ずしゃあっ！
　ランプの頼りなげな光によって照らし出された宿屋の部屋、その中を一筋の銀色の光が駆け抜けた。そしてそれと同時に、鈍い音が響く。
　今の一瞬の間に、いったい何が起こったのか。その答えを求めようとしたレーナの五感が、あるものを捉える。

怒り声にも似た絶叫と、声にならない悲鳴。突然鼻に押し寄せてくる、腥さが混じった鉄の臭い。そして。

右の第１０肋骨辺りから左肩までを一刀の下にバッサリやられ、真っ赤な噴水を噴き上げて仰向けに倒れるポーリンの姿。それと、狂ったような叫びを上げながら、血塗られた剣を振りかざすマイルの姿だった。

「……え？」

何が起きたのか、全く理解できずに固まるレーナ。いや、目の前で起きた光景自体は把握したのだが、脳がそれを受け付けない。

ポーリンは、明らかに殺されたのだ。それも、「この身体に赤い血が流れている限り、友情は不滅だ」と誓ったはずのマイルによって。

これはいったい、どういうことなのか。

しかし、それについて考える時間は、彼女には残されていなかった。

どしゅっ！

「!?」

不意に、目の前にマイルの顔が現れたかと思うと、硬い音を立てて、何か棒のようなものがレーナの胸に突き立った。それが何なのかを理解した瞬間、強烈な痛みがレーナの知覚野に押し寄せる。

「……！」

だがその直後、ゴリッという嫌な音を聞いたのが、レーナの最後の記憶となった。

「うるあああああああ!!」

鮮血の海に倒れ伏すレーナには一切構わず、奇声を上げながらマイルはメーヴィスに斬りかかる。仲間のうち2人をやられては、流石のメーヴィスも状況を直視せざるを得なかった。すぐさま剣を抜き、マイルの一撃を受け止めようとする。

ぎぃん！

打ち合ったのは、ただ一合。ただ一合だけで、メーヴィスの手から長剣が離れ、天井に突き刺さった。

元々メーヴィスは、女性だということもあって、単純な膂力に優れるわけではない。このため、創造主からの「転生特典」によって人と

は思えないほどの膂力を持たされていたマイルの一撃は、捌き切ることが難しかったのだ。
しかもどういうわけか、マイルの膂力は通常では考えられないほどに強化されており、その一撃は非常に重くなっていたのだ。そのため、メーヴィスはただ一合で剣を弾き飛ばされたのである。
ずしゃあっ！
「がはっ！」
そして、マイルの行動速度も大幅に跳ね上がっていた。その結果、メーヴィスは短剣を抜く前にマイルに斬り伏せられてしまったのである。
「あああああああああ!!!」
緋色の凶光を瞳に漲らせ、明らかに正気を失っているとしか思えぬ声を上げながら、マイルは部屋の窓ガラスを破って外へと飛び出した。ここは建物の2階だというのに、着地したマイルの身体には怪我1つない。
闇に閉ざされた通りを駆け出すマイル。既にあちこちで騒ぎが起きており、狂った人々同士が殺し合いを始めていた。マイルも、その混乱を構成する一欠片となる。
闇の中に、マイルの瞳から漏れた凶光が赤い残光となって走った。

そして今に至る、という訳である。
マイルは狂気のままに、周囲の人々を次々と殴打し、あるいは手にした剣で斬るか殴るかして斃していく。もはや理性など失われており、ナノマシンへの指令や魔法の使用もできなくなっていた。
だからこそ、普段の状態なら気付くだろうものにも彼女は気付かなかった。いや、彼女だけでなく、他の人々も誰1人気付かなかった。
闇に閉ざされた空に、黄金色に光る物が1つ浮かんでいる。その光は太陽や月の光の照り返しではなく、自ら放っているものだ。
光を放つそれは、一体のドラゴンらしきものであった。金色にも見える光を放つ純白の鱗と甲殻に身を包み、四肢の他に身体全体を覆い隠せそうなほど巨大な翼を備えている。その翼は独特の形状をして

おり、前縁部に巨大な爪があった。翼脚も非常に太く、おそらく地面に降ろして脚の1つとして使うことも可能だろう。

虹色にも見える輝きを放つ翼を広げ、空を舞うその姿は非常に神々しく、神かと錯覚してもおかしくないほど荘厳であった。だがよく見ると、このドラゴンは全身から黒い霧のようなものを大量に放出している。いや、よく見るとそれは霧ではなく、非常に微細な黒い粉のようなものである。それが大量に空気中を漂い、星や月の光さえ遮っていたのだ。

大気中を舞い、風に流されて動く大量の黒い粉と、それによって形成された闇。そしてその闇の中に浮かぶ、残酷なまでに美しい黄金の光。その光と闇の下で、人々は周囲にいる他の人間に見境なく襲いかかる。そして、同族同士で凄惨な殺し合いを繰り広げる。まるで、その光が災厄を引き起こしているかのように。

空すら覆い隠した黒い粉、その中を舞う黄金色のドラゴン。その真下で、人々は狂気に突き動かされたように、なおも殺し合いを続けていた。

このような状況を最も適切な単語で表現するとするなら、それはおそらく「バイオハザード」だろう。

この日、ティルス王国は、突然舞い降りたたった一体のドラゴンらしき存在によって滅ぼされた。それも、一夜にして王都を陥落させられたのである。

なお、この惨劇を引き起こした黄金色のドラゴンはいったい何者なのかというと、少なくともこの世界に生息していたものではない。こいつは、例の邪神教団の男たちが行った「召喚の儀」によって異世界から召喚された存在なのだ。

召喚されたこのドラゴンは、その場でその恐るべき力を振るい、邪神教団の男たちを全滅させた。その後翼を広げて飛び立ち、そしてティルス王国の王都に舞い降りた、というわけだったのである。

夜が明ける頃には、語るにはあまりにも生々しく血腥い大事件となったこの異変は、ティルス王国の王都のみならず同国の東部国境付近を除いて国土全体に蔓延(まんえん)していた。太陽の光すら飲み込まんが如

く、陽光を隠して空を覆う黒い粉。よく見ると、それを吸い込んだ人々が次々に発狂し、同族同士で殺し合いを始めている。いや、人のみならず、竜種、鳥、家畜、ゴブリンやコボルトのような魔物、昆虫に至るまで、あらゆる動物が殺し合いを始めていた。それらの動物は皆、よく見ると肌が黒ずみ、目は充血した上に赤い光を放つようになり、口から滴る唾液には黒いものが混じっている。そして、傷付けられた箇所から噴き出る血は、赤ではなく真っ黒な液体と化していた。どう見ても異常である。

ティルス王国でそんな大事件が起こっている頃、ブランデル王国東部国境の町の宿屋では、「ワンダースリー」の面々が寝込んでいた。3人とも顔が土気色になっている上に、妙なことに手や足に上手く力を入れられなくなっている。3人揃って同時にこのような状態になった、となると、何かの疾患に罹ったようだ。回復魔法も試してみたが、身体的倦怠感は消失するものの、それも一瞬だけで、すぐまた倦怠感が出てくる。

そして昼、太陽が南中する頃になると、ティルス王国では西部の一部地域を除くほぼ全土に黒い粉が広がり、それを吸い込んだ動物（人間含む）が次々に発狂し、身分や老若男女の別なく殺し合うおぞましい光景が広がっていた。法律も、文明も、食物連鎖システムですら崩壊し、全てが狂気と暴力によって支配されていた。

そしてその頃、ブランデル王国東部の国境の町で突然、暴動が発生した。……いや、「暴動」というのは貴族の領主やハンターギルドに対して報告が行われた際に使われた表現だ。実際は、ただの暴動ではない。

……そう、お察しの通り、ティルス王国で発生しているものと全く同じ事態が、ブランデル王国東部国境の町を襲ったのだ。その中心にいるのは、「ワンダースリー」の面々……のうちマルセラだけである。モニカとオリアーナ？　2人とも、一番最初に発狂したマルセラにやられて、あの世に叩き込まれました。

ギルドのハンターたちや貴族領軍の兵士たちは、協力して暴動の鎮圧に当たろうとした。しかし、上手く行かなかった。というのは、暴

れ出した人々と正常な人々の区別はすぐにつけられたものの、暴れ出した人々は常識では考えられないほど身体能力が向上していたのである。剣で片足を切り落とされても、まるで痛みなど感じていないかのように地面を這ってでも襲いかかろうとする者もいたし、弓矢で心臓を抉られても倒れず向かってくる者もいた。明らかに致命傷となる攻撃であるにも関わらず、全く斃れない。

さらに、暴動を起こした者たちは、どういうわけか筋力がやたらと強化されていた。素手の力勝負で兵士に勝つ女性が出るほどである。彼らの体内でいったい何が起こっているのか。

悲劇はそれだけでは済まなかった。暴動を起こした者たちに噛まれたり、引っ掻かれたりした領軍の兵士やハンターが、急に暴れ出す事態まで起こったのである。暴動を鎮圧する側の人間が、暴動を助長する側へ回ったのだ。こうなってくると、暴動の鎮圧に向かった部隊は混乱し、そこに暴徒が一斉に群がってやられてしまう。こうして、貴族の領軍やハンターたちにも大きな被害が出てしまった。

そして、これは何も国境の町だけで発生したことではなかったのだ。あの黒い粉は風に乗ってティルス王国からブランデル王国へも流れ込み、それを吸い込んだ動物の狂暴化がブランデル王国東部で発生し始めていたのだ。しかもこれは、徐々に王国内へ拡散しつつある。

突然始まった流血と暴力の狂気は、ブランデル王国各地へと広がりつつあったのである。

この血腥い「黒き狂気の変」の大本の舞台となったティルス王国王都。微細な黒い粒子が太陽を覆い隠し、昼だろうと夜のように暗くなったその街には、数多くの死体が片付けられることもなく、腐敗するに任せて放置されている。いや、あのドラゴンらしき存在のテリトリー内に斃れてしまっている以上、死体を回収したくともできない、という方が適切か。

それらの死体の中には、当然ながらあの銀髪の少女……マイルのものもあった。腐敗によって人間の身体の原形が失われつつあり、また

特徴的な銀髪も艶が失われ色素が抜けかけているが、仰向けに倒れたその死体はマイルのものであることに変わりはない。

マイルはあの後、狂ったように暴れ続け……そして、力を使い果たしてこの地に斃(たお)れたのだ。身体はあちこち傷だらけになっており、中には明らかに骨折している箇所もある。それらの傷が残っているということは、彼女は回復魔法を使わなかった、ということの証左に他ならない。

マイルは受けた傷を回復することもせず、無理矢理にでも力を振るうかのように、ただひたすらに暴れ回ったのだ。その結果として彼女は力尽き、この地に斃れ伏すこととなったのである。

陥落から約1ヶ月後、そのマイルの死体に変化が起きた。腐敗した皮膚の一部が突然、内側から大きく盛り上がったのだ。それだけなら、死体内部で発生した腐敗ガスの影響かとも考えられるが、盛り上がった部分は明らかに形や範囲を歪に広げつつある。何かが内側から死体を食い荒らしている、としか思えない。

やがて、死体の腹部が内側から破られ、あるものが姿を現した。全身を黒い鱗と甲殻で覆った、芋虫のような生物。全長は２０cm程度とかなり小さく、太いミミズのようにも見える。しかしよく見ると、そいつには短いながらも四肢がある。

暗闇の中、そいつはマイルの死体から這い出ると、あちこち這いずり始めるのだった。新たな食糧を求めるかのように。

そしてこれが、「黒き狂気の変」「黒死病」などと呼ばれる、全世界を席巻した恐怖の始まりであった。

召喚された黄金色のドラゴンは、黒い微細な物質を風に乗せて大量にばら撒き、また自らも翼を以て飛翔しながら世界各地にその姿を見せた。その結果、まだ医療体制もまともにないこの世界では、連日数百人単位の人間が身分の貴賤・老若男女を問わず死んでいく、という悪夢のような事態が発生。しかもこれは人間だけに留まらず、ゴブリンやコボルト、オーク、角ウサギのような魔物から、ごく普通の鳥や牛のような家畜、昆虫、飛竜(ワイバーン)や地竜のような竜種、そしてなんと古竜

までもが「黒死病」にかかって次々と凶暴化、同族同士での壮絶な殺し合いの果てに死んでいった。ゴーレムやスカベンジャーのような無生物を除き、ありとあらゆる動物がこの病気に罹患し、死んでいったのである。

しかも、殺し合いを生き延びた者も、暴れ回った末に力を使い果たして死んでいくため、「黒死病」に罹った者はどう足掻こうが死ぬ運命を決定付けられる、という救いのない状態である。先に感染したマイルやマルセラも、例外ではなかったのだ。

また、マイルのような黒死病の犠牲者の死体から発生した芋虫めいた黒い生物は、「黒死病」による死体を食するうちに成長し、四肢と一対の翼を持つ竜の姿へと変わっていった。そう、首謀者兼実行犯であるあの金色のドラゴンと同じ姿になったのだ。……身体を覆う鱗や甲殻の色は黒いままである上に、角がないが。

それらの黒いドラゴンも、黄金色のドラゴンと同じく黒い物質を撒きながら世界各地を飛び回った。それによって、「黒死病」はますます拡散していく。

ティルス王国に黄金色のドラゴンが降り立ってから3年後。

ティルス王国は既に滅亡し、その王都は廃墟と成り果てていた。街のあちこちに転がっていた死体は、今やバクテリアやスカベンジャー（ゴーレムを統括している「シャカシャカ様」ではない。他の動物の死体を餌とする、アリやその他の昆虫・微生物のことである）によって分解され、骨くらいしか残っていない。建物は補修されることもなく、雨風に打たれ、崩れるに任せて放置されていた。

あの黄金色のドラゴンは、ティルス王国国土一帯に黒い微細な粉状の物質を撒き散らし、1ヶ月以上も王都に留まって大量の黒い粉を風に乗せて散布した後、いずこかへ飛び去った。そのためティルス王国の王都は、人々を含む全ての生物が死に絶え、小鳥の囀り1つ聞こえない死の都と化した姿を、白日の下に晒すことになったのである。

そんなある日、旧王都は突然、真っ昼間から闇に閉ざされた。まるでそこだけ夜になったかのように、建物の廃墟群は闇に覆われた。

いや、それはよく見ると闇ではなく、灰のような微細な黒い粉が大

量に集まってできた闇だった。それが陽光すら遮り、闇を作り出しているのだ。
そこへ響く、羽ばたきの音。それは、黒い粉によって覆われた空から聞こえてきた。
やがて、闇を裂くようにして金色に光り輝くものが舞い降りてきた。地面に降り立ったそれは、外套を思わせる巨大な翼を背にはためかせ、頭部には天に向かって突き立つ2本の角を生やしたドラゴンだった。そう、あの「黒き狂気の変」を引き起こした黄金色のドラゴン……の子供が成熟し、各地の天を廻った末に生まれ故郷であるこの地に帰ってきたのである。
この他にも、あの異変の時に生まれた竜の子供の成熟体が各地に飛来。大量の黒い微細な粉を風に乗せてばら撒き、それによって周辺一帯の生態系は瞬く間に崩壊していった。病気が相手では、例え強大な軍事力を持つアルバーン帝国であろうとも敵わず、人々を含む動物や魔物は互いを殺し合い、各地を流血で染めていった。
そしてついにこの世界の国家、法は全て崩壊し、人々や動物は互いに殺し合いを繰り返した末に全滅した。世界全土が、黒い粉とそれによって起こる狂気に呑み込まれ、人々が築いた文明は崩壊した建物や荒れるに任せて放置された畑といった痕跡だけを残して、全て消え去ったのだった……。

「はっ!?」
目を開き、マイルはベッドの毛布を跳ね除けて飛び起きた。全身を嫌な汗がびっしりと伝っており、心拍数は普段の2倍くらいにまで跳ね上がり、息は完全に上がっている。
「はあっ……はあっ……」
息が上がったまま、マイルは慌てたように周囲を見渡した。そして自分が今いる場所がいつもの宿屋のいつもの部屋であること、周囲のベッドには「赤き誓い」の仲間がちゃんと寝ていることを確認し、「は

あーーー……」とゆっくり息を吐く。
「夢か……良かった……。でも、ひどい夢……」
小さく呟き、マイルはアイテムボックスに手を突っ込んで着替えを取り出した。仲間たちを起こさないよう気を付けて、なるべく音を立てないようにして着替える。流石に全身汗だくの状態で寝る訳には行かない。
静かに着替え終えたマイルは、脱いだ衣服をアイテムボックスに突っ込んで再びベッドに寝転がった。まだ夜が明けるにはだいぶ時間がある、洗濯は明日すればいい。そう考えたのだ。
毛布を被り、目を閉じながら、マイルは考えるのだった。
（今の悪夢の内容は……小説のネタとしては使えないな……）
マイルが考えていたのは、「ミアマ・サトデイル」のペンネームで自身が書いている小説のことだった。今さっき見た悪夢の内容があまりにもリアルだったため、小説にするかどうか検討しようとしたのである。だが彼女は一瞬で、その考えをウチケシた。
ミアマ・サトデイルの小説は、基本的に空想系やコメディ系のものばかりだ。こんなホラー要素を前面に押し出した話は、作風に合わないだろう。
それに、ウイルスなどという概念がこの世界には存在しない。それをどうやって説明するか、考えるのも面倒だ。
結局、この悪夢の内容は「夢オチ」という形でマイルの脳裏に留められたのだった。